

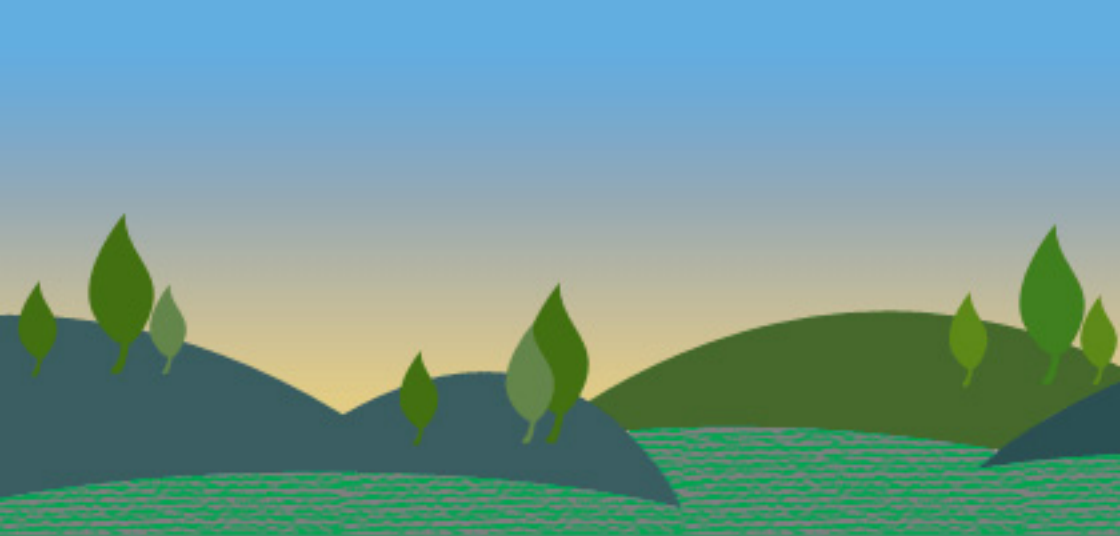
海念と保兵衛

…… 心こそ心まどわす心なれ、
心に心心ゆるすな ……



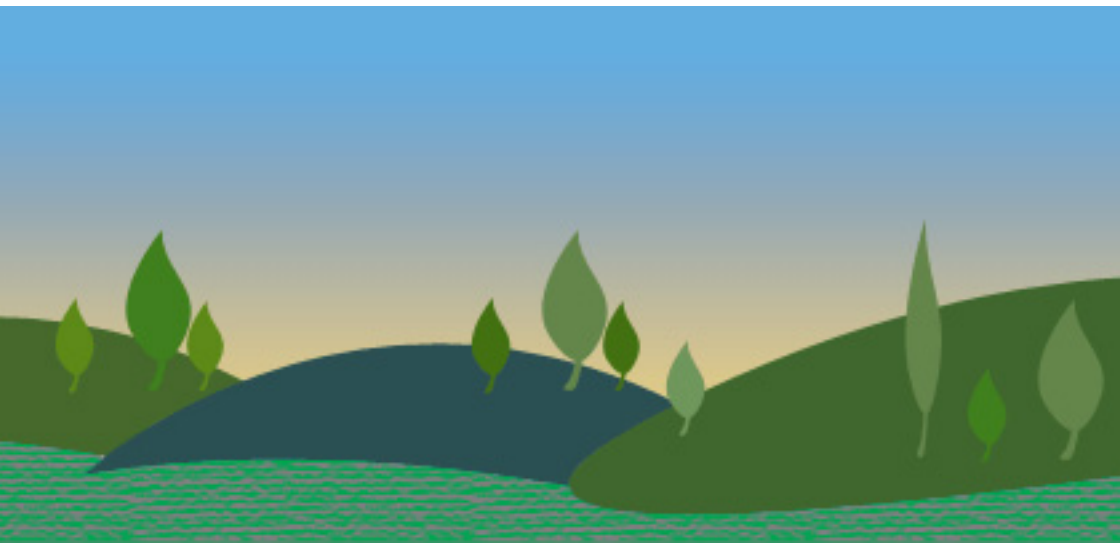
タイムトラベル!





「 海念と保兵衛
.....心こそ心まどわす心なれ、
心に心心ゆるすな..... 」

ひろせやすお



< あらすじ >

北品川はその昔、江戸から東海道を下る第一の宿、「品川宿」として栄えた。この北品川には少なくない史実が残されているが、その昔「沢庵和尚」で名を馳せた「東海寺」のあったこともそのひとつである。

沢庵禅師と時の将軍家光との緊張した関係は、「紫衣事件」などでも知られている。そこからは、沢庵禅師が幕府権力と対峙しながら禅の道を生きたという悲痛さが窺え知れる。そして東海寺とは、そうした沢庵禅師の苦渋に満ちた息遣いが残された寺であったに違いない。

時は昭和三十年代、三百年以上が経過した北品川に、あだ名を保兵衛という十歳の少年が登場する。その保兵衛はひょんなことから、沢庵禅師、家光、宮本武蔵などの名を耳にする江戸時代初期へとタイム・トラベルをしてしまった。

場所は、自身が住んでいる、三百年前の北品川、その東海寺の広大な境内の一角である。保兵衛を迎えたのは、東海寺和尚沢庵禅師その人であり、「清流」目黒川、賑わい始める品川宿、広重の版画そのままの品川海岸やその沖などの光景であった。

が、何よりも宿命的な出会いをすることになったのは、自分と同じ年、十歳の少年禅僧「海念」であった。この後二人は、意気投合し、時空を越えた友情に育まれていくことになる。

不遇な過去に縛られた海念は、沢庵と武蔵の縁によって東海寺で救われつつあったのだが、それにもかかわらず、海念は、沢庵自身が歩んだに違いない苦汁の生き様、その轍へと、避けがたく嵌り込んでゆくこととなる。海念の幼心に刻まれてしまった「過去」が、まるで海念自身を引き回しているかのようである。

保兵衛と海念は、時空が隔てるまま、その後成人していく十余年間、おのおのの時代環境の中であって、時代が提起する熾烈な課題を真摯に受けとめて生きる。そして、彼らの視界の片隅には、いつも沢庵禅師の影法師が収まっていたはずなのである。権力の蠢

きと、自身の心のざわめきとの双方を凝視して止まなかった和尚の影が.....

そんな中で、三百年以上を隔てながらも、あたかも同時並行的に展開するかのよう大きな出来事が二人を捕らえようとしていた。このくだりがクライマックスとなる。

海念にとっての「由井正雪の乱」がそれであり、保兵衛にとっての「全共闘運動」がそれであった。いずれも、老獺な権力が歯を剥き出しにして生贄を漁る、そんな局面だということになる。

人の心はどうしたら「自由」となれるのか。老獺で醜悪な権力が人の自由と、自由を願う人の心を奪うことは世事であろう。だが、人が本当に自由を得るためには、もうひとつ承知しておかなければならない視点がありそうである。

「権力と仏法のはざまに生きた和尚」とも称される沢庵禅師が吐露した言葉は、まさに時空を越えてのタイム・トラベルで現代に届きながらも、今なお現代人の胸中で生々しく共鳴し続けているようではないか。

「心こそ心まどわす心なれ、心に心心ゆるすな」(沢庵)



< 解 題 >

この小説執筆のひとつの動機は、子どもの頃から青年期までを過ごした「北品川」という地点への郷愁であったらう。

「幕末」の品川宿も、北品川の歴史を彩る見るべき史実であったが、東海寺・沢庵和尚周辺の史的事実は、燻し銀のごとくわたしの関心を引き続けたものであった。

出身中学校が東海寺の元境内に建てられていたことや、小学校のすぐ脇に、沢庵ゆかりの「弁天社」(安藤広重は『名所江戸百計 / 品川すさき』でこの「弁天社」を描いている。現在は「利田[かがた]神社」と名を変えている)があったこと、また、この神社のすぐ隣には、「鯨塚」と呼ばれる、江戸時代に品川沖で射止められた鯨を鎮魂する塚が残されていることなども、当該時代への興味を駆り立てる材料となった。

さらに、昭和三十年代の頃にはすでに、目黒川はほとんどどぶ川のように汚染されていたが、そんな川でも、子ども時代のわれわれには興味深く慣れ親しむ環境なのであった。しかし、その昔、小説の舞台となった頃には、目黒川は「清流」そのものであったと目される点には、ちょっとした驚きと強い興味が喚起されないではいられなかった。

そうした関心が、三百年前の北品川を何らかの形で蘇らせたいという思いにつながったとも言える。

したがって、文章化する際には、できるだけ史実に忠実であろうと願い、調査もどきの下調べを行うことも惜しまなかった。

主題は概ね定まっていた。東海寺の主、沢庵和尚こと沢庵宗彭の試みた「権力と仏法のはざまに生きる」生きざまについて近づいてみる。図らずも「(心の)自由」とは反対概念である「権力」に添うことを選ぶ結果となりながら、自由であり続けようとした沢庵の生き方には、時代を超えたテーマが脈々と息づいていると思えたのである。

ただし、偉人・沢庵を直接対象とすることは筆者が力量不足であ

ることと、また読者にとっても距離があり過ぎると思えたことにより、少年禅僧の海念や、現代に生きる保兵衛の登場としたわけである。

なお、この作品は、ホームページによって、週一回の執筆で50週、約一年間に渡って連載し続けたものである。こうした執筆環境であったことから、何よりも読者が興味を持続してゆくことに多大な意を払うことになった。したがって、この作品は「長編」ではあるが、読み始めると、「やめられない止まらない」という「かっぱえびせん」のような「あとに引く」作用が隠されているはずなのである。「一気に読み切る」そんな作品となっているようである。

文政11年(1828年)絵図
～御殿山周辺～

出典：品川区教育委員会
『しながわの史跡めぐり』



【 第一部 】

- (1) お坊さんは、ひょっとして沢庵和尚ですか？
- (2) 暗闇の中の少年の視線は、一点に向けられたまま凍っていた！
- (3) 保兵衛さん、今日からはあなたは禅僧になるんです！
- (4) 宮本武蔵に認められた同い年の海念さん！
- (5) 美しくせせらぐ目黒川と三百年前の品川海岸！
- (6) 海念さんって、なんてすごいんだ！ 完璧に尊敬しちゃう！
- (7) 家光を唸らせた超人の禅師沢庵和尚！
- (8) 百五十年も前に、海念が予感した品川沖の鯨！
- (9) 保兵衛は思い切って海念の実家を訪ねた！
- (10) 海念さんのお母さんが語った武士としてのお父上！
- (11) 二人の大人、武蔵と沢庵和尚による海念さんへの計らい！
- (12) 「けんだま」がきっかけとなった海念への「告白」！
- (13) 三百年以上未来の時代に対する海念の好奇心！
- (14) 『四つの図柄』の書の謎が、解けそうで解けない.....
- (15) お手上げとなった謎を知るのは和尚さまだけ？
- (16) 『不立文字(ふりゅうもんじ)』とだけ答えた和尚の思惑！
- (17) 語られることのない沢庵和尚の胸の内！
- (18) せっかくのこんな時に江戸城が大火事だなんて.....
- (19) さまざまな心で受けとめた江戸城の大火事！
- (20) 「へえー、そんな筋書きになっていたんですか.....」
- (21) 「ええーっ、そんなー。三十年以上も将来のぼくが.....」
- (22) 無の境地を目指すのじゃ！ ここでの思いに引き摺られてはならぬ！

【 第二部 】

- (23) 保兵衛らしい現代への生還ぶりと、海念からのみやげ！
- (24) 「あるいは、保兵衛さんは苦労不足かもしれませんね！」
- (25) 沢庵和尚の遷化と保兵衛、海念の青春の挫折
- (26) 自分を恥じ入るかのような印象が溢れる海念！
- (27) ジョン・レノンのあの反権力的スタンスは.....
- (28) 保兵衛の不吉な予感と海念の旅立ち
- (29) 夕靄かかる大川での親子心中！ そして海念
- (30) 直太郎、今日からおめえはうちの子だあ！
- (31) 浪人中村小平太どこのとの出会いに始まるふたすじの糸
- (32) 海念！ 魔術師たちの罠に近づかないでくれ！
- (33) 運命の糸を手繰り寄せてゆくこととなる海念！
- (34) 浪人の親子に降りかかる災難と海念の苦肉の策！
- (35) 保兵衛の懸念がもどかしい夢で海念に届く！
- (36) 目の前の総髪で袴姿の男を見定める海念！
- (37) 由井正雪への三人三様の評価と知恵伊豆！
- (38) 奇遇としか言いようのない神田で遭遇した二人！
- (39) 人生をたった一つの希望に託してはいけない！
- (40) 白銀で被われた眩い東海寺は海念の前途を祝福する？！
- (41) 知恵伊豆とともに悪知恵を働かす者たちの密談！
- (42) 権力欲の獣たちの餌食になんかさせるものか！
- (43) 知恵伊豆の密偵、林理左衛門たちによる攪乱！
- (44) 敵の恐さを知る小平太には妥当な判断ができたが.....
- (45) 十三郎殿をむざむざひとりで死なさせるわけにはいかない！
- (46) 弁天社での出来事が海念の運命を変えてしまった.....
- (47) 一陣の潮風が、運命の連鎖をかたちづくる.....
- (48) 十三郎殿、拙僧が、故郷の諏訪までお供いたしましょうぞ！

- (49) 思いつめた三人目の時空超越者、静さん！
- (50) 強い心でありえないなら、せめてやわらかい心で.....

【第一部】

(1) お坊さんは、ひょっとして沢庵和尚ですか？

少年は、木陰から覗く秋空と流れる雲にぼんやりと眼をやっている。半ばうとうとした様子でもあった。

少年を載せた伝馬舟は、もやい綱が荏原神社に面した護岸の突起に引っ掛けられるかたちで繋がっている。舟を浮かべる目黒川は、流れるでもなく滞るでもなく、ゆったりと水を湛えていた。あいかわらず黒く濁った川の水が、伝馬舟の側面でピシャピシャと小さな波音をたてていた。

こんなところが見つかったら大変なことになるのを、少年は十分承知してはいた。だが、眠くてたまらなくなり、そんな奇妙な場所、伝馬舟の中で奇妙な格好で身を横たえていたのだった。川面の揺らぎで、伝馬舟は気持ちよく揺れてもいた。程近い京浜国道を流れる単調なクルマの音が聞こえてもきた。何とも無心な心持ちとなり、次第にボワーッとした睡魔が少年を捕らえ始めていたのだった。

少年は誰かの呼び声で目が覚める。いつも早朝に出勤する父親に、起こしてもらうことを頼んでいたのだった。早朝マラソンの自主トレをしようと決めていたのだ。人一倍負けん気の強い小学生であった。品川区の体育大会出場に選ばれて、すっかりその気になっていた。

「うーん、分かった」

とムニャムニャ言いながら、上半身を起こす。が、頭の中はもやーっとしたままであった。早朝の、人通りのない通りを走りこむ自分の姿をイメージするところではない。父親は、

「じゃ、出かけるからな」

と言って出かけた。

「行ってらっしゃーい」

と返答したつもりとなっていたところまでは覚えていた……。

再び、誰かが少年を呼んだ。

「おいおい、そのわらべ、起きなされ！」

聞き覚えのない野太い声が寝ぼけた少年の耳を捉えた。やや肌寒くなった初秋の日はすでに傾き、もはや薄暮となりかけていた。一瞬の間、少年はパニックに襲われる。「自分はどこに？ ここはどこ？」というほどに、皆目収拾がつかない困惑の気分投げ出されていたのだ。

辺りは見覚えのない光景である。川岸には葦が生茂っている。微かに夕日を残した方向に建物らしき光景などはいっさい見当たらない。ところどころに小高い林を背負った丘や田園がうら寂しく広がっているだけだった。自分を載せた伝馬舟を浮かべる川には、見覚えのない澄みきった、涼しげな水がさらさらと流れていた。

「日も暮れるというに、そなたはここで何をしているのじゃ？」

誰かが、伝馬舟のすぐ脇に佇んでいる。その足元からは背後の岸に向かって大きな影法師が横たわっていた。暮れなずむ残照が、不思議なほどに巨大な影法師を作り出していたのだった。

少年は、目を擦り擦り声のする上方に顔を上げた。すると、一人の僧侶らしき人が自分を見つめて立っている。朱色の残照に映える顔はすでに六十歳を超える年寄りの面持ちがうかがえた。

「わ、わかりません……」

少年は、途方に暮れた心細さをそのまま声にした。そして身を起こし、伝馬舟の中で立ち上がり、舟から降りた。ズックの足元に寄せるさざなみは、ひんやりとはしていたが、濡れることを一向に気にさせないほどの清らかさだった。

少年がその僧侶の背後を見渡すと、小高い場所に真新しい立派な寺が望めた。

「ここは、どこなんですか？」

「これはこれは、早々に難しい問答をなさるわらべじゃな」

「????」

「此処(此岸)は此処にして此処に非ず。無住(むじゅう)の境地に入らば、彼の地(彼岸)のみあるべし」

「????」

「此の地の俗名は、お上が建立せし品川の東海寺なり」

「えっ、東海寺？ 姉が通っている城南中の近くにあるあの東海寺？ そうすると、お坊さんは、ひょっとして沢庵和尚ですか？」

「おうおう、そなたはわしのことを承知なのか」

「で、お上というのは、どなたですか？」

「わしの名を知らながらお上の名を知らぬとは、家光殿もなおいっそうの精進、精進」

「ひゃあー、沢庵将軍に家光和尚、じゃなかった、とにかく沢庵に徳川家光だなんてこりゃ一体どうなってるんだあー。いや、きっとこれは夢なんだ……」

「おかしなことを言うわらべじゃ。覚めている者がこれは夢ではないかと疑うことはある。じゃが、夢をみている者は、覚めるまで夢とは気づけぬものじゃぞ。まあ、よかろう。仮に夢であったとしても、此処をそなたが望んだことには違いがなかりやう。また、現(うつつ)は夢のごとし、夢は現に通ずじゃからの」

「きっと夢なんだ……。伝馬舟で寝ちゃって……。上潮で流されて……。一度父ちゃんに起こされて……。あーわかんない……」

「わしは、海岸への散策から寺へ戻るところじゃ。暗くなるで、よければ今夜は寺で休むがよい。舟は、その松の根にもやっておけばよかろう」

少年は、やつのことほっとした気分となりはじめた。すると、こらえていた空腹感がにわかにかき上げてきた。少年の内の腹の虫は、きっと夕飯にはあの『沢庵漬け』が膳に載るに違いないとらんでいたことだろう。

(2) 暗闇の中の少年の視線は、一点に向けられたまま凍っていた！

寛永十五年、徳川家光は禅僧沢庵和尚のために、品川に東海寺を建立した。当時の品川のこの一帯は、家光が鷹狩に出向くような場所であった。寺の背後には鬱蒼とした山林が迫り、寺の敷地には一面田園が広がっている。森が散在し、目黒川を挟む谷も深く、その清流が品川の海へと注いでいた。松林、竹林越しに海原も望め、山紫水明の景観だったのである。

こんな場所であったこと、和歌を愛し、自然を愛する沢庵和尚の目に叶ったことが、丹波の小庵をこそ己が定住の場と見なし続けてきた沢庵和尚に、ようやく移住の決意をさせたのであった。ただ、「紫衣(しえ)事件」(寛永六年)から覗ける、禅の道と権力(幕府)との緊張関係といった解きがたく心煩わしい問題が、和尚の胸の内に潜んでいなかったとは言えない……

「和尚さん。和尚さんは、ぼくが何者なんだか気にならないんですか？」

もうすっかり暗くなろうとしていた寺への道すがら、少年は尋ねるのだった。

「どう気にすればよいのかな？」

「だからさあ、おまえはどこから来たのじゃ、とか、ひょっとしておまえは違った時代から、何かの拍子でこの時代に紛れ込んでしまったのではないのか、とかさあ……」

「そうなんじゃろ。そのようなことは最初から承知しておく」

「ええっ、じゃあ、ぼくはやっぱり、タイムトラベルしちゃったっていうわけー？ こりゃ大変だ！ みんなが心配するじゃないのー。どうする？ どうすればいいんだあー。和尚さん、そんな涼しい顔しないで教えてよー」

「まあまあ、往生際の悪いわらべじゃのぉ。ほらほら、寺に着いた」
が、その時和尚は、思い立ったように立ち止まり、振り向いて言う

のだった。

「時空を戻るとはた易いことじゃ。じゃが、こじらせてはいかん。寺の者たちには、他言は無用ぞ。よいか」

少年は黙って頷いた。

「おーい、海念、海念は居らんか。今戻ったぞ」

沢庵和尚は、寺の玄関で、若い弟子の海念を呼びつけた。そう言えば、海念は少年と同じ年の十歳前後なのであった。

「お帰りなさいませ、和尚さま。はっ、そちらのお方はどちらさまでしょう？」

「こちらはな、海路遠路はるばる旅しているお方じゃ。そうじゃな。何と言うたかの？ そうじゃそうじゃ保兵衛さんだったかの？」

「ええーっ。何でそんなことまで知ってんのー？ 確かに、ぼくのあだなはやすべえだけど……」

「すると、十兵衛様にゆかりの方？ 和尚さまのお知り合いの柳生宗矩(むねのり)様ご子息の柳生十兵衛様の？」

「何を言っておる。無関係、無関係じゃ。今夜は、いや、しばらくは滞在されることになろうかな……、海念、よくお世話するのじゃぞ」

少年は、海念ほか数名の弟子たちとともに、禅寺ゆえの質素な夕餉を済ました。やがて弟子たちは、夜の修行のため本堂へ向かい、少年はひとり残されることとなる。まだ建立されたばかりの寺は、木の香り、畳の匂いが漂い、少年は新しい旅館にでも通されたような気分でもあった。しかし、時々言い知れない不安が押し寄せてくるのを自覚した。

『和尚さんは、元の時代に戻るとはた易いことだと言ってはくれたけれど、どうやって戻るんだ？ 信じるしかないな。戻れるんだったら、この際思いっきり冒険しちゃうのもいいな。こんなことって、そうあるもんじゃないからな……』

暗くなった石庭をぼんやり眺めながら少年は廊下にぼつねんと座っていた。

「保兵衛さん、保兵衛さんの寝具はわたしの隣に用意します。朝の

お勤めは早うございますので、今夜はもう就寝されるのがよろしいでしょう」

海念は、質素な寝具を用意したあと、寺での修行生活のあらましを少年に伝えるのだった。離れた場所にある厠へも案内し、その使い方も説明する。起床は夜明け前で、朝餉前にはそれぞれが受け持った仕事をしなければならないこと、そして明日は、少年も海念とともに、焚き木を集めにゆこうという段取りもまとまるのだった。

床に就いたかと思ったら、海念はすぐに寢息をかきはじめた。が、少年は、しばらく寝付けないでいた。障子越しの月明かりだけの部屋の中は暗い。きょろきょろと眺めまわしているうちに、暗さに目が慣れ部屋の中の様子が見えるようになってきた。

とその時、少年は思わず「あっ」とつぶやき、あわてて右手を口に当てることとなった。身体がぞくぞくとしてくるのを抑えられないでいた。暗闇の中での少年の視線は、一点に向けられたまま凍るのだった。

(3) 保兵衛さん、今日からはあなたは禅僧になるんです！

寝つかれない夜を少年は悶々とするようになった。つい先ほど、偶然に気づいたもの、それが心から離れなかったからである。

『あれは、一体どういうことなんだろう？』

が、ようやくスーッと深い眠りに落ちていく少年だった。

「保兵衛さん！保兵衛さん！」

海念は、薄い掛け布団を背負い込むようにして縮こまって寝ている保兵衛を揺り動かした。初秋の夜明け前は一段と冷え込み始めていた。

「ハッ、ウーム……」

一瞬、ここは？ と思ったに違いない。だが、周囲は静かながら緊張感に満ち溢れていた。修行中の他の弟子たちがすべるように迅速な身のこなしで起床し始めていたのである。眠りに落ちる前のすべてが、ほどなくよみがえってきた。

そして、言うまでもなくあの「気掛かりなこと」を思い起こしていた。ちらっとそれに視線を向けてみる。が、やはり間違いではない。夜明け前ではあっても、薄明に浮かんだそれは、保兵衛の確信をただただ深めさせることになった。

早朝の座禅が終わるや否や、海念は保兵衛を井戸の近くに行くよう促した。

何のことだか分からず言うままになってその場所へ向かった。やがて海念は両手に何やら衣類を乗せて戻ってきた。

「保兵衛さん、今日からはあなたは禅僧になるんです」

海念が着用していたという白装束と黒い袈裟が、井戸端の脇の腰掛けの上に置かれた。そして、それらの上の手拭には、小刀が挟まれているのが見えた。

「和尚さんからの急なお言いつけなんです。わたしの古い装束で恐縮なんですが使ってください。それから、頭髪はわたしが剃らせていただきます。兄弟子たちもわたしが手伝っておりますので、腕は確かです。ご心配は無用です」

保兵衛は、啞然とした。もはや一言も言葉を差し挟む余地がなかった。しかし、保兵衛は、和尚には泣き言が言えても、同い年くらいのこの海念に向かってはそれが言えなかった。また、この子とは友だちとしてやってゆこうと考えてもいたからだろうか。

黙って海念の言うとおりになり丸坊主とされてゆく保兵衛は、多少みじめに見えたかもしれない。だが、これが最も自然な成り行きなんだろうと観念していたに違いない。

寺の外のこの時代の人たちと顔を合わせないわけにもいかないとするれば、海念さんとまるで双子のような格好となっているのが一

番無難なのだろうな。多分、和尚はそう配慮してくれたに違いない、と想像するのだった。

「イタッ」

「ごめんなさい。ちょっと手元が狂ってしまいました。でも傷にはなってません」

保兵衛は、その痛みから、こうしていることが決して夢なんかじゃないんだと改めて実感させられた。

「さあ、終わりました。さっぱりしましたでしょ。そうそう、薪集めは朝げが終えてから出かけましょう。和尚さんからも、保兵衛さんを寺の敷地と周辺を案内しながらお勤めしてきなさいと言われました」

とその時、突然木々の間でがさがさという音がして、薄茶色の野うさぎが駆け出した。

「うわっ、あんなものがいるんだ！」

「ここは、しばらく前まではお殿様の鷹狩の場だったくらいですから、野生の動物と頻繁に出会いますよ」

「お殿様というのは、家光将軍のことだよね」

「そうです、そうです。たまに、お来しになることがあるんですよ。お殿様は豪快なお方で、先日は、何か食したいと仰せになり、和尚さん発案の『たくわえ漬け』を添えてお出ししたところ、『これは美味じゃ、美味じゃ。何と申すものか』とお尋ねになられました。和尚さんが、備蓄のために考案した たくわえ漬け でございます、とおっしゃったら、『うーむ、和尚の発案ゆえに、今後は たくあん漬け と命名するがよかろう』と仰せになられました。みんなして大笑いをしたものです」

「へえー、そうだったんだ。家光将軍まで来られるお寺なんだね」

「武蔵さんも立ち寄られたことがあるんですよ」

「ひょっとしてあの剣豪の宮本武蔵？ ひゃー、ここはなんてとこなんだー……」

(4) 宮本武蔵に認められた同い年の海念さん！

「和尚さま、本日は保兵衛さんを案内しがてら薪集めをして参ります」

「おお、それがよかろう。境内は広いからのう。また、何かと用を頼まねばならぬことであろうから、品川宿や海岸も承知してもらっておくことじゃ。おお、おお、保兵衛さんも、すっかり禅僧におなりになったものじゃ」

沢庵和尚の前で、二人は白装束と黒袈裟に身をかため、頭には笠を、背中には背負子(しょいこ)を背負い、背丈には不釣合いな長い錫杖(しゃくじょう)を手にして立っていた。

日頃はどちらかといえば厳しい面持ちを崩さぬ和尚であったが、かわいい禅僧二人を目の前にすると、しわの寄った目元が思わず緩むのであった。

「和尚さま、本日は昼餉として握り飯をこさえさせていただきましたので、戻りは夕刻にしとうございます。よろしゅうございますか？」

「よかろう、よかろう。心配りしてゆくのじゃぞ」

「では、行って参ります」

二人は、先ず目黒川沿いに海岸に出て、品川海岸と品川宿を見てもわることにした。うっそうとした広い境内を通りながらの薪集めは、寺への帰途で果たすほうが順当な段取りだと思えたのだろう。

まだ薪を載せていない軽い背負子には、海念が炊いた麦飯の握りの包みの重さだけがかった。保兵衛などはすっかり遠足気分となってしまった。たぶん、海念もまた同様であったに違いない。

保兵衛は、三百年以上も前の品川の光景を目の当たりにできる期待感で胸をふくらませていた。自分が住んでいる北品川の八つ山下などは海の底なんだろうな。たぶん、旧街道の坂下すぐに海が迫っているはずだ。そうだ、台場小学校のある地域も海のはずなんだ。そもそも、幕末に台場が造られたのはこの後二百年も経過してのことだったはずだから……。それじゃ、何にも無いのだろ

うか？

「保兵衛さん、その下が目黒川です」

海念は足取りを止め、振り向いて言った。錫杖の扱いが規則正しい海念は、足運びも軽やかであった。急ぎ足で追うことになった保兵衛に数歩の開きをつくっていたのだった。

「海念さんは足が速いね」

「そうですか？ 兄弟子などはもっとずっと速いんですよ」

追いついた保兵衛の視界に目黒川の姿が広がった。松ノ木越しに望めるその川はまさしく美しい清流そのものであった。

「あれっ、あの小船は何でしょう？」

海念が指さす方向に目を向けた保兵衛は、一瞬ドキッとした。自分が「現代」からやってきたあの伝馬舟だったのだ。

『実は……』

と、海念だけには打ち明けておいた方がいいと保兵衛には思えた。が、その時海念が言葉を足すのだった。

「ああ、そうですね。保兵衛さんが品川の沖の船から乗って来られたものでしたね。保兵衛さんは、海路遠方から来られたと和尚さまがおっしゃっておられましたよね。そうですね」

察しがよく、屈託のない海念のことばに保兵衛は救われた。そして黙って頷くしかなかった。

「舳い綱をもっとしっかりと結んでおきましょう」

海念は小走りで川岸に近づき、舳い綱を引く。伝馬舟がズズーと砂利の岸へと乗り上げた。緩んだ綱を手にした海念は、それを松の幹に回し、見るからにしっかりとした結びを手際よく仕上げってしまうのだった。

「ありがとう。しかし、海念さんはすごいもんだね」

「実は……」

とその時、海念の方が身の上を明かし始めたのである。

海念は、この品川の漁師の家の子であった。さらに幼いころには、漁師の父親の手伝いをよくしたのだという。しかし、七歳の頃、

嵐の日に父が漁から戻らず、そのまま母と妹との三人暮らしになってしまった。父の兄弟の家の漁を手伝い続けることとなったそんなある日、品川宿で宿をとっていたある浪人が、幼いながら利発さにあふれた海念を認めることになったのだという。その浪人とは誰だろう浪々中の宮本武蔵であった。そして、その武蔵がかつて自分自身が子どもの頃に世話になった沢庵和尚に推す運びとなったのだそうである。

剣の道を極めつつも、孤独な幼少時に何がしかの思いを残し続けた武蔵は、海念の才が埋もれることを惜しく思ったのかもしれない。武蔵はその後、江戸に上る毎に東海寺に立ち寄り、年老いてゆく沢庵和尚の身体と、海念の健やかな成長を見守ったと言われている。

「そうだったのかあ。どうりで頭が良さそうな子だなあって思ったんだ。宮本武蔵に認められるくらいなんだもんね」

二人は、しばし川岸の岩に腰掛けて話し続けた。目黒川の川面は優しい秋の陽の午前の光を照り返し、鱗のように輝いていた。そして川は静寂を保ちつつ静かにせせらいでいた。とその時、

「保兵衛さんのお国はどちらなんですか？」

と、海念の関心が保兵衛に向けられたのだった。今度こそしかたなく、

『実は……』

と、ことばが口に出かかった。が、その時、保兵衛の目はあるものを見つけていた。川岸に乗り上げ傾いた伝馬舟の隅の方に転がっているものである。あの日、伝馬舟に持ち込んだ「けんだま」であった。学校への持ち込みは禁止されたばかりであったが、それほどに流行っていた遊びなのであった。保兵衛はふいに、これを海念にプレゼントしようと思いついたのである。

「ぼくのふるさとの話はまた別な機会にするとして、海念さんに差し上げたいものがあるんです」

保兵衛は、舟に近寄りその「けんだま」を取り上げた。

「それは何ですか？」

「これはね、ぼくのふるさとの玩具なんです。こうやってね、ホイホイホイッ、ホイホイホイッ」

「ヘエッー、おもしろそうですねえー。それをわたしに？」

はじめて海念は子どもっぽい顔、いたずらっぽく光る目つきになっていたのでした。

(5) 美しくせせらぐ目黒川と三百年前の品川海岸！

海念と保兵衛は、目黒川の川岸を海岸方向へ下って歩みを進めた。

ところが、保兵衛の顔つきは、川面のきらきらとする輝きを映してはいたが、なぜか沈んでいたのだった。こんなにも清く、さわやかで美しい流れが、どうして、自分が慣れ親しんできたあの魚の住めない目黒川になってしまったんだ！ というやりきれない悲しさが込み上げてきていたのである。

「保兵衛さん、どうしたんですか？ 悲しそうな感じじゃないですか……」

「いや、大丈夫。あんまりこの川がきれいなもんだから……」

「そうですね、『川は人の心なり、海は人のふるさとなり』です」

「えっ、それは誰のことばなの？」

「和尚さまの講話にあったのです。気に入ってるんです、このおことばを。『海念』という命名にも、その意味が込められていると信じているんです。だから、人々の苦しい心の流れを、寛く受け容れてゆけるそんな禅僧になれたらと願っています」

「……………」

「人の心は、この川のように激しく波立っているもんですよね。跳ねるようにうれしかったと思ったら、渦巻くように悩んでみたり……」

「けど、きっと、こんなに透明で美しいものなんだと信じています」

「……………」

保兵衛は、息苦しい気分となった。「現代」の目黒川を思い起こしていたのだった。海念さんの言うとおりなら、現代の人々の心は、あんなにも汚れて暗く、不透明になっているんだ、自分だって同じに違いない、と、一瞬めまいがするような思いに打ちひしがれるのだった。

ふたりは、街道を渡る小さな橋、境橋をくぐっていた。「この道が東海道の街道なんです。左手方向に、にぎやかな品川宿があります。さあ、もう海岸が近くなってきました。どうです、心地よい潮風が吹いてきますね」

やがてふたりは、松林を通して真っ青な海原が見渡せる位置に立つ。

「何て真っ青なんだろう！こんなにきれいな海は初めてだ！

あっ、沖に大きな帆掛け舟が何艘も泊まっているね！」

保兵衛は三百年以上も前の品川沖を眺望し、嬉々として感激するのだった。

「今日はお天気も良いので特別にいい眺めですね。遠くの半島の姿もよく望めます」

そのあたりから目黒川は、左手方向に大きくうねり始めていた。海岸に接している川の向こう岸は、青い海を背にして姿のよい松林が広がっている。長い年月の間にできた細長い州が、落ち着いて形成されたものだと思わせるのだった。

波の音を耳にしながらふたりは明るい川岸を歩み進む。左手には、街道沿いに点在する宿場の建物の裏手が見える。たぶん、宿場とは言え、その閑散としたたたずまいにも保兵衛は意外さを感じていたに違いなかった。あの密集して華やかな北品川商店街に較べて、何とも質素に過ぎたからである。

「あれっ、あの社みたいな建物はなんだろう？」

保兵衛が指差す方向、川の対岸の州の先端には、何本かの松の木に囲まれた小さなお社が見えていた。

「あれは、目黒川を護る『弁天社』なんです。和尚さまも大事にしておられます」

あっ、と保兵衛は、その時ピンときたのだった。台場小学校の正門から旧街道へ向かう道の右手奥にあるあの『弁天様』に違いないと。確か名前は『利田(かがた)神社』とつけられていたが、みんなは『弁天様、弁天様』と呼んでいたのだった。きっと境内に『鯨塚』もあったあの『弁天様』に違いない！

ドキドキと胸が高鳴ってくるのを抑えられない。すると、台場小学校がある『お台場』はあの州の向こう側に造られることになるんだ、そして、ぼくが住んでいる八つ山下は、ああ……あの明るい波間のあの辺くらいなのだろうか……、とキョロキョロ見回す保兵衛であった。

だが、頭の中の「現代」の品川の姿と、眼前に広がる現実を、目まぐるしく比較している保兵衛に、突如言い知れない不安と恐怖が訪れるのだった。何をどう考えていいのか、何を信頼できるものとして考えればいいのか、そんなわけの分からない考えが頭の中に広がり、不安が渦巻いてしまったのである。「タイム・トラベル酔い」とでも言えるのだろうか。

保兵衛にとっては、以前のお正月に、いたずらでお酒をぐい飲みした時に迎えた狼狽ぶりと似たような、そんなうろたえなのであった。目をつぶり、何度も何度も激しく頭を左右に振る。そして、とうとうしゃがみこんでしまうのだった。

「保兵衛さん、保兵衛さん、どうしました？大丈夫ですか？」

海念はしゃがみ込む保兵衛の顔を両手ではさみ、覗き込んだ。尋常ではないものを感じ取ったのか、

「保兵衛さん、立ってください。下腹に手をあてて、深呼吸しましょう。そう、いいですか、ゆっくり息を吐き出します。ゼーンぶです。そして、はい、ゆっくりと吸います。いいですか、ひとつ、ふた一つ、ひとつ、ふた一つ……」

海念の言うままに深い呼吸を続ける保兵衛である。そしてようやく視線が定まる落ち着きを取り戻し始めるのだった。

「どうしたっていのでしょうか？ 驚きました」

「うん、急に気分が悪くなってしまったんだ。でも、たぶんもう大丈夫」

「あっそうか、きっと空腹の仕業ですよ。そうだ、そうなんですよ。景色もいい場所ですから、さっそく昼餉にするとしましょうか。せっかくだから、あの橋を渡り、『弁天社』でいただくとしましょう」

ふたりは社を参拝したあと、海を眺望する側の濡れ縁に向かう。背負子を降ろし、腰掛けた。背負子に括りつけていた包みには、朝餉の残りでこさえた麦飯のにぎりがふたつづつと「たくあん漬け」が二切れほどづつが収まっていた。竹筒の水筒もそれぞれが持ってきていた。

海念のしぐさを真似て、握り飯に合掌したあとふたりは食べ始める。

保兵衛は握り飯を左手にして、東の空を群れて飛ぶ鳥をぼんやり眺め、あれはかもめだろうか、がんだろうかと考えるふうではある。しかし、心は先ほどの混乱を思い返していたのであろう。一度は、この際楽しんでしまおうと楽観ぶってはみた。が、いざ、自分の見知った場所をこのようにまったく別様に見せられてしまい、その驚きを収拾できなかつたに違いなかつたのだ。

と同時に、海念さんは何から何まで大した子だとも感じていたのだった。年や体つきは自分と同様なのに、まるで大人のようにしっかりしていて頼りになる子だと。

保兵衛は、海念の方に顔を向け、視線があった時、思い切りにこっと笑うのだった。

「どうしたんです？ 妙ですね」

「いや、何でもないんだ。いろいろとありがとう……」

若い二、三本の松の木の下には、穏やかに波が打ち寄せている。その向こうには、うるこのようにきらきらと輝く海原が広がっている。

と、その時ふいに海念は耳をそばだてる動作をした。素早く食べかけの握り飯を包みに戻す。社の境内の中央に三、四歩進み出る。そして街道の方向を、ただ事ならぬ顔つきで覗き込み始めていた。

「保兵衛さん、ここでしばらく待っていてください！」

海念は、さっと濡れ縁に立て掛けていた錫杖を手にする。そして、橋を駆け渡り、街道めがけて疾風のように走り去ってしまうのだった。

(6) 海念さんって、なんてすごいんだ！ 完璧に尊敬しちゃう！

待ってるようにと言われたって、あれだけ海念さんが血相を変えていたのに自分だけが握り飯を食っている場合じゃないじゃないか、と保兵衛は考え、ばたばたと荷物をまとめ海念のあとを追っ駆けた。

やはり、街道ではただならぬ何かが起こっている気配が満ちていた。人々が小走りに向かう方向へ保兵衛も胸を高鳴らせて走る。が、人々は、ことを中心と思える個所から十分に距離をおいたところで、逃げ腰の姿勢でピタリと立ち止まっている。

中心には、海念だけが一人すくっと立っていたのだ。そして、海念の視線の先には、なんと大きな犬が、泣き叫ぶ赤ん坊の入った藁製の籠、稚蔵(ちぐら)に向かって、今にも飛びかかりそうに唸っているのだった。

突然、遠巻きの人垣から「お坊さん、早く、早く助けて！」という絶叫が聞こえてくる。海念は、その方向に顔を向け、口先に人差し指を立て、静かにするよう促している。赤ん坊の泣き声と、低くうなる犬の唸り声だけが響くようになった。

固唾を飲む人々の視線を浴びながら、海念は静かに深呼吸をしている様子である。そして、ゆっくりと錫杖を街道に横たえ、実に静

かに犬へと近づいて行く。下あごを引いた顔は、時々威嚇するように唸るその犬に向けて崩れることがなかった。

ところが、さらに静々と近づく海念に、不思議なことに犬の唸り声は次第に小さくなっていくのである。そしてほぼ一間ほどの距離となった時、海念はゆったりと左の手の甲を口に寄せる。唾で手の甲を濡らしていたのだった。その手を海念は静かに犬の方へ差し出すのである。何のまじないなのかと、人々はいぶかしがるのだった。

と、力んでいた犬は姿勢を崩し、海念の左手の甲をぺろぺろと舐め始めたのである。海念は、犬の頭をゆっくりとなでてやっていた。と、犬はごろりと横たわり、片足を上げ、海念に白毛の腹まで見せ始める光景に急変したのであった。

じわじわと人垣が縮まり始める。赤ん坊の入った稚蔵がすぐさま背後によけられた。そこへ、犬の飼い主らしき年配の旦那風の男が、恐縮した様子で現れた。そして、何度も何度も海念に例を述べ、その飼い犬に綱を掛け、きまり悪そうに連れて行くのだった。

あちこちから、最初はぱらぱらと、やがて波のような拍手が鳴り始めた。

「お坊さん、えらい！」

「東海寺の坊さんだね。さすが沢庵和尚さんのお弟子さんだ」

と、安堵した人々による賛辞のことばがあちこちから飛び交った。

呆然としていた保兵衛もやっと我に返り海念に駆け寄る。涙目をしながら、

「海念さんって、なんてすごいんだ。完璧に尊敬しちゃう。どうして、あんな技ができちゃうんだろう？」

「さあ、行きましょう」

話しはあとでというように、海念は促した。保兵衛は、街道に横たえられた海念の錫杖を拾い上げ、手渡すのだった。

ふたりは、再び『弁天社』に戻り、食べかけの握り飯を落ち着いて食べ始めるのである。海念は何事もなかったかのような涼しい顔

をしていた。保兵衛は、濡れ縁から垂れる両足をぶらぶらさせながら、一口食べるごとに海念の顔を覗き込んでいる。海念の口から、あの技の秘密が解き明かされるのを今か今かと待っていたのだった。そんな興奮が、タイム・トラベルの「酔い」をすっかり吹き飛ばしていたのだった。

「保兵衛さん、わたしはさきほどのあのようことができて大変うれしいです」

海念はそう言って顔を子どもっぽく崩すのだった。

「そりゃそうだよ。あんなこと、魔術師にだってできることじゃないさ。でも、海念さんが錫杖に頼ろうとしなかったのを見た時、はーんと思ったけど。でも、分からない。どうしてあの犬は大人しくなってしまったの？」

「心なんです。わたしも実は怖かった。自分に襲い掛かってくことも怖かったのですが、何よりも、あの赤子が襲われることにでもなったらということの方がなお恐ろしかった。まだ新しいお寺の名にも傷がつくし、心が乱れに乱れました。心を鎮めようとすればするほど、いろんな雑念が入り乱れたのです。

そこで、とりあえず、先ほど保兵衛さんに勧めたように深い呼吸を試みました。ひとつ、ふたひとつ、ひとつ、ふたひとつとね。すると落ち着いてきただけでなく、重要なことに気がついたのです。あの犬は決して野良犬ではない！ とね。何も身につけてはいなかったものの、あんなに太ってつやのある毛をした野良犬なんていませんからね。

きっと、周りが騒ぐもので、気が立ってしまったのでしょう。そこで、錫杖を置きました。そして、あの犬の心とひとつになろうとしたのです。大きな身体をしても実は臆病なあの犬の心になりきろうとしたのです。わたしの心からも雑念が次第に消えてゆきました。そして、飼い主もしていたであろう人間の唾を舐めさせたのです」

「……………」

保兵衛は、紙芝居を見い入るようにまばたきもせず海念の顔を

見ながら黙って聞き入っていた。

「保兵衛さん、しかし、この『技』は実は和尚さまがすでに実践されており、わたしはそれを真似ただけなんですよ」

「えっ、それはど、どういうことなの？」

ようやく保兵衛は、興奮のため枯れてしまいかすれた声で問い返すのだった。

「わたしも、兄弟子から初めて聞かされた時は正直言って疑問だったのですが……」

(7) 家光を唸らせた超人の禅師沢庵和尚！

海念は、兄弟子から聞いたという沢庵和尚の不思議な逸話を話し始めた。

東海寺が建立される二年前、寛永十三年頃のことだったという。沢庵和尚は、しばしば家光によって江戸城に招かれており、その時も和尚は柳生宗矩ほか、諸侯数人とともに、家光に伴い城内を散策していたのであった。

やがて、朝鮮から献上された猛虎を飼う檻に差しかかった時、突然家光が彼特有の所作に及んだのである。

「虎は死んで皮残す、人は死んで名を残すと言うのう。誰かあの虎の生きたままの毛皮を愛でて、生きたままで名をはせる者はおらぬか」

重い沈黙が支配する中、家光はさらに続けるのだった。

「ここは、やはり指南役の但馬(柳生)でなくてはならぬかのう。但馬、檻に入り虎を撫でてみよ」

と、いつも難題を出しては家臣たちを困らせたという家光は、追い討ちをかけて言い放つのであった。

周囲が冷や汗をかき心配する一方、柳生はもはやひくにひけない立場となっていた。やがて、檻の扉が開かれたのである。柳生は檻の内に入った。猛虎は、いまにもとびかかろうとする構えで、

柳生をにらんでいる。キバをむき唸り声さえたてていた。

しかし、さすが指南役の柳生は、鉄扇を正眼に構え、気迫で猛虎につめよってゆく。そして、鉄扇は猛虎の眉間に打ち込まれるや、勢いをそがれた猛虎はその場にうずくまってしまった。柳生は、その機を逃さず静かに近づき毛皮を撫でたのだった。

檻から出た柳生に、家光も他の者たちも、さすがは將軍御指南役だとの賛辞を呈するのだったが、これでこの緊張が解かれたわけではなかったのである。

海念の話にまばたきもせず聞き入っていた保兵衛は思わずことばをもらすのだった。

「このあと、沢庵和尚さんの番になるんだね……」

いっそうの興に乗る風となっていた家光は、目を輝かせながら沢庵和尚に向かって、言ったのだった。

「和尚。和尚の禅は人界に限らず、畜生界にもあまねく通じるものと申しておったのう。どうだろうか、但馬とは異なる法であの猛虎をなだめてみせてはくれぬか」

沢庵和尚は殊更の揺らぎもなく微笑んで応えた。

「仰せのとおり仏法は普遍でございます。但馬殿のごとき御し方には及ばないまでも、多少馴らす程度のまねごととはご覧いただけましょう」

「ではごめん」

と一礼のあと、沢庵和尚はおもむろに扉の内に入っていった。猛虎は、檻への再びの侵入に気を荒げ、唸りたてた。が、和尚は武器と言えるものは何も持たず、静かに近寄ってさりげなく手を差し出すだけであった。

猛虎はむしろ不思議そうにその手を見つめるふうとなる。そこで和尚はその手に唾を吐き、ふたたび差し出すのだった。猛虎はますます不思議そうに鼻先をその手に近づけ、くんくんと嗅ぐ様子をしたかと思うと、大きな舌を出してべろべろと舐め始めたのである。

すかさず、和尚はあたかも飼い犬の頭を撫でるように頭を撫でたかと思うと、耳の下や首筋などを撫で回した。もう、猛虎は大きな猫のごとく眼を細め、しかもごろりと横たわってしまったのであった。

固唾を飲んで見入っていた家光や諸侯一同の前に和尚が出て来た時、拍手が鳴るのだった。家光も、猛虎を制する剣道、仏道の硬軟二様の極致を知り、これ以上の満足はない様子を湛えていたのである。

また、すでに柳生宗矩は、沢庵和尚を禅匠と仰ぎ、「不動智」(不動明王のごとく、一心が動かず身がぐらつかない心境。一つ所に心が止まる執着から離れ自在となる境地。)こそ剣の極意と教えられていたのだったが、その心の働きをまざまざと眼前にすることができ感激していたのであった。

海念の話は一通り終わった。饒舌に語った海念は火のように顔を火照らせていた。

「海念さん、海念さんも立派だけど、沢庵和尚さんはすごいお坊さんなんだね。正確には分からないけど、『一つ所に心が止まる執着』というのは、ぼくもいつも経験しているように思う。気になって気になってしょうがないことって言う意味だよ。そんなことから自由になるにはどうすればいいの？」

「それが禅の修行なんです。わたしだってまだまだできていないんです……」

「だって、さっきあんまりっぱなことができたじゃないの？」

「それはそうですが、人というのは、自分にとって大事なことと思えば思うほど、そのことに執着してどうにもならないがんじがらめの地獄にはまり込んでゆくようなんです……。いま、情けないほどにこだわってしまっているものが、わたしにもあるんです……」

「よかったら話してよ」

「ええ……」

(8) 百五十年も前に、海念が予感した品川沖の鯨！

昼食を済ませた海念と保兵衛は、午後からの勤めである薪を段取りするため弁天社をあとにした。衆目を集めてしまった騒ぎがあって間もないだけに、街道を通る道は避けることになった。来た時と同様に目黒川沿いを二人は歩いていた。

秋の陽はまだ高く、二人の額には小さな汗が幾粒も滲んで光っていた。

「海念さん、海念さんの『こだわり』って何なの？」

「はい。.....」

「.....」

「保兵衛さん、保兵衛さんのお父上はどのようなお方ですか」

「えっ、急に何なの.....。ぼくの父は、普通のサラ、いや勤め人さ。もとは大阪、いや難波(なにわ)で働いていたんだけど.....」

「難波なんですか？わたしの父ももとは難波の浪人だったのです」

「ええっ？確か、漁師さんだって言わなかった？」

「いろいろと込み入った事情があるのです.....」

海念に促され、二人は品川沖を望む岩場で岩に腰を降ろした。川のせせらぐ音と海岸に打ち寄せている波の音とが奇妙に入り混じって聞こえていた。

海念は、落ち着かない様子で自分の父親について語り始めた。

「保兵衛さん、保兵衛さんは同じ場面の夢を見ることってありますか？」

「またまた突拍子もない質問だね。そうだなあ.....、そう言えば小さい頃、空高くから大海原に突然落ちていく夢がとても怖かったことがあった。同じ場面が何回も出できたかもしれない.....」

「怖い夢ですね。.....実は、わたしの父が漁に出て嵐に遭遇し戻らなくなった後、わたしは何度もある同じ夢を見ることになってし

まったのです」

海念は、秋の陽を照り返してきらきらと鱗のように輝く品川沖を、まぶしそうに目を細めて見つめていた。何度もまばたきをして、何かためらう様子でもあった。そして、思い切ったように口を開くのだった。

「父の夢なんです。父が戻って来た夢なのです。今日のように、晴れて海が一際輝いていた日に、父が、巨大な鯨になって品川沖に戻って来たんです。ここが夢なんですか、その鯨が父であることに何の疑問も感じることはなかったのです。わたしは妹といっしょに

『おとおさーん！おとおさーん！』

と叫びながら海岸に走り出て、手を振っているんです。母も、漁から戻る舟を迎えるように後ろの方で見えていました」

「へえー、すげえ夢だなあー。で、どうなってゆくのか？」

保兵衛は、またまたおもしろい話が聞けると期待し、海念の方を覗き込むのだった。

が、海念は、力なく首をうなだれてしまっていた。ことばにつまり、目までつぶってしまうのだった。閉じた目元からはキラッと光るものが一筋流れ落ちた。固く閉じた唇は幾分震えるようにも見えた。保兵衛は、次第に尋常ではない空気に包まれてゆくのをようやく悟らざるをえなかったのだ。

「そ、それが……」

海念は、黒い袈裟で隠れた両腿の上に、両手を固くこぶしにしながら、うめくように話し続けようとしていた。

「み、みんなが……、どこからともなく漁師たちみんなが舟を出し始め、その漁師たちは手に手に頑丈そうな銚を持ち、その鯨の捕獲に乗り出し始めてしまうんです。やがて、一番手の舟から大柄の漁師が黒い銚を放ちました。岸で見つめるわたしには、漁師の腕から鯨の背に一筋の黒い糸が走ったように映りました。その時、父が哀れそうな叫び声を発するのが聞こえたようでした。そして、次々と近づいてゆく舟から何本もの黒い糸筋が走り始めたのです。わた

しは無力にも呆然と見つめるほかなかった。身体が凍ったように身動きできなかつたからなのです。すると、傍で妹が叫び始めたんです。

『みんなー！ やめてー！ それはわたしのおとうちゃんなのー！
死なしちゃいやだー！ 殺しちゃいやだー！ おとうちゃんを助けてー！ おとうちゃん、逃げてー！』

と……」

「……………」

「地獄のような喧騒が収まるのです。海岸に立ちすくむわたしの足元に、父の血で染まった真っ赤な波が打ち寄せていました。足の甲が赤く血色に染まり、わたしは声を上げて泣き狂っているのです……、夢はいつもそこで終わりました……」

海念は、涙声で語り終えた時、大きく深い呼吸をして背筋を伸ばしていた。

保兵衛は、全身に鳥肌が立つのを抑えることができないでいた。その話の壮絶さからとも言えたのだが、実は保兵衛はそれが実話であることを思い出していたからなのであった。

時は、一七九八年、寛政十年と言うからこの時点からおよそ百数十年後に、品川沖に巨大な鯨が迷い込み殺されて捕獲されたとの史実がある。それが事実であったことは、「弁天社(利田神社)」境内に今なお祀られる「鯨塚」が明瞭に示していたのである。

この事実を海念に告げることは保兵衛にはできなかった。タイムトラベラーとしての自分の立場を明かすこととなる懸念もあったが、むしろこの事実が海念の苦悩をさらに増幅してしまうことを知っていたからに違いなかった。

保兵衛には海念へのことばがどうしても見つからなかったのである。

いろいろな疑問が渦巻いていたこともあった。それ以上に、海念の『こだわり』の原点がどこにあって、海念がそれをどう乗り越えた

いと考えているのかが、自分の身に照らし臆気ではあっても推測できるように思えたからだったのかもしれない。

しかし、大事なものを奪ってしまった不条理ななにものかを、何かを恨むところでしか報いてゆけない人の世の哀しさを、十歳ばかりの子どもが凝視したわけではなかったのではあろうが.....

「海念さん、行きましょう」

「ど、どこへですか？」

「海念さんの実家へです。ちょっと寄りましょう」

「いや、それはできません。わたしは出家した身ですから」

「じゃ、場所を教えてよ。ぼくが海念さんの代わりに行って来るから.....」

(9) 保兵衛は思い切って海念の実家を訪ねた！

保兵衛は、海念が半紙に墨で素描した地図を持ち、境橋を渡り街道を西へ向かった。

保兵衛と海念は別行動することとなったのである。保兵衛が海念の実家を訪ねている間に、海念は一足先に、広い東海寺境内の林に入り薪を集め始めることになっていた。

振り向くと、橋の上で海念がこちらを向いて軽くお辞儀をしていた。海念さんは礼儀正しい人なんだから.....と思い、保兵衛もぺこりとお辞儀した。

海念の実家は、境橋からさほど離れていない街道の海岸側に見つかった。かぶっていた笠を軽く上げて見渡したが、決してりっぱとは言えないたたずまいの建物である。質素な門柱には、墨で「掛け接ぎ」と書いた板が無造作に打ち付けてあった。

『こちら辺は、現代なら南品川と呼ばれている場所のはずだ.....』と保兵衛は思った。が、同時に肝心なことに思いを寄せるのだった。自分は、海念のお母さんたちに何を話せばいいんだ？ そも

そも何を思って訪問を考えたんだと頼りなくも困惑し始めていたのだった。

とその時、

「あっ、お兄ちゃん？」

と呼ぶ声が塀の向こうから聞こえてきた。と思うと少女の声が近づき、その少女が笠の下から覗き込むのだった。くりくりとした大きな眼が輝き、喜びを満面に湛えた少女の顔を、保兵衛はまぶしそうに見つめた。

「はっ、……ごめんなさい」

少女は、自分の思い違いに狼狽し俄かに顔色を変えた。泣きそうなほどの面持ちになってしまった。

「いや、ぼくは、わたしは、海念さんの友人で……」

この海念という言葉が、かろうじて少女の表情を立ち直らせたようだった。

「じゃ、東海寺のお坊さんなのですね？」

と言ったかと思うと、少女は急ぐ様子で家の中へ消えて行った。そして、髪を直す仕草をしながら年配の女の人が現れてきた。きりっとした顔立ちが、海念とよく似ていたので、保兵衛はこの人が海念さんのお母さんだと確信した。笠をとり、深々とお辞儀をする保兵衛だった。

「そうなんですか……。うちのまさ(正)とご一緒に東海寺で修行をされておられるのですね」

庭の植木越しに海が見渡せる間(ま)に通された保兵衛は、海念のお母さん、妹と向き合って座ることとなった。かすかに線香の香りが漂っていた。たぶん隣の間(ま)に仏壇が置かれているのだろうか、と保兵衛は思った。この母娘(おやこ)は朝となく昼となく海に消えた夫、父を慕っているに違いないと感じさせられた。

「正(まさ)兄ちゃんは、元気でお勤めしていますか？」

「大変お元気です。もうりっぱな禅僧になられて、わたしなど足元にも及ばない悟りを得とくされています。今日は、そのことをお伝えし

たくてわたしは来ました」

保兵衛は、ようやく挨拶らしくまとまったことが口にできたことで、胸を撫で下ろす心持ちとなった。そして、ふと、視線を上げた時、母親が急いで左手の袖で目元を拭っているのが見えた。

「保兵衛さん、正(まさ)と友だちでいてやって下さいね。相談相手になってやって下さいね。正(まさ)は一見気丈夫そうに見えても、親の目からは痩せ我慢に見えてしょうがないのです……」

「そんなことはありません。海念さん、いや、正(まさ)さんはご自分のことも正確に見つめておられ、ちっとも無理をされてはいません」

「あらあら、お茶が冷めたようですね」

と言って母親は席を立った。と、まるでその虚(きょ)をつくように妹が言うのだった。

「保兵衛さん、お兄ちゃんから『鯨の夢』の話は聞きましたか？」

妹の大きな眼は、優しさとともに、油断のならない厳しさが秘められているように見えた。

「ええ、少し……」

保兵衛は、ドキッとして、動揺をあらわにした。自分でも明瞭に自覚していたわけではない。しかし、この訪問の動機には、もっと海念さんのことが知りたい、そして、海念さんの原体験がああ『鯨の夢』に秘められているに違いない、だからそのことをもっと知りたい、という思いがあったはずなのだ。動揺は、それが見透かされたように思えたからなのかもしれない。

「保兵衛さんにお兄ちゃんは話したのですね。きっと、お兄ちゃんは保兵衛さんのことを信頼しているのだと思います。お兄ちゃんは苦しんでいます」

「まあまあ、静(しず)ちゃん、保兵衛さんがお困りですよ」

戻ってきた母親はそう言って、保兵衛の前に置かれた茶を差し替えていた。

「保兵衛さんは、どのようないきさつでご出家されたのでしょうか？」

またまた、保兵衛は窮地に追い込まれることとなった。が、またも救われるのだった。

「いや、失礼しました。このような不躰なことはお聞きしてはいけませんでしたよね……。実は、正(まさ)の出家にはある事情があったものですから……」

母親は、庭越しに望める遠い品川沖の水平線を、眼を細めるようにして見つめながら語り始めるのだった。その表情は、しばらく前に海岸で示した海念の表情を思い起こさせずにはおかなかった。

(10) 海念さんのお母さんが語った武士としてのお父上！

海念の母親は、突然何かを思い立ったかのような素振りとなり、保兵衛に軽く会釈しながら立ち上がった。

やがて、大事そうに両手で一振りの大刀を抱えて、隣の仏間から戻って来た。

「夫、正之信は、不運な武士でございました」

母親は、幾分首を傾げながら、茫漠とした感慨を込めるかのような眼差しで、保兵衛の前に置いた大刀を見つめている。妹の静(しず)も、正座した姿勢で父の形見に視線を落としていた。

夫婦が難波からこの品川に移り住んだのは十年以上前のことだったという。

難波での浪々の武士生活に見切りをつけ、新天地で漁師として再出発することに賭けたのだったと。

当時、品川周辺には上方からの漁民の移住が多かったとの記録も残されている。

江戸幕府が誕生して二十数年を経過していた江戸は、当代一の

大消費地となっていたのである。そして、品川周辺は、従来からの野菜のみならず、魚介類をも提供する地域へと変貌し始めていたのであった。

ところで、毛利家家臣であった頃、若い正之信は持ち前の正義感から上役の不正を咎める立場に立ってしまったのだという。しかし、逆に汚名を着せられた上に、藩から放逐されることになってしまった。結婚して日も浅い時期のことだったと。

剣の腕は藩内でも指折りの位置にあった正之信であったため、関ヶ原の戦いの折りには、西軍に御陣場借りをして仕官の口を求める動きもとったのだった。同じく西軍に御陣場借りをしていた宮本武蔵との出会いはこの時のことであったという。

だが、西軍に参戦した正之信が仕官の口を逃したのは言うまでもなかった。そしてその後は、果てしない浪々生活が続いてゆくのがだった。その性分から不正を嫌い続けた正之信であったため、清濁併せ呑むことを知らず、武骨さばかりのゆえ、清貧に甘んじる果てしない日々を継続させるのがだった。そして、ようやくのこと品川での漁師としての再出発に至ったのである。

風光明媚な品川での生活は、苦労の連続であった夫婦に漸く落ち着いた生活をもたらすこととなった。これまで願っても叶わなかった子ども二人が突然に授けられる幸運にも恵まれた。長男正(まさ)、海念と、妹静(しず)である。

漁師生活に慣れる並々ならぬ努力の一方、正之信は幼い息子、正(まさ)に武士として成就し得なかった自分の思いのすべてを託し始めるのであった。粗末な漁師の家は寺子屋ともなり、海岸の砂浜は道場代わりとなったのである。

父の期待に応えようとして歯を食いしばる幼い正(まさ)を、母はけなげだと感心した。が、同時に哀れにも見えてならなかったという。ただ、幼い正(まさ)は、父を尊敬するだけではなく、父が言葉を噛み殺して耐えてきた人生の辛さをも、不思議なほどに共感し

ているかのような言動を示したのだという。

ある時、漁師仲間が、
「正(せい)さんは、息子さんの指導にご熱心だが、この天下泰平のご時世が再び乱世にでもなるとお思いなのかい？」
と父を揶揄した時、幼い正(まさ)は、泣きながらむしゃぶりつき、小さな拳で殴りかかったという。

海念の夢の種子である突然の悲劇が降って落ちたのは、ようやく漁師生活にも慣れた年の秋のことであった。

満れば欠くるの謂れのごとく、漁師生活の慣れは、同時に当時の漁師の生業に食い込んだある矛盾に気づかされるに至るのであった。濁る水を飲めない性分の正之信が悩み始めていたのは、折からの権力者たちによる支配の非情さなのであった。

当時、漁民たちは好き勝手に漁をしていいわけではなく、幕府から付与された漁業権に基づき漁を行う仕組みが設けられていたのだ。そして、これは月に一度、幕府に魚介類を献上する義務と引き換えというかたちで付与されていたのである。さらに、大きな制約は、幕府が実施した問屋仕込み制度に基づく江戸の独占的な海産物問屋の横暴であった。

その年の秋は、無情にも不順な天候で時化(しけ)が続くのだ。幕府への上納に値する漁獲も、問屋への過大な義務を果たすに足る収穫も到底準備できない日々が、空しく続いて行った。

そして、漁師たちの焦りと苦悩の日々が積み重なったある激しい時化の日の早朝、海岸は漁師たちの騒ぎで埋め尽くされたのだ。「正(せい)さんが、舟を出したー、助けろー、いいや、今舟を出したらともびきになるぞー……」

やがて漁師たちは、荒れ狂う海を前にしてただ呆然と立ちすくむのだった。

そんな騒然とした海岸で、独り、眼を泣きはらしながら、静かに、放心の様で海を眺めている者がいる。妻であった。漁師たちには理解されない、夫の無謀さの意味を、哀しく反芻していたのだ

た。夫は、漁になんか出たのではない。焦りの結果の暴挙なんかではない。熟慮の上の、武士ならではの『申し立て』なのだ。幕府や、問屋の非情な支配に、捨て身で反省を促そうとした抗議に違いない……と。

正之信の遺体はその舟とともに決して上がることはなかったという。そして、このうわさは江戸中に広がったという。うわさの中および幕府重臣の一翼に、妻と同様の洞察をした切れ者が居たには居たそうである。だが、この非情な制度がこの後見直されたとの記録は残されてはいない。

漁師仲間からの同情もありはしたのだが、権力への『申し立て』という危ない部分に蓋をする大勢の空気が、いつしか正之信の遺志をかき消していくことになったのだった。

そんな経緯の中、ある日突然に旅の途中の武蔵が哀れな親子を訪れたのである。

(11) 二人の大人、武蔵と沢庵和尚による海念さんへの計らい！

傍らの静(しず)は、何度も母親からこの話を聴かされていたに違いない。にもかかわらず、聴く度ごとに父を想い、そして何度でもぼろぼろと涙するのだった。保兵衛は、そんな静(しず)を哀れに思いながら、母親の話にじっと耳を傾け続けた。

武蔵が突然この家に訪れた時、親子はたいそう驚いたという。既に剣豪としてのうわさが高かった武蔵であったが、その異形もまた尋常ではなかったこともひとつの理由ではある。

しかしむしろ、年恰好が、ちょうど正之信が海に消えた時と同じくらいであったことが大きかった。帯刀こそしてはいたものの、髪は

無造作に肩へと流し、着古した旅姿のそんな武蔵が、表通りの光を背後にして、すくっと玄関に立ち現れた時、親子たちは正之信が戻ったと取り違えたのだった。幾度も幾度も願い続けたように、あの嵐をかいぐり、生き延びることとなった夫、父がふらりと戻ったと信じたかったのだ.....

何はともあれ線香を差し上げたいとする武蔵は、しばし仏間で手を合わせ続けたのだった。その丁重さが、正之信と武蔵とのいわく的一端を自ずから物語っていたのである。

当時、武蔵は相変わらず仕官の願いが叶わず、養子とした伊織(いおり)の縁故をもって豊前小倉藩の客分として遇されていた。そして、その年の前々年、寛永十四年に勃発した天草・島原の乱平定に出陣していたとのことだった。この度の江戸への来訪は、その出陣をしたためた口上書を携えた仕官への働きかけに関するものであったとか。

小倉へと戻る武蔵は、品川宿に宿をとったとのことである。武蔵にとって品川宿はゆかりのある場所だったのである。伊織(いおり)を養子とした理由は、彼の非凡な直観力、ある種の超能力を認めたからだそうなのだが、その伊織(いおり)が小倉藩の参勤交代の行列に従って江戸へ赴いた際、品川で往来の人々の人相を垣間見ただけで、その夜に起きることとなった大火事を予見したというのだ。

そして、昨晚、偶然にも宿の者たちから正之信の二、三年前の出来事を耳にすることとなった。これも因縁だと観じ焼香を望むに至ったのだという。

振り返れば、正之信と武蔵との出会いは、およそ四十年前、正確には三十八年前の関ヶ原の戦であった。ともに仕官を目指す御陣場借りで西軍として出陣したのである。正之信は二十歳、武蔵は十六歳である。荒削りという以上に粗野でしかなかった武蔵に、武術の上でも、人の道についても兄らしさで処したばかりか、無謀ゆえに足を怪我をした武蔵を助けたのが正之信であったのだ。そ

の後、正之信が浪々の身を続けることとなっていた間も、書簡のやり取りだけは続けられたのだという。

「惜しむらくは、生きてお上に申し立てる手立てがなかったものかと思案いたす。が、それはそれで難しき事やも知れぬ。してみると、いかにも正之信殿らしき御最期かなと感じ入り申した。昨夜は、正之信殿の胸中を量り、一睡もできず一晩中品川沖を眺望いたしており申した……」

「亡き夫も、武蔵さまに事の次第が伝わり、それだけでも無念が晴れているかと……」

「おう、利発そうな子じゃのう。名はなんと申す？」

武蔵は、正(まさ)を見て、「利発」ということばを選んだのだった。しかし、武蔵が正(まさ)に見出だしたものは、むしろおのれと同様の「狷介」さ以外の何ものでもなかったはずだった。

「はい、正(まさ)と申します。武蔵さま、お尋ねしてよろしゅうございますか？」

正(まさ)は待ち受けていたごとくに、語気を強めて武蔵に迫るのだった。

「おうおう、なんじゃ」

「父上の死を『犬死』とうわさするものがあります。如何お考えでございましょうか？」

「正(まさ)と申したの。人の死に『犬死』などはありはせぬ。お父上は、身を呈して確かな種を蒔かれたのじゃ。だから、そなたは誰をも恨むではない。恨みは、わが身を滅ぼすに至るだけぞ……」

武蔵は、しばらくしてゆっくりと立ち上がり、再度仏間に戻った。再度の焼香をして、仏前に何かを供えていたようだった。武蔵がいとまごいをした後、親子たちは仏前に、懐紙に包まれた数枚の小判を見つけることとなったという。

東海寺の住職、沢庵和尚直筆の手紙が届けられたのは、武蔵が、親子たちのもとから去って四、五日経ってのことであったとい

う。

手紙には、古くからの知己である武蔵より、正(まさ)を禅僧としてご指導いただけないかと懇願されたこと、そしてその理由として、少年時代の武蔵自身が和尚からその狷介さを指摘されたごとく、武蔵が正(まさ)に対して狷介さとその呪縛の相を見出してしまったこと、そして、和尚としても、正(まさ)の鋭敏な資質は仏法の世界でこそ開花するであろう旨などがしたためられてあったのだった。

まもなく親子は、始めて真新しい東海寺を訪れ、沢庵和尚を訪ねたのである。

和尚は、正(まさ)を一目見てそのすべてを洞察したのであろうか、即座に「海念」と名づけたのだった。

「海念、そちは、決して武蔵のような寂しさを味わってはならぬ。武蔵は一人でたくさんじゃ。海は地上の雑多な想いを集め湛えても、深遠に輝いておる。ひとつの想いに執着していたのでは海原の度量には勝てぬぞ」

和尚は、早速、海念こと正(まさ)の地獄のような苦悩に、一筋の竿を差し入れてくれたのであった。

そして、正(まさ)は、即日寺に引き取られることになったのである。

よどみなく続けられた母親の話は、片時も保兵衛のこころを掴んで放さないでいた。まばたきもできず、保兵衛は眼を白黒とさせながら海念の母の顔を見つめてきた。

「正(まさ)は、先ずわたし達のことを心配してくれたのです。『母上や、静(しず)の暮らしはどうするのですか?』と。しかし、わたしも静(しず)も武蔵さまや和尚さまのお考えが正しいと思ったのです。

夫のあのような出来事があって以来、正(まさ)は、お上を恨み、この漁村の人々を恨み、武蔵さまがおっしゃられた通り狷介さのかたまりのようになって手がつけられない有り様でございましたから……」

その時、静(しず)は泣きやみ、そっとつぶやいたのだった。
「お兄ちゃんが、かわいそうなお父さんの魂を慰めてあげてくれればそれでいいんです……」

収まりかけていた保兵衛の感情が、この静(しず)のことばで再び無造作に崩れてしまうのだった。左腕を眼に当て、白い袖をただただ濡らすばかりの保兵衛であった。

こんなにも愛しく思える人たちを目の前にしていながら、何ひとつできないでいる自分が悔しくてしかたがなかった。家に飛んで帰って、母親が使わなくなった足踏み式ミシンを海念さんのお母さんのために持って来てあげたいとも思った。北品川商店街のおもちゃ屋へ飛んで行って、ありったけの貯金で、静(しず)さんのために一等かわいいお人形さんを買ってきてあげたいとも、齒軋りするように思うのだった。

でも、この家を、この親子を、無理にでも訪ねてよかった、海念さんのことがよく分かってきたし、この時代のこともいづらか見えるようになってきたんだし……、と自分に言い聞かせるしかなかった。

今日保兵衛が見聞いたことは、今後この時代から知ること、そしてさらに時空の不思議として体験する様々な出来事からすれば、ほんの序章でしかなかったことを、保兵衛は知るよしもなかった。

(12)「けんたま」がきっかけとなった海念への「告白」!

海念さんには、実家への訪問の結果をどのように報告したものかと、保兵衛は思案しながら歩いていた。やがて境橋が見えてきた。ふと振り返ると、静(しず)がまだ家の前で手を振っていたのだ。保兵衛も大きく右手を振って応えた。

また訪ねることができるだろうか? いや、品川宿への使いに出た際にちょっと立ち寄ることぐらいはできるだろう。そう思うと、気が楽になり、さらに大きく手を振って静(しず)に応えるのだった。

陽はもうだいぶ傾き始めていた。境橋の下の川原周辺のすすきが、傾き始めた秋の陽で白い穂が透けて輝いて見えた。川面には低くなった太陽が赤くまぶしく照り映えていた。

保兵衛は、海念と打ち合わせしていたとおり、境橋を超え宿場街道を程なく行ったところから左に曲がり、夕陽の方向の林への道を進むのだった。この道は北馬場(きたばんば)駅から街道へと続く商店街の道ではないのかなと想像した。

そう言えば、現代からこの時代へやってきて一日が経とうとしている。自分がいなくなったことで、家族や親戚の人たち、そして学校のみみんなも心配しているんだろうな.....と急に気持ちが沈んでゆくを感じる保兵衛だった。

伝馬舟に乗っていた自分の姿を見た人の証言が出て来るんだろうな。それで、目黒川の捜索が行われるのかもしれない。紺の帽子に紺の制服を着た警察官たちが、大勢舟に乗って長い竿で川をつつきまわして探すのだろうか？土佐衛門になっていると見なされてしまったこのぼくを.....。ああ、いやだいやだとそんな想像を振り切るように保兵衛は頭を左右に激しく振るのだった。

もし戻れても、こんなことを説明したって誰にも分かってもらえるはずはないだろうな。どうしよう、とまた心配の種が芽生えてくるのだった。そのうち、そうだ、東海寺で気絶して倒れていたと言うしかないかな.....それしかない、そうしょっ！とやや投げやりな考えに無理やり持ってゆくありさまだった。

夕陽の木漏れ陽だけで薄明かりとなった林の中の、細い獣道を進んだ。ひんやりとした空気が保兵衛の心細さを促すのだった。

と、前方のやや木々が途絶えた草地に人影が見えた。海念だった。保兵衛は、ほっとするのだった。海念は、倒木に腰掛け、手にした「けんたま」をじっとながめていた。

「遅くなってごめーん！」

と、声を掛けながら保兵衛は海念のもとに走り寄った。

もの思いに耽っていた海念は、どきっとした。が、保兵衛だとわかると表情が緩むのだった。

「ずいぶんゆっくりでしたね。薪は二人分を集めておきました」

「ごめんなさい。海念さんに手間ばかり掛けさせて……」

「どういたしまして。さあ、暗くならないうちにお寺へ戻りましょう。母上も、静(しず)も変わりありませんでしたか？」

「はいっ、お二人ともとてもお元気そうでしたよ。お母さんは、元気そのものでいろいろお話してくれました」

「どんな話が出たんでしょう？……」

海念は、保兵衛が背負子を背負うのを手伝いながら聞いた。

「たくさんあったのだけど、ぼくは、海念さんとますます友だちになりたいと思った。ぼくなんかと違って、海念さんは一生懸命で生きてるっていう感じがじっくり伝わってきたもんね……」

「そんなことは……」

海念の確かな足取りの後を、保兵衛は離れないようについて歩いた。一日の活動を終え、眠るためにねぐらに戻った野鳥たちが、木々の高い枝葉の中でザワザワとしていた。林の中は一足先にすっかり、暗くならうとしていた。と、途絶えていた会話を、海念が再開したのだった。

「あっ、そうそう、保兵衛さん。ひとつお聞きしようと思ったことがあるんです。いいですか？」

「はいっ、何でもどうぞー」

「さっき、保兵衛さんが戻るのを待っている時、けんだまの練習をしてみました。無心になって向かわないとうまくいかないようですね。楽しいものをいただいたと感謝しています。で、……」

「それで、どうかしたの？」

「けんだまって面白い玩具だなあと、じっくり眺めていたんです。そうしたら、小さな楕円形の紙片が貼ってあるのを見つけたのです」

「多分、そのけんだまを作ったところの名前だと思うけど……」

「そうですね。しかし、そこに『品川』という文字があるんです。

『東』という字と『京』という字があり、小さな点の後に『品川』とある

んです。この品川と何か関係があるんでしょうか？」

保兵衛は、それを聞き頭の中にガーンという響きが広がるのを自覚した。そして『いやー、今度こそ、もう隠せないぞ……』と観念するのだった。

と言うより、保兵衛はもう海念には打ち明けたい、打ち明けなければいけないのだとわだかまっていた気持ちに、思いがけないきっかけが与えられたことを歓迎していたのかもしれない。

「海念さん、ちょっと折り入った話があるんです……」

保兵衛は、立ち止まり、改まった口調となるのだった。

二人は、既に暗い林を通り抜け、寺が見通せる畑地を貫く道にさしかかっていた。西の空に朱色の残照のみが漂い、秋の日は今まさに暮れようとしている。

沢庵和尚に見出されたのが、昨日の今時分なのであった。たった丸一日しか過ぎていないのに、保兵衛にはとてつもなく長い時間が経過したように思われてならなかった。

「えっ、わたしの質問と繋がっているようですね？」

「そう！ けんだまの『品川』とは、ぼくらが今暮らしているこの品川の三百年以上将来の品川なんです」

「何ですって？ 保兵衛さん、今何と言いました？」

(13) 三百年以上未来の時代に対する海念の好奇心！

すっかり陽が落ちてしまい、辺り一面は薄暗闇が支配し始めていた。小高い場所に望める東海寺にも既に灯がともされていた。

畑の中央を寺へと続く細い道には、暗闇が覆い被さっていた。その中で、海念と保兵衛の二人が、緊張感に包まれてしばし立ちすくんでいる。

保兵衛の意表をついた言葉が、海念を押し黙らせていたのだ。保兵衛もまた、これまで秘密にしていたことへの呵責の念と、海念の思いのほかの沈黙に、身と心を凍らせてしまっていたのだった。

やがて、我に返ったように海念がつぶやいた。
「とにかく、寺へ戻りましょう。和尚さんが心配なさるでしょう。その話は、後で聞かせてください」

保兵衛は、しおらしく頷くのだった。この時、保兵衛は、のちほど海念が驚くべき事実を告げてくれることになるなどと微塵も思い及ばなかったのである。

二人は、和尚に戻ったことを告げようとしたが、あいにく和尚は接客中とのことであった。珍しいことではなく、いつものごとく幕府の諸侯が訪ねてきていたのだった。

兄弟子たちは、それぞれの作務(さむ:修行としての労働)を終えつつあり、薬石(やくせき:夕食のこと)の下ごしらえに向けてのちょっとしたあわただしさの中にあっただ。

海念と保兵衛も、薬石の前に風呂焚きの準備という作務が残されていたのだった。

「保兵衛さん、そのことは和尚さんにはご存知なのですね」

風呂のかまどに、今日集めてきた焚き木の枝葉を敷き並べながら、海念は聞いた。

「はい」

保兵衛は、焚き木の枝葉をむしりとり、海念に手渡ししながら答えた。

海念は、手燭のろうそくから小枝に火を移し、敷き並べた枝葉にその火を投じた。ぼっと音がしたかと思うとかまどの中に火が広がった。パチッパチッと音を立てるかまどの前でしゃがむ二人の姿も、明々と照らされた。

海念は、すばやく二、三本の太い焚き木を燃え盛るかまどに差し入れるのだった。そして、一段落ついたように両手を打ち払いながら、海念は保兵衛の方を振り返った。

「すると、保兵衛さんは、三百年以上も未来の品川からはるばる旅をされたということなんですね。和尚さんのお話に、時空を越えた

世界を念力が引き寄せるといっていたのがありましたが、保兵衛さんはご自分が時空を飛び越えてしまったわけですね。そんな不思議なことがあるんですね」

「そうなの、不思議も不思議、大不思議なの……」

保兵衛は、海念が事態を意外と穏やかに受け止めようとしているのを知り、ほっとしながらこれまでのいきさつを事細く説明し始めた。念のために、自分は念力なんてものとは無縁であること、ただ、小さい頃にしばしば夢遊病のような行動をすることがあったことをつけ沿えたりまでしたのだった。

「だから、ぼくに原因があるのではなく、きっとこのお寺自体の念力なんじゃないかとも思うんだよね」

「うーむ、もしお寺と言うのなら、むしろ和尚さんの念力なんではないか……」

海念は、太い焚き木に火が移り火力を増してゆくかまどの中を見つめながら唸った。

「ところで、東海寺はその時代にもまだ存続しているのですね」

「うん、このようにだだっ広くはなくなったのだけど、沢庵和尚の名とともにちゃんと存続している」

「小さくなったのですね」

「ご威光が薄れたとかじゃなくて、社会が発展して、交通手段の広い道路や、新しい乗り物のための線路なんかを作るのにだんだん削られたんじゃないかと思うよ。それに、この広い境内を生かして、子どもたちが勉強をする学校という施設も作られたんだよ。品川小学校と、城南中学校という学校がね。ぼくは、台場小学校とって、海岸の埋め立て地の学校なんだけど、中学に進級すれば城南中学校へ通うことになるんだ」

「やはり、三百年以上も経つと様変わりするものなのですね。お上は、どうなるんでしょう？」

「江戸幕府は、鎖国制度のために戦争もなく、この後まだ二百年以上も続いてゆきます」

「へえー、そーなんですか。そのあとのお上はどんな方がなるんで

すか？」

「うん、お上という形ではなくて、みんなで相談しながら政治を進めようという明治政府ができるんだ」

「人々の暮らしは楽になっていったのでしょうか？」

「なっちはいったのだけれど、楽ではない人たちはいつの時代もなくならないように見える……」

「あとひとつだけ聞かせてください。お寺が残り続けるということは、禅や仏の教えも生き続けるということですよ」

「ぼくは、その辺はよくはわからないんだけど、科学という西洋の学問が広がっても、お寺に行く人は減ってないようだよ。人が死んだ時のお葬式は大抵お寺でするから、『葬式仏教』だと言う人もいるけど」

「……」

「それでね。この時代に来たのはいいいんだけど、ぼくはもう一度元の時代に帰れるのかどうか心配なんだ。和尚さんにもそう言ったら、大丈夫だとは言ってくれたんだけど……。あっ、そうだ、それからついでに海念さんに聞きたいことがあったんだけど、いいですか？」

「何でしょうか？」

「昨日就寝した部屋がありますね」

「禅堂に通じる部屋ですね。わたしはまだ未熟なので、兄弟子たちの修行の邪魔にならないように、禅堂の脇の部屋で修行することになっているんです。それがどうかしましたか？」

「壁にいくつか色紙のようなものが掛かっていますよね」

「わたしもよくは知らないのですが、来訪された修行僧などが残していったもののようですね」

「実は、その一枚、『四つの図柄』を記したものがとても気になるのです」

保兵衛は、ここへ来て以来ずっと脳裏から離れなかった気掛かりなことを口にしたのだった。

「えっ、何ですって？あの書のことを何か知っているのです」

か？！」

(14) 『四つの図柄』の書の謎が、解けそうで解けない.....

薬石を終えた後、就寝までの時間は各禅僧の自主性に任されている。座禅修行に励む者が多かったが、「公案」(こうあん:すぐれた禅僧の言葉や行動の記録をもとにして、修行者に示し、悟りに導くために工夫させる課題。師との問答が繰り返される。)の備えに没頭する者も少なくなかった。

海念と保兵衛は、兄弟子たちの入浴のため再び風呂かまどの場に戻っていた。

と、そこへ兄弟子のひとりが、和尚が海念をお呼びだと伝えてきたのだった。

「何でしょう？.....」

と、海念はいぶかしがりながら和尚のもとへ走った。

やがて戻ってきた海念は、やや興奮気味で言った。

「保兵衛さん、大変なことになりました」

「えっ、何だろう？」

「わたしたちは、明日、和尚さまとご一緒にお城に上がり、將軍さまにお目通りすることになります」

「家光將軍にお会いするってこと？」

「そうなんです。和尚さまは、しばしば將軍さまとお話するためにお城に向かわれますが、明日はふたりとも同伴するのじゃ、とおっしゃられたのです。何でも、今日の品川宿での『犬騒動』が早くも將軍さまのお耳に入り、うわさのふたりの子ども禅僧と話がしたいとご所望されたとのことなんです。保兵衛さんは大丈夫ですか？」

「大丈夫といえば大丈夫だけど、ぼくなんかが行ってもいいのかなあ.....」

「あっ、そうそう、和尚さまが保兵衛さんにと、おっしゃってしまし

た。『故郷の話は避けるがよかろう』と。おそらく、先ほどの話は内輪の話にしておくべきだということなんでしょうね」

「そりゃそうだよね。もうそろそろ鎖国政策が本格的になろうとしているのだから、まかり間違うと捕らえられるかもしれないもんね。絶対余計なことは言わないつもりだよ」

「先ほどの話」という海念の言葉で、ふたりは再び薬石前の会話に戻ってゆくことになった。

「保兵衛さん、『四つの図柄』の書の件ですが、実はわたしも気になっていたので」

「えっ、どうして？」

と保兵衛は不可解に感じた。その書に関して驚くのは自分しかないとも思っていたかのような不思議がりようだった。

「他の三つの図はどういう意味かわかりませんが、ほら右の下にあった図は、あれは鯨が潮を吹いているところではありませんでしたか？ わたしは以前に、父上から南蛮の図書で鯨の姿を描いたものをみせてもらったことがありますが、普通の人には余り知らないはずだと思うのです……」

この時、再び保兵衛に戦慄のようなものが走ったのだった。もう自分が推測していたことがほぼ確実だと念を押されたような確信を感じたのだった。身体がぶるぶると震えるようだった。

「か、海念さん、……」

と保兵衛は声を震わせながら言った。

「あ、あとの三つの図は何に見えますか？」

「左上は、鳥が翼を広げているところでしょうか？ くちばしの鋭さからいえば、將軍さまの鷹狩の鷹のようにも見えます」

「そ、そのとおり！ あれは鷹が翼を広げている図に違いありません」

「右上は、ちょっと複雑でわかりにくいのですが、左右対称となっているのが翼だとすれば、やはり鳥の姿、それも真上から見たところでしょうか……」

「そうなんです。あれは、かもめのはずなんです」

「で、左下の図は、三枚の木の葉に見えますね」
「大当たり！あれは確か樫の樹の葉っぱが三枚合わさったものです。そして、右下は、海念さんの言うとおりの鯨です」
「でも、ちょっと待ってくださいな。保兵衛さん、保兵衛さんの口調だとまるでご自分が描いたように聞こえますよ」
「そう、たぶんぼくが、ぼく自身が描いたものじゃないかと考えているんです……」
「ええっ、そうたびたび驚かさないでくださいよ。まことの話ですか？」
「うん、なぜかという、これらの図の関係はぼく以外の他の人が知るわけがないと思うからなんだ。実は、それぞれが『校章』を表しているんだ。かもめは、今ぼくが通っている台場小学校の校章、樫の三つ葉はほとんど確実にぼくが進学するはずの城南中学校、ほら今境内に池があるよね。あそこを埋め立てて城南中学校が作られるんだ。そして、一番最初の鷹の図、あれはぼくが難波、現在では大阪というのだけど、そこにすんでいた頃に通っていた鷹合(たかあい)小学校の校章なんだ。そんなことまで知っているのはぼくしかいないからね」
「……」
「で、鯨なんだけど、それは海念さんの夢の話だと思うわけ……」
「ということは、保兵衛さんは、今回初めて時空超越をしてここへ来られたのではなく、以前にも来たことがあるということなんですか？」
「まったく覚えてはいないんだけど、そうなんじゃないかと……」
「でも、おかしいですよ。だって、鯨の話は、わたしは保兵衛さんに今日初めてしたんですよ。それに、そんな話は他の誰にもしてはいませんからね」
「うーん、そこなんだよね。そこだけが、謎として残るんだ……」
「しかし、三つの校章の話は、非常に説得力がありそうですね……」
「……」

ふたりは、しばしかまどの中の火を見つめながら押し黙ってしまった。その火が不思議さに迷うふたりの顔を火照らせていた。どこかに謎が隠されていると睨むきらきらとした眼には、かまどの赤々とした火が映っていた。

と、その時海念が何かを思い出したように頷きながら言うのだった。

「保兵衛さん、もし保兵衛さんがこれを描いていたとしても、わたしがここへ来る前の話だということで、もちろんわたしは知りません。そこで、わたしがここへ来る前の出来事といえば、兄弟子から聞いたちょっとした話を今思い出したのです。関係があるかどうかはわかりませんが……」

(15) お手上げとなった謎を知るのは和尚さまだけ？

海念は、自分がこの東海寺に来た頃のことを必死で思い出そうとしていた。しかし、当時、海念は、父親の出来事と、それに対する入り乱れた感情などで決して尋常な心境ではなかったはずである。自分の感情で自縛され苦しむ海念が、しかも来たばかりの新しい環境の一体何を記憶にとどめることができたのだろうか。

「あれは、やはりこうして風呂のかまどの火を絶やさない番をしていた時のことでした。風呂場から聞こえる兄弟子たちの声の中に、『やはり、禅修業は南蛮人の方には三日ともたないのでしょうか……』とか、『それにしても消えるように退散なさった……』とかと聞こえたような会話ががあったようです。

さまざまな方がお出でになる寺だと聞いていましたから、特に不思議とは思いませんでした。ただ、南蛮人という表現が気になっていましたので、今、思い出したのです」

「でも、ぼくのような子どもじゃなかったんでしょ？」

「そうですね。子どもを相手にした言葉ではなかったかもしれませ

んね……」

「ほかに何か覚えていることはないの？」

「うーん、ほかには……」

保兵衛は、海念の口から、自分のような子どもが既にこの寺を訪ねて来ていたかもしれないと聞いたかったに違いないのだ。たとえ自分に覚えがなくとも、忘れてしまうことなんていくらでもあるから、ただ、そうした事実さえあれば謎解きは完了としたかったのだ。

しかも、一度過去に来ているとなったなら、現代に戻れたということでもあるわけなので、なおのこと過去の自分が来ていたとの証言がほしかったに違いないのである。

「そうそう、子どもではなかったことなら確かなようです」

「なあーんだ、でもそのわけは？」

「保兵衛さんに着ていただいている白装束と黒い袈裟はわたしのものですよね。もし、子ども用のそれらが、わたしがここへ来た時にあったなら、わたしもそれを借りることができたはずですよ。わたしは、ここへ来て二、三日は仕立てを待ちながら、実家から着てきた着物を着ていたのですから、そんなものは無かったということではないですか」

「なるほど、そういうことだよ。とすると、その南蛮人は大人だったということなんだ……。じゃ、以前にぼくがここへ来たのはもっと前だということなんだ……」

「しかし、そんな前だとまだ東海寺が出来ていない頃になってしまいますよ」

「そうかあ、それじゃ話にならないよね」

二人は、またまた解けない謎を巡って、首を傾げ、腕を組み身動きできないありさまとなった。とその時、風呂場から声が聞こえてきた。

「海念、わたしで最後なのでもう薪は足さなくてよし」という兄弟子

の一人の声であった。

「はい、わかりました」

海念は、そう応えながらかまどの周囲を整理し始めるのだった。「保兵衛さん、わたしはここへ来る前も、父が入浴する際にこうした風呂焚きをよくしたものです。そして、さっきの兄弟子の声のように父が……」

と言いかげながら海念の眼が光った。

「保兵衛さん、保兵衛さんのお父さんなら『三つの校章』のことくらいご存知ですよ」

「うん、そりゃ知っていても不思議はないよね。ということは、ぼくの父がここへ来ていたということ？」

「変ですか？ 確かに、『鯨の囃子』については該当しませんが、それは保兵衛さんだとしても今日よりも前の保兵衛さんなら同じことですからね」

「うーん、父かあ……、そんなことってあるかなあ……」

保兵衛は、自分の父に対する印象を頭の中で手探りしながら考え込むのだった。

父は、煙草は吸うが、酒も飲まずバクチもやらず、人当たりも悪くはない真面目一筋の人間だ。どちらかと言えれば気を遣い過ぎる方だろう。会社から寄り道して遅くなることは先ずない。朝だって、通勤ラッシュを避けるためにほかの人より二時間も早起きして出かける。母が、そんなことしてたら身体を壊すわよ、と言っても、いいんだと言っていた。いや、そんなことはどうでもいいとして、父が「時空を越える！」ようなことをするかどうかだけど、うん、先ずなさそうだなあ……。会社から真直ぐに帰宅する父が、そんな冒険をするわけがないな。しかし、このぼくだって望んでこうなったわけじゃないんだから、なんかのキッカケ、そうちょっとした危ないことをしてしまうということ、うん、それも父はしそうもないなあ……。母がよく父のことを「石橋を叩いて渡らない」ほど慎重だと言っていたからなあ。うん、父ではないだろう、と保兵衛は結論を出すのだった。

「海念さん、先ず父ではないと確信する！」

と保兵衛は言い切っていた。

「そうですか、ありそうもないですか……、お手上げですね」

「……」

「保兵衛さん、そうがっかりすることはありませんよ。たぶんこの辺の事情をすべて呑み込んでいる方がいらっしやいますから……」

「えっ、誰ですか？」

「和尚さまですよ。だって、保兵衛さんの名前を聞かずとも言い当てられたのでしたよね！ ということは、何かをご存知のほずに違いありません」

(16) 『不立文字(ふりゅうもんじ)』とだけ答えた和尚の思惑！

沢庵和尚と、海念そして保兵衛の三人は、朝露を含んだ草で足元の白足袋、脚半を濡らしながら街道へと向かっていた。もう七十の声が聞こえてくる高齡の沢庵和尚であったがその足取りは軽やかである。二人の子ども禅僧が後を追うようにして歩んでいた。その光景は、どこか心和む雰囲気が漂っていたものだ。三人は、將軍家光の招きで江戸城へと向かい、東海寺を後にしたのだった。

早朝の広大な境内は朝靄に包まれ、笠に触れて水滴となった雫が時々ぼたりと落ちてくるほどである。

と、和尚が突然足取りを緩めた。そこは林を抜けた見晴らしの良い高台である。各々の笠の先に、品川宿の軒並みが広がっている。その向こうには静かな品川沖、そして今まさに日の出を迎え、目を射るように輝く朱色の旭日が、水平線から立ち上がろうとしていたのだ。

和尚は実にありがたそうに、その旭日に合掌し始める。そうだそうだとばかりに、子ども禅僧たちも小さな手で合掌するのだった。目をつぶっていても、旭日が次第に立ち上がってゆくその動きが

見えるのだった。

「何百年経てもこの光景だけは変わらぬものであろうのう」

とつぶやく和尚の言葉で、二人も目を開けるのだった。保兵衛は、大きく頷き、品川神社で新年のご来光を迎えた時のことを思い出していた。

「そうじゃのう、保兵衛さん」

一瞬、何と答えたものかと保兵衛はためらうのだった。

「はいっ」

とだけ答えるにとどまってしまう保兵衛だった。

本当は、この機を逃さずいろんなことを続け様に聞きたかったに違いなかったのだ。

『和尚さん、ぼくは以前ここへ来たことがあるんですよ。ぼくは忘らん坊だから覚えていないんだけど、ちょっと前にここへ来たんですよ。もし、そうじゃないとすれば、一体ぼくのことや、海念さんのことまで知っている誰がここへ来たと言うんです？ 和尚さんはすべてを知っていながらなぜ教えてくれないんですか？ それじゃ、せめてその理由だけでも教えてください！』

と……。しかし、初めてここへ来た時の、ぞんざいまでの和尚に対する対応が、この一日、二日でもはやできなくなっている自分に気づくのだった。なぜだかは分からなかった。海念を初めとして、この世界で出会う人々の緊張感に満ちた濃密な生き方が、保兵衛の感覚に影響を与えたのかもしれない。

まぶしそうに品川沖を眺める和尚が言った。

「海念や、そちは『不立文字(ふりゅうもんじ)』なる言葉を得とくしたかのう」

海念もまた、突然の問いかけにためらうのだった。

「はいっ。禅の根本思想である『達磨の四聖句』、即ち、『不立文字(ふりゅうもんじ)、教外別伝(きょうげべつでん)、直指人心(じきしにんしん)、見性成仏(けんしょうじょうぶつ)』の第一で、真理は、

文字や言葉では伝えることができない、という意と心得ております」

「そうじゃ、よく心得たのう。文字や言葉は時として心の迷いを増幅するだけとなる場合が多いものじゃ。無心でことに当たるべし、ということじゃな」

海念は、この場の文脈をにらみ何事かに思いを巡らせるのだった。

『和尚さまは、きっと保兵衛さんのいきさつについて知っておられるに違いない。ただ、そのことを保兵衛さんに伝えることは、保兵衛さんにとって良くないことだとお考えのようだ……。保兵衛さんの心の迷いが増すだけだとおっしゃっているに違いない。』

確かに、知ることが幸いに繋がるとは限らないかもしれない。生半可に知ることがただただ悩みを深くすることだってあるに違いない……』

しばらくの沈黙の後、和尚は再び保兵衛に向かって言うのだった。

「保兵衛さん、とにかく、ここでの今を一心に生きなされ。ここであろうが、どこであろうが同じことなのじゃ」

保兵衛には、分かる言葉ではなかつただろう。しかし、『四つの図柄』の秘密を詮索することより、ここでの今を一心に生きることが大事だという和尚の言葉に、奥の深い何かがありそうだとだけは感じとったのだった。

心細そうに保兵衛は海念の方を見つめた。海念は、何かを伝えたいように静かに二、三度頷いていた。

「そうじゃ、海念。そちはいつの間に和尚の得意技たる外道への技を得とくしたのじゃ？　そう、昨日の街道での技の披露のことを言うておる」

和尚は、街道へと坂を下りながら、明るい声で言うのだった。

まぶしい旭日の光と乳白色の朝靄に、三人の影はあっという間に溶け込んでいった。

(17) 語られることのない沢庵和尚の胸の内！

三人が街道に入った時、すでに街道は江戸から西へ向かう旅人たちが賑わいを見せていた。

さすが、東海道の出発点である日本橋から二里の距離にある最初の宿、品川宿である。日の出を迎えるほどの早立ちでなければ歩く距離がかせげなかった時代であった。まして、季節は釣瓶落としに陽が落ちる晩秋であった。街道を西へ向かう旅人たちは、まだ真新しい旅衣装をまとい、一様に明るく、気を張った面持ちと見えた。

沢庵ほか三人は、旅人たちと対面するかたちで江戸へと歩を進めていた。時々、宿の店の者が沢庵たちに会釈をした。錫杖を左手にした沢庵たちは、右手のみの合掌で応えた。やがて、海岸の右手方向に弁天社が見えてきた時、沢庵は二人に告げた。「家光殿とのお約束の昼時までには十分に余裕がある。先ずは、弁天に挨拶をしましょう」

実は、品川須崎の弁天社は、東海寺に迎えられる以前の沢庵が、一六二六年、寛永三年に祀り始めた社だと言い伝えられているのである。当時、この須崎に隣接する地域は上方から移住した漁民たちが漁業を営み始め、獵師町と呼ばれていた。また沢庵とは言えば、この時期、幕府権力の蠢きを避け故郷但馬(現兵庫県)に閑居していたのだった。しかし、この漁民たちとの何らかのつながりによるものだったのであろうか、漁民たちのために目黒川という「河川を神格化」する弁財天を祀ったのだった。

ところで、沢庵にとっての弁天社は、むしろその直後に引き起こ

された一連の苦い思いを蘇らせるものであったかもしれない。あの幕府権力とにらみ合った「紫衣(しえ)事件」である。

元来、禅の考え方はこの世の差異、美も醜も、大も小ものすべてを認めず、権力をも当然認めるものではなかった。だが、時代は、二代將軍秀忠から三代將軍家光の時代、寛永へと突然に移行し、家光による万全の幕府勢力確立に向け、権力の誇示が開始された時期にさしかかっていたのであった。

折から、幕府は朝廷側との力関係に業を煮やしていた。また、寺院を、檀家制度によって完全に支配下に置く動きにも余念がなかったのである。家光は、僧侶の官位昇進、名誉表彰の一切の権限は、朝廷側からの勅許によってではなく、幕府が握ると宣言したのであった。それが、寛永三年のことであった。「妙心寺、大徳寺法度」がそれである。

その幕府の虎の尾を踏むかのごとき奔放さを「大徳寺」の長老たる沢庵こと、沢庵宗彭(そうぼう。若き沢庵が、「大徳寺」の開祖であり住持であった春屋[しゅんおく]宗園より与えられた号。)は展開するのだった。幕府の命令を無視して僧侶の入山を進めたとともに、抗議書を所司代に呈したのであった。

ここで言い添えるならば、沢庵が若い時から修行し、一時は住持とまでなった(三日間で辞退してしまったのだが)「大徳寺」は、歴史上で幾度か生ぐさい権力の異臭が漂った場所であったかに思われる。秀吉が、千利休を切腹自殺に追い込んだ「大徳寺山門木像事件」も良く知られている。また、関ヶ原の戦での西方の大將たる石田三成とも縁があり、敗死し河原に捨てられた三成が、春屋宗園、沢庵宗彭らによって葬られたのもこの大徳寺だったのである。

そして、この「紫衣事件」である。抗議を続けた沢庵ら三人の僧は、江戸に呼ばれ詰問された上、各地へと配流(流罪)され幽閉されることとなった。寛永六年、沢庵は出羽(現山形県)へと向かい、寛永九年、柳生宗矩の骨折りによって配流赦免されるまでを北の

配流先で幽閉閑居の身を送ったのである。しかし、沢庵の身柄を
あずかった城主土岐頼行は、文武を尊び、仏心にあつく、沢庵を
大いに歓迎したとのことであった。

弁天社に接するたびに、沢庵はこの「事件」に翻弄された頃のこと
を想起したのではなかつたらうか。そして、將軍家光の計らい
で東海寺の住持となったいきさつをも振り返るに違いなかつた。

將軍家光は、沢庵を信奉していた柳生宗矩の度重なる言上と、
沢庵自身の禅僧としての魅力を動機としていたことは確かであろ
う。しかし、沢庵のような行動力のある名僧を、公家、朝廷の影響
範囲である京に置き続けることに不安を感じていたことも確かでは
なかつたらうか。自らの懐に納めておきたいと望んだ権力者なら
ではのそうした思いが、沢庵に伝わらなかつたはずはないと思わ
れる。

沢庵和尚は、弁天社の弁財天に、静かに祈念した。そして、錫杖
を手に戻し、子ども禅僧たちが祈念する姿を、愛しさの眼差して見
守っていた。

この者たちに我が思いを言葉として伝えることもやぶさかではな
いが.....。

人々が生きるに当たって、避けがたい苦難が付きまとうのがこの
世である。しかも、それに加えて、人はさらに苦難を自らが作り出
し、持ち込むという愚かしい所業を繰り返しておる。また、それらを
正すとばかりに臆面も無い所業で臨むいかがわしい権力.....。虚
しさをこそ自覚すべし。自覚された無をこそ生きるべし。海念、保兵
衛、そちたちは、この沢庵から奪えるものを奪い尽くし.....

「和尚さま、この弁天社は三百年以上経ても人々から祀られている
そうです。そうですね、保兵衛さん」

三人は、互いに視線を交えた。そして、和尚が大きく頷くのを合

図にしたかのように、みんなして満足そうに大きく頷き合うのだった。

これから会いに行く巨大な権力たる幕府のその存続が絶えた後にも、この小さな、小さな社が祀られ続けられてゆく歴史の不思議を、三人は見据えていたのかもしれない。

(18) せっかくのこんな時に江戸城が大火事だなんて.....

「保兵衛さん、昨晚、また奇妙な夢を見てしまいました」

弁天社から街道へ出た時、海念は振り返ってそう言った。

「また、鯨なんですか？」

「いや、そうではなくて、怖い『大火事』の夢なんです。どこだかはわからなかったけれど、大きな建物が炎上して、お侍さんたちが大慌てしていたようです」

「昨晚、風呂のかまどの火を見つめていっしょに悩んだからかもしれないね」

沢庵和尚たち三人は、右手に品川沖を臨みながらひたすら東海道を日本橋方面に向かっていった。品川宿を出た頃まではさほど気にしていなかった三人であったが、前方からの乾いた風が行く手を阻むことを感じ始めていた。乾いた北風が江戸の冬が間近であることを告げ始めているようだった。和尚たちはやがて、笠を煽られないよう前かがみで進む格好となっていた。

だが、保兵衛だけは、最後尾につきながらあたりをきょろきょろとしている。自分の時代、現代に通じる光景がどこかに見出せないかとの思いであったのであろう。

多分、八ツ山を過ぎたようなので、高輪あたりだろうかと思はれた。もうすぐ左手には泉岳寺が見えてくるはずだ、と予想した。芝公園あたりまでは、徒歩で歩き回ったりしていたので光景は変わろうとも、距離感はあるのだった。

だが、お寺のような建物は一向に見えてこなかった。

保兵衛が泉岳寺の存在を知ったのは、もちろんあの忠臣蔵、赤穂浪士の討ち入りからである。親戚の人に連れて来てもらったこともあったし、友だち同士で来たこともあった。赤穂浪士たちが立寄った寺であったのだから、元禄時代にはすでに開設されていたはずで、そう言えば確か徳川家康が創立したという説明書きが掲示されていたことを薄っすらと思い出していた。

残念さと、合点がゆかない思いで歩く保兵衛だった。が、その時ふいに写真のように泉岳寺の観光案内用の「掲示板」の文面が脳裏をかすめたのだった。

『泉岳寺は……徳川家康が……創立した寺である。……「寛永の大火」によって焼失……現在の高輪の地に移転せられた』

たしか、「寛永の大火」によって焼失し、その後高輪に移ったと書いてあったとの記憶が蘇ったのだった。すると、その「大火」はまだ起きていない。じゃあ、家康は最初どこに泉岳寺を造っていたのだろうか……

そう考えると、いても立ってもいられなくなった。小走りに沢庵和尚を追っかける保兵衛だった。

「和尚さん、お聞きしたいことがあります」

「おお、どうしたね、保兵衛さん」

「泉岳寺は、どこにあるんでしょうか」

「泉岳寺かな。泉岳寺はわれらが向かう江戸城の桜田門外、外桜田にある。まだ一理ほど歩かねばならぬのう。じゃが、いかがでしたかな」

「そうなんですか。それから、『寛永の大火』とはいつあったのでしょうか」

「今年は寛永の十六年じゃが、大火と言えは昨年に川越で大きな火事があったそうじゃ。その前は寛永八年と十二年にたしか大火があったと聞いておる。江戸の冬は、空っ風が山手から下町に吹きおろすため火事が多いのが相場じゃ」

保兵衛は、和尚のことばでも気持ちがおさまらなかつたと見え、きまり悪そうに自分が知る泉岳寺と寛永の大火の経緯を和尚に告

げ始めるのであった。

和尚は黙って聞いていた。そして目を閉じた。が、何か胸騒ぎを覚えたのであろうか、顔を曇らせ始めたのである。折りからの風が和尚の笠を煽り、その面持ちがはっきりと窺えた。

俄かに、和尚は錫杖を傍らの町家の板塀に立てかけると、江戸城方向に向かって合掌し始めたのではないか。それは、明らかに遠く隔たる彼方を見据える所作としか言いようがないものと見えた。

そして和尚は素早く錫杖を手に戻し言い放つのであった。
「海念、保兵衛さん、急がねばならぬようじゃ」

三人は小走りに近い速度で東海道を急いだ。やがて右手方向から海が見えなくなり、真新しい大名屋敷が、街道沿いの町家の奥に覗ける光景となった。家光が「武家諸法度」(寛永十二年)にて参勤交代を制度化したことにより、大名、武家屋敷が広がったのである。

そして、ようやく芝の増上寺にさしかかった。ここは家康によって大造営され、将軍家の菩提所として祀られ続けた寺院である。

その時和尚の念力に不吉な何かが共鳴したのであろうか、突然和尚はつぶやくのであった。

「これは、いかん。大事となりそうな気配じゃ」
海念と保兵衛は啞然として顔を見合わせていた。

街道の両側にぎっしりと町家が並び日々谷の埋め立て地あたりに走り込んだ頃であった。

街道の町人たちが、ばたばたと駆け回り蜂の巣を突いたような騒ぎとなっていたのであった。あちこちの店先に店の者たちが飛び出し、また伝令のように何かを告げ回る者も行き交った。中には、二階家の屋根に仁王立ちとなっている者さえいた。

「お城から火が出たぞー」
「大変だー、千代田城が火事だー」

町人たちが不安げに顔を寄せる町家の軒並みの空隙、そこから

覗ける北西の空。増築が完了したばかりの千代田城、江戸城の影に、薄っすらと立ち昇る一筋の不気味な煙が、誰の目からも確認できたのだった。

(19) ささまざまな心で受けとめた江戸城の大火事！

日本橋に近づくとつれ、街道沿いはうろたえる町人たちでごった返していた。

日本橋、京橋近辺の木造家屋が密集した下町は、とかく火事が多かったという。二、三年に一度くらいの割合で大火事に見舞われていた。そのため、町人たちに奇妙な慣れも見受けられたりした。しかし、この日の火事騒ぎは、江戸城内からの出火という点が町人たちを興奮に追い込んでいたのだった。

大名屋敷と下町を区切る外濠の町家側には、火事慣れした野次馬の町人たちが危険をかえりみず埋め尽くしていた。どこをどう短時間に伝わったのか、火元は本丸の大奥であるとの情報までが早くも広まる始末だった。

町人たちの彼方で、見る見るうちに、天主台を囲む本丸付近が炎上し、しかも冬さながらの強い北風が火の手を放縦に広げさせているようだった。

沢庵和尚たちは、日本橋付近から先に進めず、立ち往生することとなったのである。

「和尚さま、大変なことになりました……」

海念は、うわずるような声で言うのだった。

「家光殿の身の上に間違いが無ければよいが、何とも無情なこととなったものじゃ……」そうつぶやいた和尚は、右手で笠のふちをもたげ、悲痛な面持ちで彼方の炎上を見つめ続けた。保兵衛も、家康が創立した泉岳寺を焼失させたのはこの大火だったのだと知

ることとなった。

和尚が「無情なこと」とつぶやいた際、その言外には「無常」という意がこもっていたのかもしれない。

三代将軍家光は、ちょうどあの「紫衣事件」のあった年、寛永六年より約八カ年にわたり、従来よりも一層厳しく諸大名に負担を強い、莫大な金銀を費やして江戸城内外の大増築をしたのだった。幕府権力の完成を目指すものであった。中心城郭としては本丸と西の丸とのほか、その間に北の丸と吹上とを設け、外郭としては汐留、虎の門、溜池、赤坂見附、四谷見附、市谷見附、飯田橋、お茶の水、両国を通ずる一線を外濠を以って囲み、城池は東西六キロ、南北四キロにわたり、その外郭の要所々々に枡形の城門を造って出入りを監視し、所々に木橋を架けて有事の場合にこれを切って落とす仕組みにしてあった。城門は外郭に二十、内閣に十一、城内に八〇、天守閣の外に三重または二重の城櫓が二十、多間二十六などであった。

こうした江戸城が、この大火によって天守と僅かな櫓を残して、大半が灰に帰したのである。この惨事によって権力としての幕府が支障を来たすことにはならなかったにせよ、この惨事に、和尚ならずとも「無常」を感じるのは不思議ではなかったはずである。

和尚たちは、将軍家光の無事だけでも確認したかった。しかし、この混乱の中で採るべき手段を失っていた。また、江戸市中への延焼も心配であった。が、東海寺の留守を守る者たちに無用な心配をさせるわけにはいかなかったため、この日はそのまま品川へ戻ることにしたのだった。

野次馬たちが駆ける方向とは逆の方向へと三人は戻った。野次馬たちの上気した顔つきがありありと窺えた。思えばそれらは、他人の不幸に関心を抱く残酷さを持っていた。が、彼らとていつ他人から関心を抱かれる不幸の身の上に陥るかもしれない、そんなお互い様の江戸市中であったのであろう。

帰途につく和尚たち三人の胸中には、それぞれにさまざまなものが去来していたに違いない。

やり場のない複雑な心境で顔を曇らせていたのは海念である。今朝、保兵衛に話したように正夢を見てしまったこと、そのことを反芻していたのだった。

ひとに語れる夢といえは残酷で、不幸な夢しか見ない自分を、憐れに感じていたのであろうか。

仮にも仲間であったはずの同じ浜の漁民たちが、鯨に姿を変えた父を、みんなで射殺すという像を何度も描いてしまう自分、そんなふうに関心の中に潜む狷介な心から、ようやく距離が置けそうになっていたというのに。

なのに、今度は、こともあろうに家光将軍の不幸を、その狷介な心は望んだのかもしれない、と自分を見つめていた。父が命懸けで抗議したその相手を、憎しと思わなかったことはない自分がいたことを、海念は否定できないでいたのだった。

海念は、前を歩く和尚の後姿に目をやっていた。笠の下から覗ける和尚の規則正しい足取りをじっと見つめた。

『和尚さま、せっかく仏道を修行させていただきながら、わたしは心の中の阿修羅(あしゅら: 戦闘を好む鬼神。)の奴隷となったままです。こんな自分でも、いつかは……』

「おお、もう品川沖が顔を覗かせ始めたぞ。人の世に何が生じようとも、海の表情は変わらぬものじゃな」

いつの間にか芝の浜あたりまで和尚たちは戻っていた。

和尚が何に思いを巡らせていたかいなかったかは定かではない。しかし、炎上する城を眼前にしていた時の悲痛な面持ちは、既に消え、穏やかでさえあるいつもの表情に戻っていたのだった。

戦乱の時代のあらゆる地獄絵図を、望まずとも脳裏に焼き付けてきた和尚にとって、今日の出来事、光景は長い絵巻のごく一部に過ぎなかったのかもしれない。

仮に江戸城まるごとが焼失しようが、さらに万が一家光將軍に不幸があったとしても、もはや天下争奪の終わった勝負が振り出しに戻るはずの決してないこと、徳川幕府の軌道が延々と続きゆくであろうことを、和尚は当然承知していたはずなのである。

もとより、和尚は、海念が今思い煩うような阿修羅をもう何十回も心から追い払い、そして東海寺に入山する決意をしたはずである。権力の権化を身近に置きながら、これを超越する、という禅道の最終課題を引き受けようとしていたに違いなかったのである。

ところで、保兵衛に異変が生じ始めていたことに気づいていたのは、和尚だけであったかもしれない。保兵衛でさえ、目にする光景とは無関係に、耳にする音の中に時々聞きなれた音が混じり始めていることには気づかないでいたのだった……

(20)「へえー、そんな筋書きになっていたんですか……」

午後に差し掛かった品川宿に三人が戻った時、街道は市中の大火事を気遣う者たちでざわついていて、鼻が慣れてしまっていた三人にはわからなかったはずだが、相変わらずの北からの強風が、江戸市中からきな臭い匂いを運んでいたのだった。

「難事でした。お城は如何がなりましたのでしょうか？」

街道に出て不安げに北の空を眺めていた宿屋の亭主が、そう和尚に尋ねてきた。

「將軍殿にまさかの事はないはずじゃが、この風ゆえに市中へ広がらなければよいと念じておる。念のため、あるだけの桶などに水を用意されておかれるがよろしゅうかろう」

和尚の言葉を耳にした宿場の者たちは得心顔で頷き、気ぜわしく店の中へ消えて行くのだった。

東海寺が見渡せる通りにまで三人はやっと辿り着いた。和尚の

顔にもやれやれといった幾分かの疲れの表情がにじんでいる。と
その時、寺からの坂道を転がるようにひとりの修行僧が駆け降り
て来た。

「和尚さま、ご無事で何よりでございました」

その修行僧は息を切らし、紅潮した顔つきでそう言い切った。

「おお、心配をかけたのう。皆、このとおり無事じゃ」

「お城からの早馬がございました。將軍殿はご無事とのことでござ
います」

「ああ、そうであったか、そうであったか。それで安堵じゃ」

三人が寺の玄関口に面した時、修行僧たちが総勢で出迎えてい
た。皆が、三人の無事な姿を見て各々安心した面持ちを示すの
だった。

「お食事をとる暇もございませんでしたかと察しまして、ご用意いた
しております」

足元を拭う手桶を携えた修行僧が、丁寧にそう言った。

和尚は、用意された手桶を脇にして足元を拭い始めた。脚半も
藁草履も砂ぼこりで真っ白となっていた。

「保兵衛さん、食事を済ませたらわたしの部屋に来なされ。そう、
海念も一緒にな」

厨房部屋の片隅に、二人用に膳が用意されていた。海念たち
は、早朝から飲まず食わずで歩き通したため空腹が絶頂に達して
いるはずだった。ひっそりとした厨房部屋で黙々と食事に向かう二
人だった。

「海念さん、それにしてもとんでもない大火事だったよね。ぼくの時
代は、放水車が圧力をかけた水を大量に放水して火を消しにかかる
んだけど、ほとんど何もしていないように見えたものね」

「江戸の火事は、建物を壊して燃え広がるのをくい止めるだけのよ
うです。だから一度出火すると大事になるんです」

こんな会話が途切れると、また二人は黙々と食べ続けるのだった。
兄弟子たち修行僧は座禅に入っていた模様で、厨房の外も寺

じゅうが静寂に包まれていた。

「えっ、何ですか？海念さん、何か言った？」

「いいえ、何も言いませんけど」

「……」

「……」

「ほら、何か言ったでしょ？」

「いやですねえ。何も言いませんよ。こうして食事をいただいているんですから……」

「どうも何かは聞こえてくる。あの大火事の騒ぎでおかしくなったのかな？」

食事を終え、後かたづけをしながらも、保兵衛は不可解な空耳に悩まされ続けた。

と、そこへ兄弟子の修行僧が和尚様がお呼びだと伝えて来た。

和尚の前に、二人は幾分緊張気味の様子で並んで正座した。

「いやはや今日は、あいにくのくたびれ儲けじゃったのう。しかも、保兵衛さんにはとんだお土産となってしまうたわけじゃ。できれば、江戸幕府三代將軍家光殿をご相手に、時空を越えた禅問答なりに興じてもらいたいと思ったのだがのう」

「和尚さま、お土産とおっしゃいますと、えっ、もしかしてぼく、いやわたしは、元の時代に帰ることになるということですか？」

「そうじゃ。もうすぐその時がやって来よう。ややもすれば、既にそなたの時代からの響きが届いてはいまいかのう」

「えっ、それじゃ、この空耳はぼくの時代からの音ということなんでしょうか？」

保兵衛は、はっとする思いで隣に座っている海念を見た。海念も、驚きを隠さなかった。目をぱちくりとして保兵衛の顔を見つめていた。

「保兵衛さんが、ここへ来られ拙者が出迎えたのが一昨日の夕刻じゃ。もうすぐ日暮れ時となればまる二日が過ぎることになるのじゃのう。さすればじゃ、その折りに、保兵衛さんはあの伝馬舟を

介して、そなたの時代に速やかに戻ることになるはずなのじゃ。たぶんな……」

「へえー、そんな筋書きになっていたんですか……。でも、和尚さま、もっとちゃんと、そうです、もっとちゃんと教えてください。だけど、どうして和尚さまはそれをご存知なのですか？ それから、えーっと、えーっと、そうそう、どうして『たぶん』というお言葉になっちゃうんですか？ ちゃんとでない怖くなります……」

「そうか、そうか。それでは『ちゃんと』お話しして進ぜよう」

その時、偶然みんなして、時を計るかのように障子に差す陽を眺めるのだった。が、晩秋と言えども夕刻までにはまだだいぶ時間がありそうな外の明るさだった。

「海念や、そちが使っておる部屋に色紙が掛かっておるのう。向かって一番左端に掛かっておる、そう四つの絵が描かれた色紙があるはずじゃが、それをもって来なされ」

またまた、海念と保兵衛は思わず顔を見合わせるのだった。どちらもその表情は「やっぱり！」という思いで嬉々として輝いていた。これで、きっとあの『四つの図柄』の秘密が解かれるという思いが、二人の期待感をいやが上にも高めてゆくのだった。

「はいっ、持って参ります！」

と言うが早いか、海念は素早く立ち上がって和尚の部屋を出て行った。

(21)「ええーっ、そんなー。三十年以上も将来のぼくが……」

『四つの図柄』の描かれた色紙(しきし)が、向かい合う和尚と海念、保兵衛の間の畳の上に丁寧に置かれてあった。障子窓に差す西日が、和尚の部屋を明るく照らしている。

その色紙は白く映え、墨を使い小筆で几帳面に描かれたと思われる図柄が四つ、その白さからまるで浮かび上がるようであった。

「あれは、この東海寺が開かれ、拙者が招かれて間もない頃のことじゃ……」

和尚は、その色紙に眼差しを落とし、殊のほかゆったりした口調で話し始めるのだった。

東海寺は、将軍家光が沢庵和尚のために寛永十五年に建立し始められた禅寺である。沢庵を気に入っていた家光は、何かと和尚を江戸に留ませようとして来たのだが、和尚の方はと言えば何かとこれを拒む素振りに終始して来ていたのだった。そこで業を煮やした家光が、品川に東海寺を建て、沢庵の意を固めさせようとしたと言えよう。

ようやく、沢庵和尚がその東海寺に住むこととなったのは、その翌年の寛永十六年の四月であった。当代一の座にすわることとなった沢庵であったが、その心は必ずしも嬉々とする風ではなかったようである。むしろ、禅僧として無位の乞食の境遇こそを望んでいた沢庵にとっては、権力に寄り添う高位高官、富貴の者たちとの対応に違和感とわずらわしさを感じていたであろうことは、容易に想像されるのである。現に、沢庵が唯一残したとされる著『東海夜話』には、その心境が書き残されてもいるのである。

「春の宵のことじゃった。拙者は真新しい寺のその廊下から境内の池の姿を愛でておった。すると、池のほとりに何やら人影らしきものが蠢いた。とっさに『何者ぞ』と声をかけたのだが、返事がない」「和尚さま、お話の途中ですが、その池というのは私の時代では、埋め立てられて、城南中学校という学校となっているんです。すみません」

「おう、そうか、不思議な縁(えにし)じゃのう。でな、拙者は庭に降りたのじゃ。して物影に寄っていった。それが、何と保兵衛さんとの最初の出会いだったというわけなのじゃ」

「えっ、保兵衛って、このぼく、いや私のことですよ？全然覚えてはいないのですけど……」

「いやいや、保兵衛さんの過去のことではないのじゃ。ここが時空

の不思議とでもいうべきなのであろう。こともあろうに、三十年以上も未来の保兵衛さんだったのじゃ」

「ええーっ、そんなー。三十年以上も将来のぼくが、どうしてそんな時に現れることになったの？」

「さあて、なぜそうなのかは、この和尚にも説明はできぬ。『スーツ』とやらの着物を着こなし、輝きのある皮製の履物を身につけておられ、どこから見てもりっぱなお姿じゃった。髪型もまげなどはつけておられんじゃった」

「そ、そそれで、それでどうなっていったんですか？ 和尚さん」

もう保兵衛は、想像だにできなかった和尚の話に、外聞などかまわずうろたえていた。海念も、ことの成り行きの奇想天外さに、口に手を当て言葉を失っているのだった。ただ、海念は、わずかなゆとりの中で、これまでなんとなく気にしていたひとつの事柄が氷解するのを感じていた。それは、なぜ和尚さまは、自分と同年代の保兵衛さんを、自分のように呼び捨てにせず「さん」づけで呼んでいたかについての疑問なのであった。きっと、和尚さまは、最初にお会いになった年配の保兵衛さんの印象から離れられないでいたからに違いない、とそう思ったのだった。

「怪しき者とは当然思えたが、話を聞くと、ご本人の当惑した様子もまんざら作り事とは思えんじゃった。その真摯な眼差しは、狼藉を為す者とは見えなくて、この部屋にかくもって詳しく話を聞くことにしたのじゃ」

「和尚さま、将来のことか過去のことかよく呑み込めませんが、とにかくありがとうございました……。それでどうなったんでしょうか？」

「うむ。ここでじゃ、ひとつ保兵衛さんに言うておくことがある。ほかでもないのじゃが、拙者はその時の保兵衛さんとは時空を越えた話題に花を咲かせたものじゃった。当時、気を滅入らせがちな拙者に、その折りの保兵衛さんは久々に生き生きとしたお話をしてくださった。現代とやらの世界、そしてそこでの保兵衛さんの苦悩や喜びもな。そこなんじゃ、その話のすべてを、今ここでそなたに話

すことはしてはならんことじゃと、拙者は判断しておる。なぜだかは、聡明なそなたなら分かるかのう」

「だいたいですが、分かります……」

「おお、そうかそうか。良きこともそうでなきことも、みずからが初めて遭遇してこそ人の人生と言うものじゃてな」

保兵衛は、確かに自分が今後どうなってゆくのかを和尚の口から聞きたいという思いもあつたにはあつた。が、それはなぜか間違いなのだろうという直感がかすめたのだった。

「さあてそこでじゃ。ここにある色紙のことじゃが、これは、その時の保兵衛さんがある事情のもとで描きなさったものというわけなんじゃ」

保兵衛と海念は思わず顔を見合わせ、素早く頷くのだった。

『そうだったでしょ、海念さん』

『やっぱり、ご自分でかかれたんですね、保兵衛さん』

という言外の会話が瞬時になされていたに違いなかった。

「その事情というのはな……」

和尚は、ゆったりと左手を湯のみに手を伸ばし、それを両手で包んだ。そして、蓋を取り、わずかに喉を潤し、また元に戻すのだった。それを見守り、つぶらな目で追う二人の仕草は、もう双子そのものように見えた。

「ひとつの事情は、ここへ来られた保兵衛さんが、決して偶然ではのうて、自分の意志で来られたということに係わっておるのじゃ。何としてももう一度、海念に会って話がしとうてならなかったというんじゃ」

海念は、はっと息を殺し緊張した。そして、保兵衛の顔へと、さらに色紙へと視線を移していた。

「保兵衛さんは、子ども時代にここへ来られたことを何十年もしっかり記憶されていたんじゃな。大層その当時の経験を懐かしんでおられた。いや、それはよいとして、再度、自分と同様に成人した海念と会うこと切に望んで時空を越える冒険をなされたそうなんじゃ。ところがじゃ、何とも皮肉なことに時空の掟がそれを拒み、わ

ずかながら遡った時系に落とし込まれてしまったということなんじゃな」

和尚は、目を伏せその折りの保兵衛の落胆ぶりを振り返るように何度も頷いていた。

「保兵衛さんの残念がるお姿は見ておれんじゃった。海念との再会に余程期するものがあったのじゃろうて……。ようやく落ち着かれた保兵衛さんは、その後に遅れて来る幼き自分と海念さんに、何としても文(ふみ)を残したいと申されたのじゃ。何をしたためたかったのかのう。拙者は、それがよかろうと申し上げた。が、一抹の不安が脳裏をかすめたのじゃった。

当世は、幕府によって鎖国政策が完成に向かう時期であることはそなたたちも存じていよう。まして、この寺は、幕府直轄の寺じゃ。また、拙者も高齡にて、いつ果てるとも知れん。猜疑心旺盛な者たちに、われらとて理解に苦しむに違いない左様な文などを残すことは、無用な物議をかもすだけだとそう懸念したのじゃった。

さりとして、拙者への伝言だけでは思いが果たせぬとおっしゃったものじゃ。困ってしもうた。で、思案のあげく拙者がこのようにされてはどうかと、お勧めしたのがこの色紙というわけなのじゃ。

そなたたちだけに分かるそのような『図柄』を、ひとつでは足らぬ、思いを託し三つ、四つを描かれてはどうかとな。さすれば、きっとそなたたちが、あの折りの保兵衛さんの思いを悟るに違いなからう、とな」

二人は、正座している腿の上の黒い袈裟に広げていた両手をぎぎゅっと握り締め、じっと『四つの図柄』を見入って動かなくなってしまった。

その色紙には、保兵衛にしか分からぬ暗号とも言うべき図柄が三つ、それらはいずれも学校の校章であり、ひとつは現在の保兵衛の小学校、台場小学校の「かもめ」の図、さらにもうひとつは保兵衛が転校してくる前の鷹合小学校の「鷹」の図、最後のひとつはやがて入学することになる城南中学校の校章、「檉の三つ葉」の

図がそれぞれ丁寧な筆運びで描かれていたのだ。

そして、もうひとつが別格風に描かれた「鯨」の図なのであった。海念の苦渋に満ち満ちた夢、それを誰よりも理解した保兵衛、この図こそが、ほんのわずかな時の流れの中で、保兵衛と海念とを分かちがたく結びつけた証しを意味してはいなかっただろうか。

やがて、はからずも同時に、二人の袈裟の上に、何かがぼたりぼたりと落ち、黒く染み広がってゆくのを、沢庵和尚は優しい眼差しで見つめていた。

その暖かき雫は、和尚の深遠な配慮への感謝とも、また今はその深さを自覚し得ていない自分たち二人の友情への喜びの予感とも、あるいは人の存在を超越して司る非情な時空の掟へのかすかな慄きとも受けとれるのだった。

(22) 無の境地を目指すのじゃ！ ここでの思いに引き摺られてはならぬ！

暮れ行く晩秋の空の下に、豊かな清流をくねらせる目黒川があった。その川面は、西の空で名残惜しむ朱色の残照をきらきらと映していた。対岸のふちで柔らかく揺れるすすきは、川の流れに沿ってどこまでも続いていた。すすきの向こうには、夕日のまぶしさへと溶け込んでゆく静かな田園が広がっている。

川岸に佇む保兵衛には、こうした光景が涙で滲むほど愛しく思えた。初めてここに来た時には不思議な違和感しかなかったはずである。それが、ほんの二日間ではあってもこの時代で必死に生きる人たちと交わり、自然風景との別れさえをも辛いものとさせてしまった。

保兵衛の傍らには、海念が静かに立っている。保兵衛と同様に暮れなずむ田園を見つめる眼差しには、隠せない悲しさが窺えた。独りでも耐えられる。けれども、自分をわかってくれる友がすぐ

そばにいてくれること、それがどんなにか心に言い知れぬ充足を与えるかを知ったばかりの海念であった。それが、もう終わってしまう。

二人が佇む小高い川岸で、海念は川岸に潜む影へと視線を落としていた。そこには、この別れを宿命として告げるかのように待つものがあった。自分が以前に、松の木に舳い直した伝馬舟である。

「保兵衛さん、耳の具合はいかがですか？」

「ますます、はっきりと聞こえてくるみたい。和尚さまがおっしゃっていたとおり、いよいよトラベルが間近なようです」

沢庵和尚は、海念に心置きなく保兵衛を見送るよう申しつけていた。自分がいない方が気兼ねなく名残惜しむことができるだろうとの配慮だったのであろう。

だが、その前には、保兵衛が不安を持たずに時空を越えられるよう和尚が知る限りの情報を保兵衛に話していたのだった。それは、最初に時空を越えて来た大人の保兵衛が和尚に言い残していった情報であった。

大人保兵衛の記憶には、子どもの時の時空超越、タイム・トラベルの断片的な思い出が残り続けていた。それは、夢を思い起こす場合がそうであるように、どうしても思い出せない部分が残し、正確さと完全さには欠けていたものであった。だが、そうであるにせよ要所々々は漏れ落ちてはいなかった。

滞在時間が丸二日であったこと、トラベルの時が近づくとつれトラベル先の世界からの音が空耳のように頻りに聞こえ始めること、トラベルそのこと自体は最初に使った「道具(媒体)」、こどもの保兵衛の場合は伝馬舟であったがそれを再び使うことなどであった。さらに、名残や雑念を捨て、心を無の境地にできた時にテイクオフできるというコツまで含まれていた。

こうした情報以外にも、和尚は大人保兵衛から聞いていたことも

あった。その時も、何かが災いして梃子摺ったとの話も和尚は聞いてはいた。が、和尚はそのことには触れず、保兵衛にはこう言っていたのだった。

「保兵衛さん、この寺で学んだ座禅を行いなされ。そして、無の境地を目指すのじゃ。ここでの思いに引き摺られてはならぬ。もし、それが難しければ、そちの時代の最も楽しきことで心を埋め尽くすがよかろう」

「海念さん、もうゆかなければならないけど、ぼくはここへ来られたことを本当によかったと思っています。それで、海念さんのような子と知り合えたことを……」

「そうですね。わたしも、保兵衛さんとはもっといっしょに修行したかった。わたしが変わってゆけるところを見ていて欲しかったし、保兵衛さんが立派になってゆく姿もそばで見っていたかった」

「そうなんだよね。実を言うと、ぼくは海念さんのような友だちを探し続けていたように思うんだ。尊敬できる力と勇気を持っていて、それでいて威張ることがない。さり気なくて、すごく自然だし……。なのにもう別れることになるなんて……」

「残念です……」

そう言いかけた海念は、こうしてはまずい、保兵衛さんに心残りなことを助長するような話をしてはまずいと思い始めるのだった。和尚さまがおっしゃっていた心の無の境地からますます遠のくに違いないと懸念したのだった。

海念は、伝馬舟の方へ先に降りた。

「保兵衛さん、わたしが押さえていますからもう乗ってください」

海念の言葉に促されるままに保兵衛も伝馬舟の方へ降りた。

「あっ、そうそう。念のために保兵衛さんの元の着物を持ってきたんです。着替えた方がいいんでしょうね？」

そんなことなどかえりみる余裕のなかった保兵衛は、黙って頷き、袈裟をジーンズとシャツに着替えた。そして、草履をズックに履き替えるのだった。保兵衛の耳には、もうはっきりと京浜国道を行

き交うクルマの騒音が聞こえ始めていた。

耳に手を当てる保兵衛を見て海念は言った。

「もうすぐですね。さあ、そこへ腰掛けて座禅してください」

伝馬舟に乗り込んだ保兵衛だったが、合掌は始めたものの顔は海念の方を見ていた。

「海念さん、りっぱな禅僧になってください。お父さんも、それからお母さんや静さんも、みんながそのことを望んでおられます。それから……」

これに対して海念は言葉をさえぎるように言った。

「ありがとうございます、保兵衛さん」

海念は、このままでは保兵衛の心が乱れ、この時代から離れないのではないかといぶかしく思い始めていたのだ。

「わたしも、この岸で座禅をします。いっしょに行いましょう」

海念がその場に座り座禅を始めたので、漸く保兵衛も幾分ゆるる伝馬舟の中で座禅の格好に入るのだった。

どの位の時が過ぎたであろうか、もう辺りが薄暗く夕まずめに入っていた。しかし、伝馬舟の保兵衛はといえば時空超越ができずに、焦りの気分にさえなり始めていたのだ。

海念には、保兵衛の心が静まっていないことが手に取るようにわかっていた。このままでは予想できぬ支障を来たすこととなる。どうしたものかと思案を始めていた。

「保兵衛さん、暗くなってきましたね。休憩としましょうか」

その声で、保兵衛はほっとして、一息入るのだった。

「保兵衛さんの時代の夕方というのはさぞにぎやかなんでしょうね。あちこちに灯りが点され、まるで昼のようなんでしょうか？」

「そう、商店街は明るくて、おいしそうな匂いがあちこちからしてくるし、海念さんをご案内したいくらいです」

「保兵衛さん、本当ですか？ 保兵衛さんの時代に行ってもいいんですか？」

「いいどころか、今度はぜひ海念さんがタイム・トラベルしてくださ

い」

「それなら、これでお別れではなく、わたしは必ずゆきます。わたしの勤ですが、あの保兵衛さんから頂いたけんだまがきっと水先案内として役立ってくれるはずです。そう思いませんか？」

「そうかあ。あのけんだまもいっしょにトラベルして来たんだもんね」
保兵衛の気持ちはにわかに和らいでいた。

「それでは、もう一度座禅に入りましょう」

「うん」

二人は、舟の上で、そして川岸で再び座禅の格好に入った。と、その時川面を一陣の風が吹き過ぎた。そして、保兵衛を乗せた伝馬舟がスッと消え去ってゆくのを、海念の心は確実に捉えていた。

『保兵衛さん、これでおしまいにはしたくない！必ず、必ず……』

伝馬舟が消え去った川岸に、いつまでもいつまでも座禅し続ける海念の小さな後ろ姿が残った。

【 第二部 】

(23) 保兵衛らしい現代への生還ぶりと、海念からのみやげ！

保兵衛は、もう幾度となく海念のことに、そして今ではもはや何の不思議も感じなくなっているあの時空超越、タイム・トラベルに思いを馳せてきた。そればかりではない。あの小学生の時の、海念との別れ以降にも、実は何度も海念とは再会できたのだった。それらの情景をもひとつひとつ懐かしく振り返るのだった。

あの時の海念の約束は、あろうことか、これまでに何度となく果たされてきた。あの別れのあと海念はしばしば現代へと訪れていたのである。しかも、そのいずれもが、今振り返れば、保兵衛が人生の節目に遭遇し、その折々の困惑に直面した時と奇妙に重なっていたのだった。そして、それはそれが最後となってしまった「あの事件」が起きるまで続いたのだった……。

それだけに今では、小学生当時に迷い込んだあの澄みわたった美しい品川、そこでの海念を初めとした人々の愛しいほどの生きざまの情景が、心の深海に静寂とともに滞留し続けながら、言い知れぬ懐かしさとなって急浮上して来るのだった。

あの時の保兵衛は、このかまびすしい現代へと無事に生還していた。

伝馬舟で放心状態となっていた保兵衛だった。そこへ、荏原神社で遊ぶ子どもたちがおもしろがって小粒の石ころ投げ込む。呼んでも応えない保兵衛に苛立ったのであろう。それが額に当たって気を取り直すといった、保兵衛らしい生還であった。

護岸の石垣の上で小さな子ども達が覗き込んでいる。不思議そうに見つめる者たちの中に、笑っている者もいた。伝馬舟の床に、小石がいくつも転がっているのを知って、彼らが、眠り込んでいた自分にいたずら半分にぶつけたのだと保兵衛は悟らされた。

起き上がる保兵衛を見るや、

「死んでなーい、動いてるぞー！」

と叫びながら子どもたちはいっせいに散って行った。

こうした成り行きが惨めだとさえ了解できないほどに、保兵衛は自分が取り戻せないでいたのだった。

保兵衛は、揺れる伝馬舟の中で立ち上がり、腰掛け板にしゃがみ直した。その動作は見るからに機敏さに欠けている。とても意識のある人間とは思えないものだった。夢遊病者のようなしぐさだと言った方がよかった。

伝馬舟は、薄濁った目黒川の川面に頼りなく浮き、荏原神社に面した護岸の突起に舳い綱で繋がっている。川にせり出した神社の樹木の繁みが、伝馬舟に影を落としていた。傾き始めてはいたが、秋の陽はまだ暮れようとはしていない。

保兵衛は、伝馬舟の揺れに逆らうことなく実に従順に揺らされていた。座ったままの姿勢で、京浜国道を通す橋の方を、うつろな眼差しで見つめている。ブーン、ズーンという、国道をクルマが行き交う音だけが絶え間なく聞こえていた。

とその時、頭上の繁みがザワザワと風で音を立てた。川面には鱗のような漣が走った。保兵衛もその風をひんやりと感じた。と同時に、われに返ったように、自分を取り囲む状況の意味をのみ込み始めるのだった。

『そうか、ぼくは眠ってしまってたんだ』

ようやく事実の端緒だけは掴めた。

『そう言えば、伝馬舟を借りてひとりで漕ぎまわっていた。天気がいいのでついつい遠出をしたんだ』

保兵衛は眠ってしまった直前のことを必死で思い出そうとしていた。

『それで、荏原神社の下まで来たら、急に眠くなり、そうだ、流されないようにああして舳い綱を引っ掛けた……』

護岸の突起にかろうじて引っかかっている舳い綱を保兵衛は見つめた。

『それから寝てしまったんだ……。どれくらいの時間だったんだろう。でも、まだこんなに明るいんだから一時間くらいしか経ってないはずだ。そーか、眠っちゃったんだあ』

『さあ、もう帰らなくちゃ』

何だか風呂敷を頭から被っているような不透明さが保兵衛の意識を覆っていた。

保兵衛は、舳い綱をグイッと引っぱる。上潮が始まっていた。綱を舳いでいた護岸の突起のすぐ下まで、川の水位は上がっていたのに気づいた。

『そーか、眠っちゃってたんだあ。でも、こんなに小さな舟なんだから、寝てる間に引っくり返らないとも限らなかったよなあ。危なかったなあ、危なかった……。』

そんなことを思いながら、櫂(かい)で、片側を漕いでは反対側を漕ぐといった動作を続けた。

十分ほど漕ぎ続け、前方に品海橋が見えて来た。

『あっ、まずい！』

保兵衛は、品海橋を同学年の友だち二、三人が、顔を見合わせ何やら話しながら、歩いて渡っているのを見つけたのだ。

『えっ、どうしよう？ 見つけられたらやっかいなことになっちゃう……。』

一瞬戸惑った。が、上潮だったことが幸いした。舳いである大きな釣り舟、海苔舟の陰に隠れ込むことができたのだ。

保兵衛は、伝馬舟の中でうずくまりながら冷や汗をかいていた。『よりもよって、どうして今頃あんなとこ歩いているんだ。そろばん塾の帰りかな？ [君は確かそろばんを習っていたはずだから……。』

そんなことを考え、保兵衛はくりくり坊主頭の[君の顔を思い描いた。その時、何か切ない感覚が保兵衛の身体を走った。が、それが何なのか、もどかしくも捕まえ切れなかった。それはまるで、大事なものが渦で巻き込まれて、のまれ、沈みながら先端の一角だ

けが見えているようなもどかしさだった。それが掴めれば、手元にぐいぐいと引き寄せることもできようものの、手がすべり掴めないもどかしさ.....

つい先ほど眠ってしまった際の夢の中の何かだという憶測だけは感じ取っていた。しかし、夢というものは、それを思い出そうとすればするほど逃げ回り、捕らえどころがなくなってゆくもの。そして、困り果てても、誰かに尋ねて判明するものでもない。

友だちたちが行き過ぎるのを待ってから、保兵衛はまた漕ぎ始めた。その品海橋をくぐり、右へと進むともう出発地点が遠くに見えてくる。

「やっぱり保兵衛だったのかあ、伝馬舟出してたのは.....」

両手を腰にあてたコンポンが、目黒川に面し行き止まりとなった道路の先端に立って叫んでいた。「不法に」川岸に作っていたハト小屋の十数羽のハトたちに餌をやりに来ていたようだった。

コンポンとは、近所に住む動物好き、大工作業好きの妙な中学生で、名前を根本(ねもと)さんと言った。さらっとした気性に保兵衛は好感を持っていた。よく遊び仲間に入れてもらっていたのだ。「ごめん。コンポンが帰るまでには戻るつもりだったんだけどね」「どこを航海してきたんだあ？ ずいぶん漕ぐのがうまくなったじゃん。どれ、舳い綱こっちへ投げな」

コンポンが中心となって、以前にみんなで作った簡単な舳(はしけ)代わりのいかだにコンポンは飛び移っていた。そして保兵衛が投げた舳い綱を器用に受けとめると、いかだの柱に素早く、実に鮮やかにその綱を舳うのだった。その手元に保兵衛の目は釘づけとなった。簡単には解けない本格的な縄結びが見事に仕上がっていた。

この時なのであった、保兵衛が、もどかしくも思い出せずにいたあの海念を思い起こすことができたのは。さらに、東海寺を、沢庵和尚を、江戸の光景をと次々に、そして一気に取り戻していったのだった。

それは、ザーザーと音を立て無残に故障してしまったテレビ画面に、鮮明なカラー映像が眩く蘇った時のような感動を保兵衛に与えたのだった。

『そうだったんだ！ 海念さんの夢だったんだ！』

しかし、その熱い感動が、身を震わす驚愕へと変わるまでにさほどの時間はかからなかった。

それらが決して夢の中での出来事ではなかったことが、コンポンの何気ない言葉から衝撃的に悟らされたからだった。

「保兵衛はいつから年寄り地味なこと始めたんだい？」

「どうしてさあ？」

「だってさあ、そのジーンズのポケットからはみ出してる数珠(じゆず)は何に使うんだい？」

とっさに保兵衛はジーンズの左ポケットを見下ろした。ポケットからは、茶色い房とつやのある木製の数珠玉の数個が覗いていた。それが、見覚えのある海念の数珠であることを、知らないはずはない保兵衛なのであった。

(24)「あるいは、保兵衛さんは苦勞不足かもしれませんね！」

「保兵衛さん、保兵衛さんなら持久力を備えれば、もう少し早く走れるはずですよ」

「それにしても、海念さんは凄い速さだ！」

もう、とっぷりと日が暮れた高台の校舎に沿う細長い校庭を、二人は走り終え、ハァハァと息を整えながらスタート地点へと歩んでいた。

城南中学校は、かつての東海寺の境内に造られた学校である。当時の凹凸のある地形が、おもしろく工夫されて設置されていた。

東海寺の池が埋め立てられメインの校庭が広がっている。そこから見上げる丘はそのまま残され、見晴らしがよい、うなぎの寝床

のように長い木造二階建ての校舎が建てられていた。数十メートル以上の長さである。そして、その校舎の前に道路幅程度の未舗装の土地があり、主にスプリント用のサブ校庭として使われていた。校舎の反対側は、樹木が残された急斜面となっていた。

保兵衛と海念が走っていたのはその校庭であった。

「今度は、わたしがここで合図をしますから、全力疾走してみてください」

保兵衛は陸上部ではなかった。その俊足が買われ、間近に迫った区の陸上大会に出場することになっていたのだ。クラブ活動は美術部に所属していたので、それが終わった後ひとりで練習することになっていた。

「ヨーイ、ハイッ」

と、海念は鋭く手を打った。保兵衛は校舎の正面玄関の灯りをめざして疾駆した。

カッカカッという小気味の良い音が響き渡る。スパイクの鉄の爪が、校庭の小石を蹴り、時々花火のような火花が暗闇に散った。校庭の奥の物影でひっそり立つ海念は、『うむ、うむ』と頷きながら小さくなってゆく保兵衛を見守っていた。

海念が何故ここにいるのであろうか。これが、海念の最初の時空超越であったのだ。

保兵衛は、薄暗くなったその校庭で何本かの疾駆を流し終え、スタート地点付近でひとり、汗を拭いていた。なぜか気分が落ち着かず、無心になりたいと思い、そんな時刻に走る保兵衛だったに違いなかった。陸上大会に備えるつもりもあつたにはあつたが、むしろ、この時保兵衛は別のことで煩悶していたのだった。海念さんならどう対処するだろうか、と、瞬時、海念に想いを馳せたかもしれない。

そこへ、樹木でうっそうとした急斜面の側から、ひょっこりと海念が姿を現して来たのであった。まるで、待ち合わせでもしていたよ

うなタイミングだった。

「えっえっー、海念さんじゃないですか」

「ご無沙汰してます。そんなに驚かないでくださいよ。お元気なようですね。ちょっと気になって、東海寺から飛び出てきました」

「うあー、懐かしいなあー」

「あまり長居はできないのです。話が終わったらすぐに戻ります」

「へえー、そんなことができるんだ」

「これが役に立っています」

海念は胸に下げた托鉢用の袋から懐かしいものを取り出した。保兵衛のあげた「けんたま」であった。

「すでに何度か時空超越の修行をしましたが、このお陰で自由自在と言えます」

「そう言えば、あの時、海念さんはぼくに数珠をくれたんですね。大事にしています」

「今度、東海寺にお出での際には心の支えにしてください」

保兵衛と海念は、急斜面側に柵のつもりで横たえられた木材に並んで腰掛けた。もうすでに人影とさえ見分けがつかない暗闇になっていた。時々、遠くに浮かぶ正面玄関の灯りの下に、残務を終えた先生が帰途につく姿が見えた。

「保兵衛さん、何かお困りのようですね。違いますか？」

「えっ、どうしてそれが？」

「わたしにもわかりませんが、座禅を組んでいるとここしばらく前から、保兵衛さんの苦しそうな顔がたびたび眼の奥に浮かぶのです」

海念の言うとおりであった。保兵衛はちょっとした難問にぶつかり苦しんでいたのだ。

保兵衛は、現在、生徒会会長に選ばれていた。これまでも経験し、そうした立場がある種のやり甲斐とを感じるほどになっていた。

が、つい最近、予想だにできなかったことを経験したのだった。

その大柄ゆえに、親分肌で何人かのグループのリーダーと見えた同学年のAから、奇妙な忠告を受けたのだった。

Aが突然、保兵衛を放課後のトイレに誘ったのだ。そして、保兵衛にこう言った。

「オレはさあ、保兵衛のことを尊敬してたんだ。勉強ができるだけじゃなくて、しっかりした考え持ってるし、身体も鍛えてるし、会長として申し分ないヤツだとね」

「何が言いたいんだ。率直に言ってくれよ」

「だけどよー、センコーにチクルのような犬みたいなことなんかしないでくれっていうことだ！ 保兵衛らしくないんだよ。それだけだ」

その時は状況が見えなかった保兵衛だった。そうかアレだと事情が呑み込めたのは、しばらく経ってからのことであった。

保兵衛は、生徒指導担当の先生とも親しくしていた。その独特の厳しさから嫌う生徒も多かったが、一度殴られる経験も済ました保兵衛は、がんばっている熱血教師のひとりだと考えていた。

ある日、中学校の裏手の公営住宅の住人から、最近空き住宅に中学生らしい数人が出入りしているとの通報が、その先生のもとに入った。すでに保兵衛にもそんなうわさが聞こえてはいた。まさか、と保兵衛は聞き流していたのである。

しかし生徒会でもこの件が話題となって行った。結局、うわさを生徒指導教師とともに確認しに行くことに発展してしまった。

こうして、住宅の物置部屋で喫煙していた生徒のいることが発覚した。そして事態は生徒会の問題から、学校側に移行することとなったのだった。詳細は生徒たちには伏せられたが、うわさの中には意表をつく名も含まれていた。

保兵衛が悩んだのは、Aが言ったことが否定し切れないでいたからなのであろう。事情はどうであれ、結局自分のしたことは、おりこうさんぶって、自分が嫌うことのひとつである犬のようなことをしたという呵責が、どうしても消せなかったからなのであろう。

小学生ならともかく、中学三年ともなると、「健康優良児」的にのっぺりといい子ぶるスタイルが決してベストだとは思えなくなって

いた保兵衛だった。タバコを吸いたいなどと考えたこともなかったが、そうした秘密の行動への誘惑に身をゆだねてゆく友人たちの方が、正直なんじゃないかとも思ったりした。感じて自然な年頃かもしれないのに、そんな誘惑をないものと決め込んでいるかのような自分の方が、偽善的なのかとさえ感じる始末だったのである。

「海念さん、海念さんだったらどうする？」

一通り、いきさつと自分の思いを話した保兵衛は、海念に問いかけたのだった。

「ええ、難しい問題ですね。先生たちと歩調を合わせたら友だちたちから恨まれるし、黙っていてもその友だちたちは深味にはまってゆくでしょうね。」

すっきりした答えが出てこないということは、問題設定自体に無理があるか、あるいは……」

「あるいは、何なのさあ？」

「あるいは、保兵衛さん自身の側の材料不足、情報不足、苦勞不足かもしれませんね」

「苦勞不足っていうのは？」

「わたしには、隠れて何かをしようとする人の屈折した心境がわかるような気がします。何か、やりきれない苦しさそうさせるのかもしれませんが。自慢にはなりません、わたしは苦しさの極限を見た気がしています。だから、苦しさから不本意なことを仕出かす者の成り行きが大体わかります。多分、その方たちと直接面と向かって、『中途半端なことしてるんじゃない！』と一喝してあげることができるように思います。先生方のご指導よりも効き目のあることを言ってあげることかもしれません」

「まいったなあ、海念さんには……」

「でも、保兵衛さんも、もうしばらくすると、ご自分が先生方の陣に近いのか、友だちたちの陣に近いのかが、ごく自然にわかってくると思いますよ」

「うーん、まだまだ苦勞が足りないっていうわけかあ」

海念の手の合図でスタートした保兵衛は、一緒に走った海念のもの凄い速さを思い起こしながら、これまでにない速度を出していた。そして、正面玄関の灯りの下で速度を緩め、立ち止まった。膝に手を当て、前かがみでハァハァと息を整えた。海念さんは、と振り返った時にその姿は見えなかった。暗さのためかと、ジョギング風にスタート地点に戻ったが、海念の姿はやはり消えていた。

『そうか、戻ったんだな』

汗を拭きながら、保兵衛は海念との会話を思い出すのだった。『苦勞が足りないかぁ。そうかもしれないよなぁ。ぼくは精一杯努力をするという苦勞はしてるつもりだけど、その苦勞は今までは大体望んだ成果に結びついてきたはずだ。こんな努力は苦勞とは言えないのかもしれないなぁ。百円出して、百円の菓子を買うのと同じなんだから、何のにがさも、辛さもないって言うことだ……』

海念の予測どおり、その後保兵衛は一流高校への進学を果たしたものの、五十円、もしくは十円程度出して百円の買い物をしてゆく連中に囲まれ、七転八倒の苦しさを味わうこととなってゆくのだった。

(25) 沢庵和尚の遷化と保兵衛、海念の青春の挫折

舗道の敷石に、わずかに残った枯葉が舞う季節、師走も押し迫った頃になると、保兵衛は、海念を思い起こすことがあった。あの快活で豪放な海念の、もう一つの顔をどうしても思い浮かべがちとなった。

都心、新橋の通りに面する喫茶店で、保兵衛はコーヒーカップを手にしなが、大きなガラス窓の外を往く人たちを、見るとはなく眺めていた。コートの襟を立て気ぜわしく行き交う人々の流れを見つめ、その先で待つ人々もいるだろうことを想像したりしていた。

恒例化していた月に一度のセミナーの講師の役を果たした日

は、帰途につく前に、そうして気分をクールダウンするのが常となっていた。まして、今年はこの日が最後であったためか、安堵感めいたものが時間を忘れさせる解放感をもたらしていた。

あの日、海念は地下鉄赤坂見附の入口付近に、托鉢姿で佇んでいた。

帰途につく保兵衛は、正門からすぐに続く長い遅刻坂を下りきったところで、クルマが行き交う道路の向こう側の歩道に、笠を深くと被った托鉢僧の姿を見つけた。

立ち並ぶビルが夕日をさえぎり、薄暮となったビルの谷間では、商店などが施したクリスマスの飾り照明の彩りが人目を引いていた。そんな中、黒白の法衣に身を固め、笠を被った托鉢僧侶の姿は、関心がなければ容易に見過ごす光景であったに違いない。

だが、保兵衛は見逃さなかった。横断歩道の信号の替わるのが待ち切れないような仕草で、その僧侶の方を凝視していた。時々外人が眼を向ける以外に、多くの通行人はその姿を黙殺する。保兵衛には、ひょっとして海念さんかもしれない、という澄み切った直感が働いていた。それと言うのも、この二、三日、どういう脈絡かは自覚できなかったが、海念を思い出すことが奇妙に続いていたからであった。

保兵衛は、自分と同じ背丈ほどのその托鉢僧侶に近づいた。が、海念だと確かめるすべが思い浮かばず、一瞬たじろぐ。小銭入れから硬貨を取り出し、黙って托鉢の鉢に投じることとした。僧侶は軽く会釈する。と、

同時に、

「保兵衛さんでは、ありませんか？」

という、まさに聞き覚えのある口調が、低く返ってきたのだった。

「ああ、やはり、海念さんだったのですね……」

保兵衛が東海寺へ時空超越してから、すでに七年が過ぎていた。二人は十七歳となり、保兵衛はこの赤坂見附にある高校の二

年生の冬を迎えていた。

確かに、いつか海念が言ったように、保兵衛は、優れ者が集まったこの高校に進学して、それまでにはなかった物差しを用意せざるを得なくなっていた。そして、ようやく自分なりの新しい物差しを見つけ出し始めていた頃だった。

少年が大人となってゆくためには、一度や二度はまともな階段を踏み外し、死ぬかと思わされるほどの激痛を味わうことが通過儀礼であるのかもしれない。

保兵衛は、自分程度に、いやそれ以上にゲームを巧みに進める者たちがこの世に大勢いたことに、否が応でも気づかされた。そして、ゲーム上の勝利だけで組み立ててきた幼く脆い自分の内面が、音を立てて崩れてゆくのを知らされたのだった。

何の対応策も用意してこなかったためのみじめなうろたえが、一年程度は続いた。不用意にこの学校へ入学するローカル・エリートたちが、少なからず落ち込むトラップであったのだ。周辺の何人かが、それぞれの症状でドロップしてゆくのも目撃していた。

保兵衛の選んだ方向は、不良となってやるということだった。周囲の連中は、決して不良になんかなれない奴らばかりだと見抜くにつれ、不良となって、荒野を彷徨する自分のイメージが積もってゆくのがあった。知的に、精神的に不良となってゆくことを、ぎりぎりの内的バランスの中で選び始めていたのだ。「アウトサイダー」となってゆくことを夢見る日々を積み重ね始めていた。

それは、挫折の弱さと、開き直りつつ希求し始めてゆくという両面を不器用に引き摺る点において、紛れもなく青春時の不良の本質そのものであっただろう。この世の権威を支える全ての存在への疑念を叫びながら、叫ぶ自身の根拠としてはわがままな主観以外の材料を何も持ち合わせないという、まさに青春と不良の、いわば合金時代を歩み始めていたのだ。

保兵衛は、佇む海念を、話ができる場所へと誘うことにした。赤坂見附交差点に降り、青山通りを西へ向かう神宮外苑方面へと歩

くこととした。陸上部に属したころ、毎日のようにこの道筋を走り込んだ保兵衛だったのだ。

「あそこで待てば、遅かれ早かれ保兵衛さんが見つけてくれるものと確信していました」

海念は、沈んだ口調でそう切り出す。保兵衛には、海念に何か深く思い悩むことがあっての時空超越だと、十分に察知はできていた。だから、よく場所がわかりましたね、とか、どのくらい待ちましたか、などという瑣末な会話をする気にはならなかったのだ。ただ、沈む口調の背後に、どのような難事があったのだろうかという点だけが気掛かりとなっていた。東海寺での修行生活で手に余ることに遭遇したのだろうか、と想像していた。

「何かあったようですね、海念さん」

ようやく、そう言って、学生服の上にはおったコートの襟を立てながら、保兵衛は海念が被る笠の下を覗いた。海念の顔は、以前と較べほっそりとなっている。それがなおのこと精悍さを強めていた。が、眉を曇らすその表情の奥に、秘められた並大抵ではない苦悩を見てとった時、保兵衛は戦慄に似たものを覚えるのだった。「沢庵和尚が、遷化(せんげ)なさいました……」

「遷化とは、お亡くなりになられたということですよ」

「そのとおりです。去る十二月十一日の早朝に……、七十三歳で……」

海念はそのあとの言葉を継げずに押し黙ってしまった。保兵衛も、遠く夕日を背にした神宮球場や、葉を落とした木立のシルエットを見つめるともなく見つめ、黙っていた。

夕日を見つめる保兵衛は、あの最初の日に、年寄りの風貌ながら夕日の残照を受けたその顔が、毅然として力を漲らせていたことを思い起こした。

そして、鬘鑱(かくしゃく)と歩む和尚を先頭に、海念さんや自分が追っかけるようにして江戸まで歩いたことを。さらに、自分が現代へと戻る不安に怯えた際、快活な様子でそれを振り払っていたことを……。いつしか、保兵衛が見つめる夕日の光景は、ま

ばたきとともにきらきりと滲み始めていた。

「そうだったのですか。実は、ぼくはだいぶ以前に東海寺のことを図書館で調べたことがありました。七十何歳かで亡くなられたこともその時に知りましたが……」

保兵衛はそう言って、ふとその時に感じたある種の奇異な感情を思い出そうとしていた。何であったかは定かに思い出せなかった。が、『ええっ』というような驚きが伴ったことだけは記憶に残っていたのだった。

「それじゃあ、まだ幾日も経っていないので、海念さんもお葬式などで大変だったんでしょうね」

「そこなんです。そうした世の通例を、和尚はすべて拒まれて、独り逝かれたのです……」

保兵衛は、その言葉から、鳥肌が立つような感覚で、つい先ほどまで思い出せずにはいた衝撃的な事実を、脳裏に蘇らせたのだった。そして、その事実が、海念の師を亡くした悲しみを、さらに複雑な苦悩へと変えていたことを瞬時に確信したのだった。

(26) 自分を恥じ入るかのような印象が溢れる海念！

正面に絵画館の建物が見通せた。二人はそんな歩道を歩いていた。師走の夕刻ではあったが、歩道に枯葉が舞う神宮外苑には、思いのほか散策する人影がちらほらと見受けられた。

二人の会話は、重苦しく沈み、そして途絶えがちとなっていた。何故、沢庵和尚は、もはや禅僧たちの常ともなっていた葬式や法事を拒絶されたのか。そればかりか、墓をつくることをも拒否された。ご自分の七十三年の生涯を意味のなかったこととして、消し去ってくれ、と言われて亡くなられた。そうした和尚の最後のご遺志を、どのように受けとめればよいのかという難問の前で、身じろぎひとつ封じ込められてしまった海念だったのである。

その難問は、いわば和尚から弟子たちへの最後の「公案」(こうあん)とも言えたが、師を失い途方に暮れた者たちにとっては、はかり知れない難易度を秘めたものであったに違いない。まして、まだまだこれからとも言うべき、若く未熟な海念にとっては、茫然自失の出来事以外の何ものでもなかったのだ。

保兵衛にとっても、図書館での調べで知り、その際に受けた衝撃以来、心のある部分に手がつけられない重荷として潜めてきたものだった。

和尚の遺戒の言葉は、漢文で以下のように記されていたという。『全身を後(うしろ)の山にうずめて、只土を掩(おお)うて去れ。経を読むことなかれ、斎(とき)を設(た)てることなかれ。道俗の甲賻(ちょうふ)を受(う)くることなかれ。衆僧、衣を着、飯(はん)を喫(く)し、平日のごとくせよ。塔を建て、像を安置することなかれ。諡号(しごう)を求(もと)むることなかれ。木牌を本山祖堂に納(な)むる事なかれ。年譜行状を作(つく)ることなかれ』

また、『わたしに法を嗣(つ)ぐ弟子はない。わたしの死後、もし沢庵の弟子と名のる者があれば、それは法の賊である。官に告げて厳罰にせよ』とさえも記されていたという。自分一代で終わることをよしと仕切ったのである。

「保兵衛さん、和尚の禅の道は、あまりにも壮絶です」

ようやく海念は短い言葉を口にした。当惑を隠さない響きが保兵衛に伝わった。

「禅の厳しさは、わたしなりに追求してきたつもりでした。しかし、この度の和尚の遷化によって、わたしは、一体何を修行してきたのかと……」

「無理もないことだと思います。海念さんは、禅の修業も熱心だったけど、ひたすら和尚を慕っておられましたからね」

「常に見守っていただいていると思うことが、わたしのすべてだった。修行の辛さなど、和尚の眼差しの前では、ないも等しいもの

だったのです。それが、突然に……。そしてあのようなお考えをお示しなされた……」

「……………」

「いや、保兵衛さん。わたしがここへ来たのは、泣き言を聞いてもらうためではありませんでした。和尚の最後のお考えについて、保兵衛さんならどのように思われるか、その一点が知りたくて飛んで来たのです。

先ほどのお話ですと、和尚の遷化についてお調べになったとのことですから、なおのこと、保兵衛さんのお考えを聞かせていただけませんか。なんでも結構です。今のわたしには、わたしではない人の受けとめようを知ることが必要なんです……」

常になく取り乱してはいるものの、確かな眼差しで突破口を睨んでいる海念らしさを、保兵衛は感じ取った。

「ぼくは、偉そうなことなんか言える立場じゃありません。禅のことだって聞きかじっているだけです。

ただ、ひとつ気にしてみたいことがあるんです」

「えっ、それは何でしょうか？」

「ええ、権力との関係という視点なんです。ぼくも、歴史や社会を学ぶにつれ、今までは何のことだか皆目わからなかった権力という存在が、ようやく視野に入ってきました。

人の世を見つめる上では、好き嫌いの問題ではなくて、この視点が避けられないものじゃないかと思ったりしています」

「和尚の場合、徳川幕府との関係ということですか？」

「そう、ぼくも以前から感じてはいたんだけど、後世の人々の中には沢庵和尚を『権力と仏法のはざまに生きた和尚』だと評する人もいるくらいです。そうした人たちの分析を踏まえてお話しします。

もともと禅の考えは、いっさいの権力を承認しない立場ですよ。ね。和尚が『紫衣事件』に巻き込まれたのも、それが理由であったはずです。

しかし、いろんな事情から和尚は、家光将軍が帰依し、おまけに東海寺の住職といういわば、当代の禅匠で出世一座にすわること

になってしまったわけです。

和尚自身の自然な傾きとしては、乞食を夢みる閑居の人であったはずだと言う人もいます。わたしもきっとそうだったのだろうと思っています。現に、若い時に、あの大徳寺の住職に推され、三日で降りたりされているんですよね。

しかし、そんな和尚が避けて避けられなかったのが東海寺の住職就任だったのです。そしてこの選択には、見つめる必要がある二つの点が隠されていると思っています」

「……………」

「ひとつは、紫衣事件以降、禅の臨済宗正当派である大徳寺、妙心寺の二寺が相変わらず幕府権力の直接的支配下におかれ続けたことに関係しています。和尚としては、自らが招いたことでもあり、これをなんとか解放したかったに違いないと思われるんです。

多分、家光將軍の和尚への好意を頭ごなしに拒否せず、東海寺住職の座を受け容れたのは、その点を凝視しておられたのではなかったかと推測できます。そして、見事、家光將軍を口説き、大徳寺、妙心寺二寺の直接的な権力介入を止めさせてしまうのです。和尚が東海寺に入って二、三年後のことだったはずですよ」

「そうだったのですか……。まだわたしは新参であったので何も……………」

「こうした思惑があったために、和尚は、禅僧としての本来の望みであった乞食を夢みる閑居の人の生き方を、諦めざるを得なくなってしまったのですね。だからその分、東海寺での不本意な生活に言い知れない苦悩が寄り添い続けたということになります。これが二つ目の点なんです」

「……………」

「おそらく、和尚の苦悩は誰にも言えないどころか、誰にも見せられないものであったはずでしょうね。家光將軍や幕臣周辺の者たちには当然のこと、寺の内の修行僧たちにもね。そう、海念さんにも、それをにおわせるほどの和尚の拙さではなかったんじゃないですか。違いますか？」

「……………」

海念は、かたく眼を閉じ、押し黙っている。自分を恥じ入るかのような印象が溢れんばかりに見受けられた。

「保兵衛さん、わたしはなんて了見が狭かったんでしょう。自分の抱える苦悩だけに眼が向き、柔和な和尚の眼差しの奥に秘められたそんな苦悩に到底思いが及ばなかった……。なんとと言う自分本位な人間だったのだ……」

二人が腰掛けた外苑の木立の下のベンチは、薄暮に包まれていた。いつの間にか、散策する人影も少なくなり始める。

「何故、和尚がそのような遺戒の言葉を遺したかの解説をしようとした書物は見出せませんでした。だけど、さっきのような二点をもとにすると、和尚の心の内側が少しは想像できるように思うのです。どうでしょうか、海念さん」

「十分です。十分だと思えます。わたしから抜け落ちていたその部分をいただいた今、わたしには、この七年間の和尚の表情やお姿が、まったく異なった様相で蘇ってくるようです。何もして差し上げられなかったとは思いますが、何故、和尚の立場やご心情をもっと察することができなかつたかと……」

「……………」

「保兵衛さん、今日はやはりこちらへ来て良かった。保兵衛さんのお話を、東海寺に戻ってじっくりと咀嚼したいと思っています。今度お会いする時には、きっと澆刺とした海念をお見せできるはずですよ」

海念は、ベンチからさっと立ち上がった。保兵衛の方に向き直り、軽い会釈をする。そして、右手を懐に収まったものに触れるかと見えた途端に、海念の姿は忽然と消えていた。

保兵衛は、海念の懐に収まったものをほほえましく思い浮かべながら、ベンチからゆっくりと立ち上がった。そして、グランドの遠くに眼を凝らした。走る犬に引き回されて小走りとなった、そんな初老の人の姿を、保兵衛はしばし見つめていた。

(27) ジョン・レノンのあの反権力的スタンスは.....

「学校周辺が騒然としていると思ったら、ビートルズが来日してるんだって？」

「すぐ裏手のヒルトン・ホテルだってさ。うちのクラスでもエスケープして様子見に行ったのがいるらしいってじゃない」

「あんな長髪のどこがいいって言うのかねえ？」

「南沢、そいつは認識不足っていうやつだよ。アメリカじゃ、キリストより人気があるとかが騒がれてる革命児たちだけ。なんせ、伝統社会英国の堅い殻をぶち破ってるんだからすごいと言うほかないさ」

「ほらまた、始まったよ、高井のプチブルの言い草！ベトナムが深刻になりつつあるこんな時に、よくまああんなへんてこなやつらに関心なんか持てるもんだよ。ねえ、大島さん？」

南沢は、一年留年している部長の大島に、加勢を求めるような口調で言った。

「おれはいいセンスしてると思ってるけどね.....」

「いやー、これは以外だ！」

放課後の社研(社会科学研究部)部室には、保兵衛を含むいつものメンバーが顔を揃えていた。校舎四階の片隅にある部室からは、日枝神社越しに、間近に東京ヒルトン・ホテルが眺望できた。四人は、窓際から古びた窓ガラスをとおして壮大な白亜のホテルを見るとはなく見つめていた。

保兵衛は、高校三年の初夏を迎えていた。海念の悩みに接して以来、考えることが多くなり、いつしか社研のメンバーたちと連むようになっていたのだ。

高井と、南沢とは同級であり、考え方や素性はだいたい呑み込んでいた。

高井は、いわゆる知識人家庭での育ちを強くにおわせるタイプ

だった。社研に入った動機も、自分は個人主義だから、社会のこともっと知るべきだと思ったからだ、何とも「合理的な」対策を、保兵衛は聞かされていたのだ。万事、高井の発想には、当事者としての泥臭い体験などが捨象された、透明性と第三者性、言ってみれば評論家風の涼しさがいつも漂っていた。だが、そうだからこそと言うべきなのか、常にジャーナリスティックな刺激性とシャープな切れ味がそれなりの魅力を醸し出していた。

それに対して南沢には、社会正義のようなものを志向する傾向が随時感じられたものだった。悲憤慷慨を基調とする情感含みの弁をしばしば聞かされて来たし、そもそも保兵衛の入部も南沢の勧誘によるものであったのだ。どちらかと言えば、あまり実生活を語らない方だったが、か細い声で一度だけ聞いたことがあった。「おれのうちにはそんなものは無かったよ。なんせ、下の下のプロレタリアート家庭だったからね」

卑下するような薄笑いを込めた独白を、保兵衛は覚えていた。

保兵衛も、過去、現在ともに決して裕福などではない家庭生活に慣れていたが、それを恥じたり卑下する感情は皆無に近かった。だから南沢に多少の共感を覚えるとともに、何か違和感が禁じえなかった。また、いわゆる学業を押し並べて出世の道具と決めつけ、完璧に軽視する短絡さにも賛同できなかつたりした。悲憤慷慨にしても、熱っぽい口調ではなく、半ばニヒリズムに膝まで浸かった趣きがあり、まさに屈折していたのだ。

ひとつ年上の部長を務める大島のことは、もうひとつ不案内な保兵衛だったが、研究や活動に取り組む大島の姿勢にどこか腰の据わった落ち着きを感じとっていた。南沢の話では、何でも幼い頃に九州の炭鉱で父を亡くし、その後親戚を頼って上京したという。将来は、弁護士となって社会的弱者のために働きたいとのことだった。

子ども時代の忘れがたい体験や思いを、現在の動機として引き摺っている点や、真摯な身のこなしなどが、保兵衛にはどこか海念との類似点として映っていた。

この時期、保兵衛が行きつ戻りつしながら考えていたことは、いわば、人生を左右するような体験とでも言うようなものに、人はどう立ち向かうべきかということだった。

海念の生きざまへの関心が、保兵衛の心に大きく占めていたのは言うまでもない。そして、沢庵和尚の一生とその衝撃的な遺戒に、ことさら関心を向けたのもそうした視点からなのであろう。

幼い頃の生活体験は、幼い心に、強いコントラストのイメージで焼き付き、その後の人の心を捉えて離さないものなのであろう。いや、幼い時期と限定することはないのかもしれない。人は、生活体験の中で、心を形成し、そして知識を定着させ、行動してゆくものである。心は、ある時には信念となり積極的な行動を支える。が、ある時は人の行動を縛り、何にもまして当人を不自由に陥れる。心の操作ほどに厄介なものはないようだ。心の操作の達人とも言うべき禅僧沢庵和尚であってさえ、「心に心心ゆるすな」と格闘した形跡が窺える。そんなふうに、保兵衛は見つめ、困惑していたに違いなかった。

「上期の研究課題は、それぞれ進展してるのかなあ？ 廣瀬はどういう角度から迫るつもりだ？」

大島が、黒板を背にしてテーブルに付きながらそう言った。黒板には、かねてから部としての上期研究課題が次のように記されてあった。

『 知識人問題とサルトルの アンガージュマン 』

「浮動する」いいかげんな知識人に対して、第二次世界大戦の戦中、戦後に、「レジスタンス」の立場で積極的に政治活動を進めてきたフランスの実存哲学者サルトルが、上期の研究対象だった。そして、知識人たちが浮動・浮遊する弱点を、鋭く批判してサルトルが提起した アンガージュマン（社会的、政治的問題への自己拘束的参加）を、焦点としようとしてきたのだった。

「分からないことばかりで困ってるんだけど……、知識人たちの生

活体験の実態を洗い出してみようかと考えてるんだ。中産階級とか、中間階層とか言って、紋切り型の理論面で追ってもあんまり手堅いものは出てこないような気がするんだよね」

「おもしろそうなアプローチだけど、材料集めに難航しそうじゃないかい？」

「行動的知識人と呼ばれた人たちの人生を追うということになるんだけど、まずはサルトルや、カミュたち自身のヒストリーを調べるつもりだ」

部員それぞれの独自の視点をめぐる議論が続いた。そして、こういう場合のいつもの特徴が繰り返されたものだった。高井は、いつもによって独自の視点を避け、日本の知識人たちの評論を、評論するといった作業に逃げるのだった。そして、南沢はうだうだと回りくどく、決めていない言い訳に終始した。

保兵衛は、窓の外に覗く夕日に照り映えるヒルトン・ホテルに目をやりながら、あの後海念はどうしているだろうかと思ひ浮かべていた。

彼ほどに、心に留まり続ける心象との闘いに明け暮れなければならぬ者はいないだろう。いわば心の傷は、一方で時とともに癒されもしようが、新たな知識や見聞との遭遇は古傷を掘り起こすことにつながり、新たな血が噴出す事態にならないとは言えないはずだ。

現に、保兵衛は、海念が幼少時に迎えた事件を、時が経るごとに薄れるどころか、新たな位置付けで鮮明さを増して想起しているのを自覚していたのだ。

まして、東海寺は、古傷を容赦なく刺激する幕府関係者たちの出入りが激しい場所である。海念には、あの沢庵和尚と同様の緊張と苦悩が果てしなく続いていくに違いないはずだと思われた。

昨年 of 年末に、沢庵和尚が秘め続けた幕府権力との心の闘いを、保兵衛は海念に暗示することになった。海念もそのことに、はたと気づいたようだった。沢庵和尚のように、何がしかの建設的な

目的意識を持って状況に立ち向かうのだろうか？あるいは.....

「それにしても、人騒がせなビートルズだよ」

南沢が窓側を振り向いて言った。救急車のサイレンが聞こえていた。

「おれの予感だけど、彼らは単なるアイドルじゃないかもしれない。特に、英国女王陛下からの勲章に難色を示したらしいジョン・レノンのあの反権力的スタンスは、馬鹿にしたもんじゃないかもしれないね.....」

ノートや筆記具類を片付けながら、大島は、ほかの者たちの顔を見回し、眼を輝かせてそうつぶやいていた。

(28) 保兵衛の不吉な予感と海念の旅立ち

机の上に、二、三の参考書と年表が開かれてあった。卓上スタンドは、日本史の年表のある一行を照らし出している。黄色い蛍光ペンで引かれた一行の文字は、くっきりと浮かび上がり、保兵衛の視線を惹いていた。

大学浪人中の保兵衛の受験勉強は、余り芳しく進んでいなかった。

受験のためという切迫感が盛り上がりせずに、浪人という未拘束な立場が、その時その時の知的関心を野放しにするような実情だったのだ。

日本史の受験勉強をしているこの時にも、保兵衛の関心は別なことに向けられていた。

「一六五一年(慶安四年) 三代将軍家光没。慶安の変[由井正雪(ゆいしょうせつ)の乱]。末期(まつご)養子制度緩和」

蛍光ペンでこの一行をマークして、保兵衛は腕組みしながらの瞑想にふけてしまっていた。

徳川幕府は、幕府権力を誇示しつつも、所詮は諸大名の筆頭であるに過ぎない。したがって、権力の安定は、他大名との実質的力の格差に依存せざるを得なかった。

ここで単刀直入な政策として、大名取潰しが頻繁に行われたのであった。しかし、この政策は、裏腹の難問を幕府に投げかけていたのである。大名取潰しは、新たな浪人たちをひたすら輩出することにつながったからである。

もとより、幕府にとって頭の痛い問題は、関ヶ原の戦以降、浪人が急増していたことであった。浪人たちは武の力を以って戦うことはできても、生計を立てることに疎く、多くが生活に窮し、その結果当然のごとく幕府への不満分子、危険分子として表面化していたのである。

これに加えての家光時代の度重なる大名取潰しによる浪人の輩出は、二律背反的な意味合いで、幕府にとっての危険を否が応にも増幅していたことになる。

やがて、江戸市中には幕府にとっての危険分子たる浪人たちが、溢れるようになってゆくのだ。そこにそうした、生活に窮しやり場のない浪人たちが、いつしか門下生となって通う軍学塾が生まれ、浪人救済を訴え、幕府のご政道(せいどう)を改めようとする密かな動きも発酵し始めるのだ。

こうした塾のひとつに、神田連雀町の裏店(うらだな)で、楠流軍学を教授した由井正雪によるものがあった。

一六五一年(慶安四年)、家光が没したその年、その空隙に合わせたかたちの幕府への謀議だとして、由井正雪、丸橋忠弥(まるばしちゅうや)らが、動きを未然に封じられ追討されることになったのである。内通者による発覚だったとされている。由井正雪は自害し、丸橋忠弥らは鈴ヶ森で処刑された。

連累者は二千余名にもものぼったと言われ、幕府はこの事件後、浪人対策を重視して浪人の発生を防ぐため、末期養子の制度を緩和して大名取潰しの機会を少なくしたとされる。

保兵衛がこの「慶安の変」に思いを寄せるきっかけは、言うまでもなく海念の身の上であった。

この事件の性格を、自分なりに形どれば形どるほどに、慶安四年で二十三歳となっているはずの海念の姿が、薄っすらと滲みあがってくるのだった。

長い浪々の身の上、武士としての壮絶な最期に至った父の影を背負い、幕府への秘めた思いを抱き続ける海念。その海念とこの事変との関係に、断ち切りがたい不吉な胸騒ぎを禁じえない保兵衛なのであった。

沢庵和尚が遷化した後、東海寺での海念は、ただ悶々とした日々を送っていた。

「海念、師を亡くしたのはおまえだけではないぞ。そういつまでも心を乱し続けるではない」

兄弟子たちからの叱りを受けても、虚脱感からどうしようもなく抜けられない日々が続くのだった。

保兵衛から知ることとなった和尚の隠された苦悩を反芻することで、一時の海念は落ち着いたかに見えた。より深い悟りを得ようとする思いが、盲目的な修行に向かわせもした。

しかし、和尚の苦悩をあらしめていたに違いない現世的な存在と、自身の苦悩の根拠とが重なり合う事実を、打ち消しがたく見つめてしまう海念がそこにいた。次第に、自分が何をすべきなのかについて途方に暮れ、不毛な苛立ちへと迷い込んで行くのだった。

和尚のいなくなった寺へは、将軍家光の訪問は途絶えた。が、幕臣たちの訪れにさほどの変化はなかった。彼らは城内から離れた開放感からか、不用意に時世のさまざまな話を吐き捨てていった。そして、知客(しか:客の応接係)の任を仰せつかり茶の対応をする海念には、そんな話が聞くとではなく耳に入ってくるのだった。

「ご同輩は、あの武蔵が亡くなったことをご存知かな？」

「何と、あの剣豪と言われた宮本武蔵のことですか？」

「いかにも。当寺の遷化された和尚とも因縁浅からぬ武蔵が、和尚の遷化の半年前に卒去されたと聞いたものだ」

「確か、肥後熊本細川家が客分として遇していたと聞いており申した。さすれば藩主細川忠利(ただとし)殿の急逝からまだ間もないこととなるのう」

「いよいよもって関ヶ原西軍兵(つわもの)の亡霊たちも姿を消し尽くす時代なのだのう」

「ごもつとも。いや、しかしながら、新たな仕官などありようはずもないこのご時世での浪人たちの存在は、お上もご心痛のご様子ではあるぞ……」

一六四五年(正保二年)五月、宮本武蔵は、肥後熊本細川家で賓客として遇されたまま、遺言状とも言うべき『五輪書』、『独行道』を書き遺し、享年六十二歳で逝ったのだった。藩主・細川忠利(ただとし)の急逝によって、武蔵が密かに抱いていたと言われた藩政への参与という志は費え去り、士官が叶わぬ長い浪々生活の失意のままの終焉だったと思われる。「我事において後悔せず」(『独行道』)と遺された言葉は、自身の生涯に対する無念さを、反語的に言い表していたのかもしれない。

海念が追い討ちをかけられたように、心をなおのこと沈潜させることとなったのは、この会話を耳にしてからのことであったかもしれない。

父との不思議な縁、和尚との深い関係、そして自分が今こうして東海寺で修行する端緒をも作り出してくれた武蔵さままでが……。

海念は、もはやすべての拠り所が消失してしまったような、茫漠とした空虚感のただ中に放り出されたのだった。

そんなある日、苦渋に溢れ、やつれた海念を見るに見かねて声をかけた者がいた。日頃海念の相談役を果たしていた兄弟子の創円(そうえん)が、海念を呼んだのだった。

「海念、わたしが観るところ、今のおまえの心境の出口はあまりに

遠いようだ。このまま、当寺内での修行を続けたとて悟りに至るは、はなはだ困難ではないのか？」

「……………」

「思えば、わたしがおまえほどの未熟な時期には、乞食僧として各地を歩いたものであった。沢庵和尚もそうであったとお聞きしたことがある。和尚は、乞食にして閑居にあってこそが望みと心底お考えだった節もある。決めるのはおまえしかない。だが、そこへと踏み出してみてもどうか。各地で修行ができるための書状はわたしがしたためようぞ。そして、たとえ何年経過しようが、必ずここに戻って来るがよい」

「……………」

海念は、うな垂れ、堰を切ったようにとめどなく涙し始めた。なぜ、と応えることはできない涙であった。

はじめてこの東海寺に身を寄せた際に、あの和尚が声をかけてくれたことを海念は思い出していたのかもしれない。

海念は、もうこれ以上沈みようのない心の水底を、残った最後の力で蹴る思いで、兄弟子創円の意向を静かに受け入れようとしていた。

(29) 夕靄かかる大川での親子心中！そして海念

「身投げだぁー、親子の身投げだぁー」

「誰か助けてやらねえかい、かわいそうじゃねえか、子どもだけでも助けてやれえー」

大川(現墨田川。当時大川にまだ橋は掛かっていなかった。)に面した日本橋側、両国広小路付近、対岸は大川端である両国一帯は夕靄がかかっていた。その土手の上で数人の町人が、ある者は川面を指差し、またある者は人を招く格好で騒いでいた。子ども連れの母親が身投げをした様子であった。

母親の姿はすでに見えなくなっていた。川面で苦しうにばちゃばちゃともがく小さな子どもの姿だけが人目を引いていた。上潮時で、流れは緩やかだった。

土手に駆け戻った職人風の男が、一間ほどの長さの板を投げ込んだ。が、手元が狂い舞い上がった板は、子どもの場所からはひどく離れた場所に落下した。土手の上の町人たちはただただ落胆した。

と、その時、土手の上の人垣を掻き分けて、下帯姿の若い坊主頭の男が飛び出した。土手を駆け下りるが早いか、大川の流れに颯爽と飛び込んだのだった。溺れる子どもに視線を集めていた土手の上の町人たちの視線が、瞬時にその音と波紋に集まった。

男は、水面に坊主頭を出したが早いか、抜き手を切って子どもに迫って行く。子どもに程近く寄った時、その姿を水中に消した。と、次の瞬間、左手で子どもを抱え込み、元の川岸へと手際よく泳ぐ様が見えた。町人たちは、泳ぎに合わせて、土手の下に転がるように降りてゆくのがあった。

ぐったりとした幼い男の子を町人たちに預けたその男は、「母親の姿が、水底に見えた！」と叫び、再び川の中央に向かった。「気をつけなよ！多分、袂に石を抱いてるはずだろうよ」

泳ぐ男は、海念であった。幼い時から品川の浜で父親から教えられていたため、水練は達者な海念だったのだ。

ほどなく、海念は水底に沈む母親らしき姿を探し当てた。錨(いかり)の役を果たす袂の石を取り出そうとした。が、艇子摺り、力まかせに両袖をもぎ取った。一瞬その身体が浮くようだった。海念は、その身体の襟首を手で掴み、勢いよく煽り足で水面を目指す。

ブワァ、と水面に顔を出したその時、難事を聞きつけて来た舟が間近に寄ってくるのを海念は見た。

「この人を早く！引き上げてくれ。うつ伏せにさせて背を押し、水を吐かせるんだ！」

情けの篤い町人たちが、甲斐甲斐しく動き、医者も呼ばれた。大川の水をたっぷり飲んではいしたが、子どもの一命は取り留められたのであった。三、四歳位の男の子であった。職人が与えた半纏で身を包まれ、しゃくり上げるように泣いていた。

しかし、そのすぐ脇の戸板の上で、両袖がはずされたみじめな姿となった母親には、やがてむしろが被せられることとなった。

海念は、上気した町人たちに囲まれていた。下帯だけの濡れた身体を、町人たちが差し出した手ぬぐいで拭いながら、脱ぎ捨てた法衣を眼で探すのだった。

先ほどからこの場を仕切っていた鳶の頭(かしら)といった風情の男が、海念の衣類や持ち物を抱えて差し出した。

「お坊さん、ほんとにありがとうよ。いい人助けをしていただいたよお。この子のおっかさんはいけねえようだったが、子どもにはなんの罪もねえんで、ほんとによかった。ありがとうよ」

興奮さめやらぬ口調で、矢継ぎ早にそう言った。

「いや、たまたま通りかかったものでしたから……」

この時偶然にも海念は、下総(しもふさ)方面への托鉢に向かうべく、ちょうどここに差し掛かっていたのであった。

「お坊さん、名前はなんとおっしゃるんで？海念さんかい。まだお若いご様子でやすがおいくつで？十九でやんすか。りっぱな、もんですぜ。そうそう、この子はご浪人さんのお子さんのようですぜ。土手の上にあった遺書は達筆なもんで、多分そういうことなんでしょう。仏さんのことは、お役人に知らせやすが、この子は当分あっしのところで預かり、善後策を練りやしよ。その点は任せておくんない」

浪人の子という言葉が、海念の心に突き刺さって残るのだった。

法衣の姿を整えた海念は、すぐさま母親の亡がらの傍に寄った。そして、無念な生涯をなだめるように、手厚く経をあげるのだった。子どもが泣きながら見つめていた。

「お坊さん、今日はもうこの時刻じゃ渡し舟も出ませんので、良かっ

たら明日の朝一をあっしのうちで待たれてはいかがでやんしょ？
なあに、むさ苦しいとこですがね」

鳶の頭ふうの男、政五郎の住まいは、日本橋馬喰町の裏長屋
だった。

政五郎たちが戻った時、すでにうわさが広まり、長屋の職人たちが
ごった返していた。そんな中に、心中母子(おやこ)を知る浪人
たちもまじっていた。

「まあ、これも何かの因縁と言う奴なんでしょうね。今夜は、仏さん
になりなされたおっかさんのために、まあ内輪でお通夜ということに
させてもらいましょうや」

さすがに頭と言われる政五郎は、あっと言う間に仮通夜の段取り
を済ませ、狭い長屋は人で埋まった。母親の死を分からない子ども
も、無邪気に握り飯をほうばる姿を見ては、長屋のかみさんたちが
一様に涙ぐんでいった。また、海念には、丁寧なお辞儀をしてゆ
くのだった。

一通りの段取りが進むにつれ、男たちには酒が入るようになった。
夕刻の大川での救出の情景を自分の手柄のように話題として
いた。また浪人生活の苦しさも時々話題に上るのだった。

「本日は、誠にかたじけないことごさいます。実は、拙者は、あ
の子の父親を知る浪人中村小平太と申します。奥方は哀れなこと
でしたが、それでも亡がらがその場で引き上げられたので、きっと
仏も成仏できることかと存じます。これもみな、お坊さんのお陰だと
感謝いたしております」

海念の前に正座した浪人小平太は、両手をついて深深と頭を下
げるのだった。そして、遣された子どもに視線を向け、流れ落ちる
涙を隠そうとはしなかった。

「あの子の父親とは、もう長い付き合いでした。浪人暮らしに疲れ、
居酒屋で不祥事を起こした折に拙者が仲に入ったのです。それが
縁で、同類相憐れむの格好となった次第でごさる。気性は荒かつ
たが、剣は達者な男でした。

町人向けのある道場の指南役にありつけ、大喜びをしていたものでした。あの子が生まれたのはそんな頃だったでしょう。大層喜んでおりました。

良かった、良かったと安堵していたのですが、ほどなく、市中の良からぬ旗本くずれたちと揉め事を起こし、拳句の果てに命を落とす羽目となってしまった。一年ほど以前のことであった。

時々、あの母子の様子は確かめるつもりで訪問しておりました。奥方も裁縫の内職をされておられたが、気弱なお人だったものでこんなことに……。拙者も、寺子屋まがいの勤めで口に糊する立場ゆえ、誠に口惜しい限りでござる」

実直な小平太の言葉を静かに聞きながら、海念は、遠い昔の父親の面影に似たものを感じとっていたに違いなかった。

「そうでしたか。わたくしの父上も長い浪々の身であったと聞かされております故、その苦しきことはご推察いたします」

「ああ、そうであったのか。して、お父上はご健在か？」

「幼き頃に他界いたしました……」

「うーむ、ご無礼いたしました」

二人を囲む職人たちは、それぞれに陣を組みがやがやと宴を盛り上げていた。二人の会話も、その喧騒にかき消されがちとなっていた。

「いま少しお上に、浪人たちへの武士の情けなるものが欲しいと思ったりもするのだが、言うても詮無いことかのう……」

「……………」

「とんだ長話をしてしまい誠にご無礼いたしました。拙者もこの裏長屋に住しております。是非機会を改めておこし下され」

海念が、江戸の浪人たちとの縁を持つに至ったのは、実にこれが契機なのであった。そして、保兵衛が海念に対して覚えた胸騒ぎは、こうしてあたかも定めのように深まっていくのであった。

(30) 直太郎、今日からおめえはうちの子だあ！

下総、上総、安房での托鉢修行は、海念を逞しく変えたようだった。笠と法衣で身を覆ってはいたものの、照り返す房総半島の初夏の陽射しが、海念の手首と言わず、首筋、顔を黒々と日焼けさせていたのである。

「お坊さん、乗んなされ。あと一人くれえはだいじょうぶだ」

「ご喜捨いただけますか？」

「へいようがすとも、へい、ようがす。乗んなせい」

渡し舟の年老いた船頭の言葉に促され、大川端の棧橋に佇んでいた海念は、舟に乗り込んだ。

夏を迎えた両国付近の大川の川面は、ぎらぎらと照り返していた。それでも、舟が川の中央に出ると川面を渡る涼しい風が乗り合った者たちの顔にそよいだ。

小さな男の子が、船べりから手を垂らし、川面の波に触れようとしている。その手は川面には届いていなかった。海念は、ふうっと、半月ほど前に自分が助けた幼子のことを思い出すのだった。

どうしているだろうか。母親が亡くなったことをどのように理解しているのだろうか。この後、気丈夫に生き延びてゆけるだろうか、と渡し舟に揺られながら海念は、心細そうな幼子の面影を思い浮かべ、案じるのだった。

とその時である。

海念の視線は、川面に、明るく薄っすらとして頼りなく浮遊するその影に釘付けとなった。岸へと近づいてゆく渡し舟に沿いながら、四、五間ほどの距離をおいて、川面をゆっくりとすべるようにゆく女の姿なのであった。

一瞬、目頭が熱くなった。海念は軽く笠を上げて、しっかりと、そして優しく見届けた。両袖のない地味な着物をまとった女が、こちらを向いて、切なく訴えるように、何とも言えない表情をして会釈した。そして、その姿は、土手に自生した人の背ほどの夏つばきへと

すうっと流れてゆき、そのかたちと重なるように消えていった。

船頭に礼を言った海念は、すかさずその夏つばきのもとへと向かうのだった。

それは、棧橋からほど近い場所でひっそりと佇み、華奢な枝葉に、いくつかの白いつばきの花を咲かせていた。

海念が、すべてを了解していたことは言うまでもない。

母親は、幼子のことが気掛かりなのであろう、無理もないことだ。そう、海念は女の哀れさに胸を詰まらせるのだった。

夏つばきの傍に立ち、海念はしばし静かに合掌し、眼を閉じた。先ほどの女の切ない表情が瞼の裏に何度も浮かんで消えた。分かりました、安堵なさってください、と海念は心の中でつぶやくのだった。

どのくらいの時の経過であろうか、夏草の息を含んだ柔らかい空気が、その夏つばきの木と海念とを包み込んでいた。

われに返ったかのように、海念は思った。

『そうだ、馬喰町のあの頭(かしら)の裏長屋に寄ってみよう。幼子の様子を確かめてみたい。また、あのご浪人中村小平太殿にもお会いしたいものだ……』

そんな思いに何やら心が急かされるようになり、海念は日本橋馬喰町の裏長屋へと足を向けるのだった。

馬喰町の裏長屋の路地では、職人の子どもたちが走り回って騒いでいた。

と、その中に、あの幼子が、みんなの後をみそっかすとしか言いようがない格好でまとわりついているのが眼に入った。幼子は笑っている。なぜだか、ほっとする海念であった。

「あらあら、あん時のお坊さんだねえ。まあまあ、よくいらっしやいました。あのあともお坊さんのうわさで持ちっ切りだったんですよ。頭も喜ばれるよ。さあさあ、頭んとこへ」

井戸端で洗い物をしていた見覚えのある小太りした長屋のおかみさんが、前掛けで両手を拭いながら海念を出迎えていた。

「いやあ、海念さんじゃ御座んせんか。その節あ、ご大儀なことで御座いやした。お待ちしていたんでやんす。まあまあ奥へ、さあさあ」

相変わらず威勢のいい頭の口調を懐かしく感じた海念だった。

「おい、お茶をお出ししねえかい」

海念への茶を指図したかと思うと、頭はこの間の事の成り行きを立板に水で語り始めるのだった。

頭の話によれば、直太郎を養子として引き取りたいと思案しているがどうだろうか、ということだった。直太郎とは、あの幼子の名である。

あの身投げ事件のあと、奉行所、町役人らの立会いで母親の遺書を手掛かりに、直太郎の親族が詮索されたという。しかし、既に身寄りも途絶えていた。そうであったからこそその親子心中だったのだとみなが納得したものだった。

「なあ、海念さん。あっしはこれも因果だと思ってるんでさあ。幸い直太郎もどうにかなついでくれやして、娘たちもみんな、かわいい子だと言って世話をしたがっておりやす。どうでやんしょ。なんせ、直太郎は一度は大川の藻屑となることを海念さんに救ってもらったんだ。その命の恩人の了解なしには、あっしら何ともできやせんやね。

あっしんとは、どういうもんか娘ばっかで御座いやす。もし、直太郎がその気になってくれりゃ、鳶としてあっしのあとを継がせたいとさえ考えてるんでさあ」

頭は、煙管煙草を手にした正座の格好で、前かがみとなって海念の顔を覗き込んでいた。その表情には、何とともうんと言って欲しい気持ちが滲んでいるように見えた。

海念は、既にこうなるだろうことを薄々想像はしていた。だからさほどの唐突さを感じることはなかった。むしろ、武士の子として生き長らえてゆくより、実の力で町人として生き抜く方がよいとさえ思ってもいた。

「頭、わたしなんぞが口出しすることではありませんが、あの子にとってはその方が幸せだと思います。どうか、頭の子として末永く

育ててあげてください。よろしく願いいたします」

海念は正座の姿勢で深々と頭を下げるのだった。

「そうですかい、そうですかい。ありがとう御座いやす。海念さん、おめいさんからいただいた命、確かに預かりやした。海念さんのように、人助けのできる男にきっと育て上げますんで、この先もどうか見守ってやっておくんないな」

頭も、畳に両手をついて深々と頭を下げた。

「頭、ひとつお願いがあります。実は、ここへうかがう途中で……」
と、海念は渡し舟で目にした哀しい情景を伝えるのだった。

「きっと、今はあの子も大川を見るのがいやに違いありません。もう少し時が過ぎたら、元気な姿を見せに連れて行ってやってください。それが供養になると思います」

「分かりやした。あの土手の夏つばきの場所でやんすね。何とも、哀れな話でやんすねえ。あっしはこう言う話には弱いんで……」

頭は、懐から手ぬぐいを取り出し、人目をかまわず涙を拭いた。
「きっと時が経ったら連れてゆきやす。そんな時にゃ、直太郎といっしょに、おっかさんの小さな墓こさえさせてもらいやすよ」

海念は、その頭の言葉を伝えるかのように、あの大川の川面上での悲痛な女の表情を再度思い浮かべるのだった。

やがて、直太郎が呼ばれ、命の恩人への挨拶が促された。また、今日からはうちの子だというお披露目がなされた。みんなが朗らかに喜び、直太郎も屈託無くはしゃいでいた。

海念は、そんな中をいとまごいをして、中村小平太の住まいに向かうのだった。

(31) 浪人中村小平太どこのとの出会いに始まるふたすじの糸

「ご免くだされ」

「はいっ、どなたでございましょう」

浪人、中村小平太の住まいは、鳶の頭、政五郎と同じ裏長屋の奥にあった。造作は同じであったが、辺りには打ち水がなされ、涼しげであった。壁際には丹精に手入れされた小作りの植木鉢が並べられている。裏長屋ではあってもどことなく瀟洒(しょうしゃ)な風情が凝らされていた。浪人とは言えども、武士としての誇りを崩したくはないとする小平太の姿勢のようなものを、海念は感じさせられるのだった。

戸口に現れたのは、年の頃十六、七と言った若い娘御である。「あっ、あの折の海念さんでは……」

娘御は海念のことを知っていた。直太郎の母親の通夜に訪れていたのであろう。

「海念と申します。中村小平太殿はご在宅でございますか」

「あいにく、父は寺子屋塾からまだ戻っておりませんが、まもなく帰るはずです。よろしければ、上がってお待ちいただけませんか」

一瞬ためらう海念であった。が、いつ再び寄れるか知れない宿なしの修行の身である自分を省みた。

「この次はいつ参れるか知れませんが、では、お父上のお帰りを待たせていただくことにさせていただきます」

住まいの内も、家具類は控えめであったが、整理がゆきとどき落ち着いた空気が漂っていた。つい今しがたまで、携わっていたと見える掛接ぎ(かけはぎ)仕事の道具などが、庭に面して広げられている。空け広げられた障子の外には、狭い庭であったが背丈の低い植木の緑が彩りを添えていた。

茶を持って娘御が戻ってきた。

「頭のところへお出でになられたのですね。お寄りいただいて、きっと父も喜ぶと思います。何しろ、先日のお通夜の後しばらくは、海念さんのお話ばかりしておりましたのよ」

「その節にお伺いすればよかったのですが、下総にある修行の寺のことが気になっており、失礼いたしました」

茶を勧められ、手に取ったまま視線は庭に向ける海念であった。

若い娘御とこうして間近で話をすることに慣れていない海念は、どこか落ち着けない様子である。

「掛接ぎは、お母上がなさっておられるのですか？」

「あら、よくご存知ですこと」

「いや、わたしの母が生計のために携わっていたものですか
ら……」

「母上さまはどちらにお住まいなのでしょう？」

「品川宿のほど近いところに」

娘御は、海念の正面に正座していた。膝の上に両手で湯のみ茶碗を支えている。そのつぶらな目で、視線はしっかりと海念に向けられていた。海念が落ち着けなかったのはそのためであったかもしれない。

「母上は、ずっと以前に病気で亡くなりました。掛接ぎはわたくしが……」

「いや、余計なことを言ってしまいました。許してください」

娘御が視線を落としたので、海念はようやく娘御に視線を向けた。娘御は、色白で、ほっそりとした面持ちであった。物言いがはっきりしているのに対して、その姿は、粗末な着ごしらえではあったが、上品さを湛え、清楚な感じを与えていた。

海念は、母と暮らす妹の静のことを一瞬思い浮かべた。もう何年も会わないが、この娘御ほどになっているのだろうかと思った。

「お名前は何と仰うのですか？」

「はい、静(しず)と申します」

「えっ？」

「どうかされましたか？」

「いや、妹と同じ名でしたので。母上とともに暮らしております」

「まあ、そうでしたの。何だかうれしいですわ」

静は満面に笑みを浮かべて、無邪気に心底喜んでいるようである。

「海念さんがお見えなのだね」

戸口近くから、声がした。中村小平太は、戸口に立て掛けた錫杖を見てそう思ったのだった。

「あっ、父が戻ったようです。はあい、お帰りなさいませ。今そちらへ」

静は、海念の訪問を明るく父に告げていた。

「いやあ、よくお出でなさいました。待ちくたびれて首が伸びきってしまいましたぞ」

小平太は、所帯やつれした顔をほころばせ、うれしそうに冗談を言うのだった。

腰のものを刀掛けにおさめ、小平太は、海念に向かい合って座った。

「いつもの戻りは、今しばらく早いのですが、通りでばったりと知り合いに会ったものでやや遅くなり申した。

あ、そう言えば、あの直太郎さんは頭が引き取られるそうですね。頭のところでは、みなが屈託無く祝っておった。これで一安心ですね。あやつも、奥方も草葉の陰で安堵していることでありましようぞ。こうなったのもみな、海念さんの人助けのお陰ですぞ。よい人助けをなさったものだ。なあ、静」

「はい、さようでございます。わたくしも、そばに居るのですからできる限り直さんを見守ってゆくつもりです。海念さんのためにも……」

静はそう言って、いそいそと掛接ぎ仕事の散らかりを片付け始め、手みじかに言い添えるのだった。

「父上、まだ早うございますが、夕餉の支度にかかりたいと思いません」

「そうだな、そうだ、海念さん、何もござらんがご一緒していただけますな」

海念は、親子による空気に押されたかのように、黙って頷くのだった。

静は、甲斐甲斐しい素振りで戸口から出て行った。

静はきっと、鳶の頭のうちに訪れた喜ばしさが、形を変えて親子二人暮らしの自分たちにも訪れたのだと受けとめていたに違いな

かった。

「中村さま、寺子屋でのご教授は大変でございましょう」

小平太と二人となった海念は、ポツっとたずねた。

「なあに、無いよりましといった小さな仕事であってな。ゆえに静が、掛接ぎの内職で助けてくれております。お恥ずかしき次第じゃ。かと言って、昨今では普請場での日雇い人夫もできないご時世でなあ。幕府から、浪人を人足に雇ってはならぬというお触れが出ているのでござる」

「何と、さようでございますか。どのような意向なのでございましょうか？」

「拙者には、浪人潰しとしか考えられませんな。幕府に浪人救済などの考えは毛頭ござらぬ。ただただ、胡散臭い浪人がこの地上から消滅することを望んでいるのでしょぞ。

そう言えば、もう十年も昔の話になろうか。西国の島原、天草にて切支丹の反乱がござった」

「寛永十四年のことですね。わたしが寺に拾われたのがその翌年でした。宮本武蔵どののお計らいでした。確か、武蔵どのもその乱の平定に参上されたと聞きました」

宮本武蔵の名に、小平太は一瞬目を見開いた。

「ほう、海念さんは武蔵どのがご存知でしたか。噂にて、浪々の身の武蔵どのも戦に加わっていたとは聞いておったが.....。

何を隠そう拙者も参戦しておったのでござる。これが仕官を目指す浪人の最後の陣借りだと思つてな。恐らくは国中の浪人たちがそう思っておったはずだった。まあ、それはそれとして、拙者はその時そこで幕府の心根を見た思いがしましたぞ。

幕府本営には、知恵伊豆とも呼ばれた老獺な松平伊豆守信綱が総大将を務めておった。かやつは大名とり潰し策の中心人物であり続けて来た男での。そして、浪人潰しのな。

あの時も、知恵伊豆とやらの命令で多くの浪人が盾代わりにされ命を落としたものだった。中には、背後から狙撃された浪人たち

もあったと噂されていた。

邪宗切支丹の反乱と謳われたものだが、そこにおった多くの者は百姓一揆としての実態を見たものだった。幕府は、切支丹と、反乱に走らざるを得なかった貧しい百姓たちと、そして無用の浪人たちをまとめて始末したかったに違いないのだ。常に権力とは、そうした仕打ちを平然と選ぶものなのだ」

海念は、小平太が静かに、しかし確実な口調で語る姿を凝視しながら黙って聴いていた。はるか遠い幼き日に、父から聴かされたことがあった話を想起していたのかもしれない。そしてその実直な表情に、亡き父の面影を追っていた海念であったのだろう。「ところで、拙者は今、自身のこともさることながら、増えることはあっても減ることのない浪人たちと、幕府の浪人潰し策との関係を何とかしなければならぬと腐心いたしております。

浪人たちの中には、所詮徳川家も大名に過ぎず、世に潜在する旧豊臣家臣の無念や、徳川家をこころよく思えぬ大名たちに浪人が加担すればという短兵急な思惑を語る者もおるご時世じゃ。しかし、拙者は、戦国の世は、徳川幕府によってほぼ終結させられたと冷静に見つめておる。残された課題は、幕府によるご政道をどう糾してゆくかなのだと、そう思うておるのじゃが……」

「その通りだとわたくしも判断しております。もはや、軽拳妄動にて揺らぐ徳川幕府の体制ではないと判断しなければならないのでしょうね」

海念は、沢庵和尚の秘められた慎重な処世から、現在の幕府権力に決して軽視できないものを感じとっていたのであった。また、いつぞや保兵衛がもらしていた歴史的事実、『江戸幕府は、鎖国制度のために戦争もなく、この後まだ二百年以上も続いてゆきます』という記憶を鮮やかに蘇らせていたのかもしれない。「そうですか、海念さんもそうご判断されるか。残念ながらそうなのだなあ。それで、今、この年で、ある先生の塾に時々通って教を請うておる。どうすればご政道を糾すことが可能なのかをな。本日、帰宅が遅れたのは、その門弟に偶然会ったからなのだ。

おう、そうそう、先ほど宮本武蔵どのお話が出たが、その先生の師の師が武蔵どなのだそうだ。先生は、師として楠木(くすのき)流の軍学者石川左京どのからご教授を受けたと申されておったが、その石川どのが、何と武蔵どのから楠田伝の武蔵流を教授されたということなのじゃ」

海念は、武蔵の孫弟子にあたるという話から、その先生に対して漠然とした興味を抱き始めるのだった。

「で、その先生のお名前は、何と申されるのですか？」

「由井正雪どのでござる。神田連雀町の裏店(うらだな)で、楠流軍学を教授しておられる」

「由井正雪先生と申されるのですか。ご信頼できそうなお名前ですね……」

「ただいま戻りました」

その時、静の明るく澄んだ声が戸口から聞こえた。静が夕餉のための買い物から戻ってきたのだった。

(32) 海念！魔術師たちの罠に近づかないでくれ！

「今や一、物取り(学費値上げ阻止)的闘争に一、終始している局面ではなく一、事態の根源的な一、原因を一、総体へのラディカルな闘いによって暴き出し一、大学総体への一、国家権力による策謀を一、主体的、連帯的に一、引き受けてゆくべきだと一、考える一」

「異議な一し！」

「ちょっと待ってくださいよ。確かに、学費値上げ阻止闘争には、全面的に賛同するけど、この時期にロックアウトをするのは、いたずらに闘争を拡大して機動隊を呼び込むような挑発をするようなものじゃないの」

毎年展開されている学費値上げ闘争であったが、全国的に学園紛争が広がっていたこの時期は、例年とは異なる加熱した空気が支配し始めていた。クラス単位の討議も、政治意識旺盛な学内組織所属メンバーたちによるアジテーションと、それによる草刈場のような様相を呈していた。

騒音のいっさいに目をつぶりひたすら司法試験を目指そうとする者は、そんなクラス・ミーティングなどには顔は出さない。「ノンポリ」と呼ばれた政治に無関心を決め込む学生も欠席する。参加する者は、「主体的」何とかと気取って言うよりも、若い心の胸騒ぎを禁じえない、いわば政治的野次馬と表現した方が当たっていたかもしれない。

保兵衛が、御茶ノ水の私立大学に入学したその年は、学費値上げ阻止運動に端を発し、初っ端から荒れ狂った。そして、その年の半ば頃からいわゆる「全共闘」によって大学は自主封鎖、ロックアウトに突入したのである。正常な講義が開講されていたのは、入学後の一、二ヶ月程度であった。

事態は膠着状態となって行った。そして、各大学の個別の問題は、やがて大学の自治、自主管理と、国家による管理との対立図式といった問題へと吸い上げられ、瞬く間に全国的な政治的問題現象へと変貌して行ったのだった。

若い心の胸騒ぎを禁じえない政治的野次馬たちは、封鎖された大学や、周辺の喫茶店に時間の許す限り集まり、ダベリ、議論した。集会やデモへの参加も厭わなかった。

「百瀬が機動隊にやられたらしいぜ。あいつは肝が据わってるよなあ」

「先日、いろいろ話していたら、彼の口から『職業的革命家』なんていう言葉が飛び出した。まんざら冗談でもない様子だったので驚いたよ」

「だけどさあ、よくそこまで自分を絞り込んでいけると思うなあ。おれなんか、革命家どころか、何やって食っていくかいまだに腹が括

れない状態だ。とにかく、いろんなことへの疑問だらけ、と言ったところかな……」

喫茶店では、情報交換から、熱の入った議論まで、話題が話題を呼び、とり止めもなく展開するのが常だった。

「廣瀬はエーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』のゼミを採ったんだってね。どう？ おもしろい？」

保兵衛は、ドイツ文学研究会に所属する原田と話すことが多かった。自営業の親を持つ原田は、何事につけ実生活に足をつけた発想であり、他のメンバーに較べて知的関心の向け方でも共通する点が多かったからであった。

「原田は、独文研だからトーマス・マンは知ってると思うけど、彼の小品の中に、ちょっとした興味深いものがある。街に魔術師がやって来て、街の者たちが警戒するという話なんだけどね。ある男が、そんなものには絶対に引っ掛らないと豪語する。しかし、催し物の当日、彼は公衆の面前の舞台でまんまとその魔術師の策にはまって派手に踊らされてしまう、という筋なのさ。

トーマス・マンは、魔術に対しては、掛からないと念じるだけではまったく無力であって、そう念じれば念じるほどに魔術師の思うツボなんだと言いたいようなんだね」

「ほおー、すごいね。で、その魔術師とはひょっとしてヒットラーのことになるわけだ」

「そのとおり。それで、フロムの『自由からの逃走』というのは、その心理が、第一次大戦後のドイツ・ワイマール体制の中産階級の社会心理にあったことを分析していると言っていいと思うんだ」

「いやー、おもしろそうだ。是非今度読んでみよう」

「それはそうと、原田は、現在のわれわれの置かれた状況をどう見てる？ どこまでエスカレートして、何が変革されると」

「難しい問題だなあ。大学という、体制寄りの知識階層を生み出す機構が、支配の枠からどうはみ出してゆけるのかということなのかなあ。自主管理という概念にはそんなねらいがあるはずだよな」

「そうなんだ。キーワードはどうも『管理』だという気がする。権力側

の関心は、支配という直接的な概念から、スマートに支配してしまう管理という概念に移行しつつあると見えるんだ。で、管理が争点となる時代の政治は、心理戦争、頭脳戦争の時代でもあると言えるんじゃないかな。魔術師さながらにね」

「権力側のしたたかさを十分に察知しなければならないってことだな。歴史上でも、でっち上げ、やらせや、陰謀は定石だったからね。現在の大学問題でも、いろいろな局面に挑発が仕掛けられ、読みが浅いと踊らされるということもあり得るわけだ……」

神田の古本屋街を通り、神田駅から大森のアパートへ向かうのが保兵衛の帰路である。プラットホームで佇む保兵衛は、原田との会話の余熱を辿っていた。頭の中に残る「権力側のしたたかさ」という原田の言葉が、ふと、海念のことを思い起こさせるのだった。

海念が「由井正雪の乱」に関わってゆくのではないかという強迫観念のような気掛かりを、保兵衛はここしばらく消せないでいたのだ。

誰もが時の権力に対して反感をいだくことはある。しかし、それは表面的な日常会話のレベルであることが多い。が、肉親の不幸、しかも子ども心に敬愛していた父の不幸が、心の奥底で権力の姿と重なることを消せない海念の場合は、事情は別なのだと、保兵衛は懸念し続けて来たのだ。

その懸念を晴らすためにも、海念と会って確かめたい、しかも、海念が二十三の歳となる前、できれば彼が深入りすることのない時期に会いたいと考えていた。とすれば、ここ一、二年の内であればならない。そう考え、時折、海念からの数珠を凝視したりする保兵衛なのであった。が、自分が「タイム・トラベル」することも叶わず、また海念が訪れることもなくただただ時間だけが経過していくのだった。

保兵衛が、もし海念と会えたら、伝えたいと考えていたのは、由

井正雪の乱の悲惨な結末ではなかった。海念が関与を深めてゆくなら、海念も連座して処刑されるということではなかった。もちろん、その危険を何よりも避けて欲しいと願った保兵衛ではあった。

しかし、それと同時に、そもそも「由井正雪の乱」なるものが、浪人の弾圧と抹殺のための、幕府権力によるでっち上げの陰謀であった可能性が、きわめて高いと分析する自分の推理を伝えなかったのだ。権力の奇想天外なしたたかさを、沢庵和尚のもとにいた海念こそは認識すべきなのだと伝えなかった。東海寺での沢庵和尚の苦悩とその処世は、和尚がそうした点を幾重にも認識していたからだったのだから、と。

保兵衛は、車内のドアに寄りかかり、夜の街にネオンが輝く外をながめ、考えを整理していた。なぜ、あの乱がでっち上げだったと推理できるのかという推移を。

保兵衛の推理は、決して新たな歴史的証拠に基づくものなどであるはずではなかった。そうではなくて、既成の事実を論理的に再認識してゆくとどうしても説明が見つからない矛盾に行き当たるところから発生させたものであった。その推理とは

その一つは、由井正雪が多くの浪人からの人望を集めるほどに秀でていたとするなら、幕府転覆という不満の浪人たちが抱いた短慮や怨念を超えたものを持っていなければならなかったはずだという点である。そうした幕府転覆後のビジョンがあってこそ、多くの浪人たちを魅了したはずではなかったか。

が、しかし幕府が明らかにした事実は、正雪らが企てたとされるもっともらしい軍事計画だけでしかなかったようだ。しかも、もし、その軍事計画が浪人たちを魅了するに足るものだとするなら、何よりも、浪人たちが当然抱いたであろう最も大きな不安を解消する、大名たちによる計画への加担のなにかがしかなければならなかったはずだ。にもかかわらず、未然に弾圧されたこの乱の計画に共謀したとされる藩の取り潰しがあったとの記録はないようである。

優れた軍学者が、勝算も革命後のビジョンもなく、単なる反乱でしかない農民一揆の浪人版をもくろむものだろうか。浪人たちにしても、正雪に魅了されたのは、幕府転覆という感情的には抱くことがあったにせよ、理性的には非現実的としか言いようのないそんな計画においてではなく、理性的にも望みが託せる現実的と思われる計画だったのではなかったか。

たとえばそれは、明治新政府が罪人を使って敢行した蝦夷開拓計画の走りであったかもしれない。行き所と、生きる縁(えにし)とを失った浪人たちに、その両者と与える新天地としての蝦夷を開拓という機会を与えよ、と嘆願する計画なんかではなかっただろうか。事実としての正雪の行動は、そうしたレベルであったと推定することが妥当だと思われる。だが、それはそれで幕府にとっては将来への不安作りであったかもしれないが。

もう一つは、この乱の後、幕府の基本政策が、家光までの「武断政治」から「文治政治」へと急速に転換して行った点なのである。「末期養子」の禁を緩める政策転換などがその皮切りだとされる。確かに、それは浪人層のさらなる増加を抑制する穏当な策ではあった。が、それは現存する浪人たちへの何かなのでは決してなく、大名たち向けへの穏当な配慮だったと言える。もとより、幕府が真に恐れ続けて来たのは、互角に張り合うことが可能な大名たちなのであって、いかに増加したとはいっても浪人たちなどではなかったという事情がうかがえるのである。

何よりも、武力による幕府転覆計画という脅威があったばかりでなぜ、「文治政治」へとやすやすと転換がなされるのか。むしろ、武断政治の強化こそが採用されて自然ではなかったのかと思われる。この推移の背後には、浪人問題の脅威など眼中にはなく、力による大名支配を、既に完了したとする幕府の大きな自信があったはずだと見なければならぬ。

ただ、「武断政治」に徹してきた家光が亡くなった折りに、幕府は幕府体制の強固さを大名各位に駄目押しの示す必要があると

考えた可能性が読み込める。武力そのものによって大名各藩を支配するのではなく、その脅威を十分に描かせることによって、支配体制の安定をさらに強化したいと考えたに違いなかったはずだ。

そのための威嚇材料としてスケープ・ゴートとして選ばれたのが、由井正雪ではなかったか。幕府にとっては、拮抗する可能性がなしとはしない大名たちに潜在する、幕府への反意が安全に砕け散りさえするなら、それでよかったに違いない。由井正雪による乱はもっともらしくさえあれば、それで良かったのである。どの大名も、事実の疑惑と陰謀を暴き立て、第二のスケープ・ゴート、正雪となろうとはしないであろうことまで読み込んだ上での謀略だったと言うべきなのである。「文治政治」への移行の総仕上げとして演出されたイベントこそが「由井正雪の乱」であったに違いないのだ。

そう推理する現代の保兵衛は、歴史が暗黙に囁いてきた、権力による数え切れないほどの陰謀とでっち上げとを知ることができる歴史的位置にいた。現代に至る日本史は、発展の歴史であると同時に、権力による陰謀、謀略の歴史でもあった。しかし、海念はその位置にはいない、と保兵衛は思っていた。そんな彼が、純朴な海念が、権力のだしとしてあしらわれ、無残にも使い捨てとされることにどうにも我慢がならなかった保兵衛なのであった。

国電から私鉄に乗り換えた電車の窓外には、品川神社の小山が見えて来た。その小山の向こう側に、あの時海念と過ごした東海寺があったのだと、とり止めもなく保兵衛は思い起こすのだった……

(33) 運命の糸を手繰り寄せてゆくこととなる海念！

「誰か助けてえー」

鬱蒼(うっそう)とした森を走る山道の前方から、静寂を破り女の悲鳴が突然響いた。もう日が暮れかかっている。甲州街道、小仏

峠手前のここは、弱い木漏れ日だけが差す不気味な薄暗さに包まれていた。海念は、反射的にその悲鳴の方向へと走った。後からも人が走る気配を感じながら。

四、五人の山賊らしき男たちが、旅姿の男女二人連れを取り囲んでいた。中の一人は鈍く光る刀を抜き放ち、旅人を威嚇している。海念はとっさに状況を察した。

「二人を放しなさい！」

突然走り寄ってきた海念の姿と声に、男たちはぎょっとするのだった。

「な、何でい、この坊主は。おめえなんかの出る幕じゃねえ。おとなしく、引っ込んでろ」

若手のひとりが驚きを隠せない調子でどなった。その男を脇にどけるようにして、刀を抜き放った親分格らしき男が海念の前に歩み出てきた。

「お坊さん、怪我をしないうちにとっとと消えな。金なしのおめえさんなんかには用はないのさ」

その男は、不用意に刀を海念の顔に向けて突き出した。と、その時、海念は右手で立てて握っていた錫杖を、すかさず下から振り上げるのだった。刀は下から激しく突き上げられ、その拍子に男の手から離れた。刀は一瞬宙を舞った。さらに振り戻る錫杖を、素早く握り手を返し、海念は男の左足側面を容赦なく打ち込んだ。ばきっという鈍い音が聞こえた。男は崩れるようにその場にしゃがみこんでしまった。

「何だぁ、この坊主は一」

残りの男たち四人は激昂して次々に抜刀し、海念を取り囲む。海念は、慎重に錫杖を構え直した。そして、旅人たちに、「ここを逃げよ！」と叫ぶ。啞然としていた二人は、その声で一目散に峠方向へ走り去って行った。

隙のない海念の構えが、とり囲む男たちの動きをぴたりと止め、凍らせていた。その時であった。薄暗がりから、突然、落ち着いた声が聞こえてきた。

「お坊さん、拙者がご助力させてもらおう。こんな悪党どもは始末してしまうに限る」

その緊張の場면을破り姿を現したのは、若い浪人ふうの侍である。左手を腰の鞘の元へあて、右手で刀の柄(つか)を握るその構えは、居合切りの凄みを十分に漂わせていた。

賊たちのうちの若手が、無鉄砲にも刀を振りかざそうとした。が、そこへ別の声が入り込む。

「よせ、分が悪い。ここはひとまず退散だ」

足の骨折を、杖にした刀でかばって立っていた親分格ふうの男が制止したのだった。やがて男たちは親分格の男に肩を貸しながら、峠とは反対方向に向かって小走りに立ち去って行った。

薄暗がりに消え去る男たちを、用心深く見届けるように二人は立っていた。

「お坊さん、なかなかやりますな。余計なお世話を買って出しましたかもしれない。お見事な身のこなしてござった」

浪人ふうの男は、腰から手を離し、両掌を揉み合わせるような格好をしながら言った。

「かたじけないことでした。あの多勢では、命は落とさないまでも怪我は避けられまいと見込んでおりました」

「いやいや、あの形勢では怪我をしたのは奴らでしょう。しかし、あの迷いのない先手の立ち振る舞いはお見事と言うほかない。悪党に対しては躊躇なく機先を制することがすべてでござる」

浪人はすっかり海念に感服している様子だった。みずから諏訪十三郎だと名乗り出し、江戸までお供したいものだと言いつつ立っていた。

海念は、道を求め、師家(しけ)の寺を渡り歩く、行雲流水の托鉢行脚を続けていたのだった。この折りは甲斐の国のある寺を訪れ江戸に戻る途中であったのだ。

やがて二人は薄暗い森を出て、見晴らしのよい小仏峠に差しかけた。すでに夕刻となり、さえぎるものがない峠でも夕闇が広が

りつつあった。

ここから江戸市中までは十二、三里、甲州街道の江戸の玄関である内藤新宿まででもおよそ十里は残っていた。途中の八王子の宿まででも四、五里はある。幸運にも宿を見つけるか、野宿しなければならない距離である。ただ、風来者と呼ぶべき二人にとっては、宿の問題など眼中にない気配だった。

「そうですか、海念さんとおっしゃるのですか。で、剣術はどこで習われた」

「もともと禅僧は、護身のため棒術などをたしなみます。特にわたしの師は仏道とともに武道にも秀でたお方でしたので……」

海念は、見ず知らずの浪人に沢庵和尚のことを話すことをためらい、和尚の名を伏せた。十三郎はそれに特別気にとめることはなかった。

「拙者は、江戸に出てある先生に師事して軍学を学ぼうと考えておる。武術にはいささかたしなみのある拙者だが、もはやそうしたものが活かせる時代ではないようだ。まあ、山賊を蹴散らすくらいが関の山かのう。はっはっはっ」

「しかし軍学とてこの太平の世では同じことではないのですか」

海念は豪快に笑う十三郎に、やや杓子定規に問い返した。
「まさしく。その先生が説かれる話は単なる軍学ではないのだ。幕府の御政道を糾す知恵に満ちた軍学だと聞いておる。だからこそ拙者はその師のもとに向かうのだ」

と言い終えると、十三郎は、山道の下方に人家の灯りがちらちら見えるのを指さした。

「おお、灯りが見えるぞ。宿があるかどうかはわからぬが、あの辺りで休むとませんか。いやいや、軍資金は拙者にお任せあれ。今宵は飲み明かしましょうぞ」

二人が街道沿いに灯りが見える付近に辿りついた時、ふいにひとつの人影が近づいてきた。まるで待ち構えていたかのようにいそいそとその人影は近寄ってくる。暗闇のため顔や姿が判然としな

い。一瞬二人は用心して身構えた。が、その人影は馴れ馴れしく声をかけてくるのだった。

「お坊様、あっ、やはり先ほど助けていただいたお坊様ですね」

何と、海念が逃がしてやった旅人の片方の男なのであった。二人の緊張は解かれた。

「さきほどは誠にありがとうございました。わたしどもはこの村の者でして、もう一人の娘御は、この村の庄屋さまのお嬢様でございます」

年配の男は、庄屋のうちの手代で与助という者だった。命からがら逃げ帰り、主人に峠付近での顛末を話したという。主人は、この街道は一筋なのできつとここでお待ちすればお会いできるはずだと読んだ。そしてお会いできたら、是非お立寄りいただくようお願いするのだと、そう命じたということであった。庄屋の主人は、娘の恩人に何としてもお礼がしたいと願ったそうなのである。

「海念さん、渡りに舟ではないか。お言葉に甘えましょうぞ」

与助に案内され、二人は庄屋の屋敷に迎えられた。あの出来事での驚きのあまり娘御は寝込んでしまっているとのことだった。父親だという白髪の主人は、娘の命の恩人に両手をついて厚く礼を述べた。そして、よろしければ心ゆくまで滞在してもらいたい、と感謝の気持ちを示すのだった。

「いやー、大した豪勢な旅となったものだ」

十三郎は有頂天となっていた。入浴や、贅沢なもてなしの食事を済ました二人は、寝床が敷かれた広い客間に案内されていたのだった。さすが庄屋の屋敷だけのことはあり、襖には名立たる者の手による山水画が施され、手の込んだ透かし彫りの欄間も見事なものである。

「さあさあ、海念さん。飲み直しましょうぞ。しかし、人助けはするものですのう」

寝酒までそれとなく注文していた十三郎の厚かましさに恐れ入っていた海念だったが、なぜか憎めない人だと感じて気を許した。

「浪人の身の上となって早や五年、人様に喜ばれ馳走となる酒のうまさにはとんとご無沙汰であった。だから、今宵はうれしゅうてならぬ……」

十三郎は、海念の杯に酒をなみなみと注いだあと、矢継ぎ早に手酌を始めていた。

「武士は、いや人は、誰かのために死ぬることこそが本懐(ほんかい)なのではござらぬか。仕官をすることとは、俸禄を得ることにあらず、己の命を主君に預けることなのだと拙者は考えておる。だが、浪人の身は、何と切ないものであるか……。誇りを持って死ぬことにあらず、気がついてみると、己が醜く食うて生きることにあくせくさせられておる始末だ。そんな野良犬、やせ犬の暮しをもう五年も続けてしもうた。

しかし、本日は違う。完璧に違う。人の命を救った。いや、救ったのは海念さんだ。だが拙者もご助力させていただいた。そして、こうして人様に喜ばれておるのだ。こんな誇りに満ちたひと時はうれしゅうてならん。なあ、海念さん……」

もうだいぶ酔いが回り始めた十三郎のようだった。だが、海念には今宵十三郎をはしゃがせている浪人暮しの闇というものが手にとるようにわかっていた。父もそうであったし、あの中村小平太どものも……。生活のひもじさが辛いのではない、命を託す主がないというきれい事でもない、自分を必要とするものがないことのやる瀬無さが、落ちゆく深い谷底をながめさせられるような……。

海念は、徳利を手にとり、十三郎に酌をした。

「十三郎どの、江戸ではどちらの先生に師事されるので……」

突然たずねる海念に十三郎は目を見張った。さらに海念は何気なく言葉を足した。

「ひょっとして、神田連雀町の由井正雪先生なのでは……」

十三郎は、はっとして杯を揺らし酒をこぼした。

「な、なぜそれをご存知か。なぜそれをそなたは知っておる」

(34) 浪人の親子に降りかかる災難と海念の苦肉の策！

翌朝、海念と十三郎は、もうしばしの滞在をと勧める庄屋の主の言葉を振り切り、礼を言って江戸へと向かうことにした。主は、それでは気持ちが済まないと言って、二人にそれぞれ金子(きんす)を包んだ。

宿場町八王子へと向かう甲州街道に出た二人は、夏のまぶしい朝日に向かって進むこととなった。笠のない十三郎は、右手のひらを額にかざし、まぶしさを堪えながら歩いていた。

「今日も暑くなりそうな気配じゃのう。江戸はさぞかし暑苦しいのでござろうな」

「山中の信州に較べると暑いと言えましょう」

十三郎の郷里が信州であることを海念は昨夜聞いていた。浪人となってからも、なお長く郷里を離れずに留まっていたと話していた。

「江戸は、冬は火事で熱くて、夏は夏でむし暑いということか。おまけに浪人たちは不平で熱くなっておる。正雪先生は、それで涼しい蝦夷地の開拓をとお考えに及ばれたのかのう。いやいや、そんな戯言(ざれごと)を言ってはいかんか。はっはっはっはっ」

十三郎は、昨夜の飲み語らいですっかり海念に気を許すようになっていた。おまけに自分がこれから向かう由井正雪先生のその名を海念が知っていたとわかり、なおのことであり、仲間意識をさえ抱き始めていたのだった。

昨夜、十三郎は自分が江戸へのこの旅に至る顛末をくどくどと海念に聞かせていた。

十三郎は、江戸から戻った同じ浪人者の知人から、軍学者由井正雪の江戸での噂を聞いたとのことだった。すでに正雪の軍学塾には、少なからぬ門弟がおり、江戸在住の浪人や大名家の家臣たちのみならず、各地からの浪人までもが出入りするほどに人気を博しているとのことだった。ただ噂の片方中には、大ぼら吹き曲学阿世の徒だとか、幕府転覆をねらう危険な学者といったもの

もあるにはあるという。

だが、塾での講義を直接聴講した十三郎の知人の話によれば、由井正雪は実直な趣きで当世の浪人たちの苦境を見つめているという。幕府に対して浪人救済の策を一途に嘆願するお方だという。そして、その策としては幕府にとっても益あるに違いない、浪人たちを使った蝦夷地(北海道)大開拓案を研鑽されておられるというのだった。

「で、もし正雪先生のご提案が幕府によって取り上げられたとしたなら、蝦夷地へ向かおうとする浪人はいかほどおりましょうか」

「うーむ。千、いや二千、いやいや三千にも上るかもしれぬ。当然拙者はいの一番に向かう覚悟じゃ。なんせ、この数年の苦しい浪人生活で、拙者は浪人たちには何ほどの将来もないことを、痛いほど知らしめられてきもうした。この先、何年経とうが浪人たちに明日というものは来ないはずでごさる」

まだ人の出のない街道ということもあってか、十三郎は傍若無人に大声を張り上げて喋り続けるのだった。

「そろそろ八王子の宿が見えてきました」

江戸方面は初めてだという十三郎に、海念は案内のつもりでそう言った。

「早くも喉が渇き始めたものだ。どこかで、湯茶を所望できぬものかのう」

旅の速足に慣れている海念に対して、十三郎の口からははや泣き言ともとれる言葉がもれた。

「まだまだ先はなごうございますぞ。まあ、あの茶屋でのどを潤しますか」

二人は、宿場のはずれの茶屋に立ち寄ることとした。宿場の方向から、諏訪方向へと向かう旅人の姿がわずかにうかがえた。

海念は腰を降ろしながら、錫杖を腰掛けた台に立て掛ける。十三郎も腰からはずした大刀を立て掛ける。そして、突然妙なことを言い出すのだった。

「海念さん、太刀は武士の魂と言いますが、当世の浪人の中には魂まで、食扶持(くいぶち)に替えてしまう者もおる有様なんですぞ。情けないことじゃのう。とは言うものの、実を言うとな、拙者も一時は、大事な魂を質草にしたことがあったのじゃ。はっはっはっはっ」

海念は、隣に座る十三郎に笑顔を向けるのだった。

「では腰が妙にさみしくなりましたのう」

海念も冗談で応じるのだった。

「そうそう、格好ばかりの竹光の太刀を差したとて、軽くて様にならんものじゃ。その時知ったのだが、竹光を腰にする浪人は見ればわかるものじゃぞ。町人たちは騙せても、武士同士では容易に見抜けるものでござる」

「ほう、そんなものですか」

茶屋の老婆が、盆に二つの湯のみを載せて運んできた。

「これから江戸へ向かわれますのかね」

「おお、そうじゃ。ところで、宿場からの旅人は少ないのではないのか」

「いいええ、大方の旅の方たちはもうとっくに発たれましたのじゃて」

そう言って老婆は静かに茶を置いた。そして、曲がった腰を伸ばすように反り返り、右手をかざして宿場の方を眺めるのだった。何やら目を引くものがあったようだ。と、老婆が心配そうな声でつぶやく。

「いやいや、あの子は大丈夫ですかのう」

宿場のはるか前方に、砂埃が立ち上がっているのが見える。侍が乗った早馬に見えた。その手前に、子どもが一人こちらを向いて歩いている。泣きべそをかいている仕草のようだ。そしてさらにその手前には、ぐずるわが子にわざと距離をあけたかのような父親と思しき浪人が歩いている。

老婆の言葉に促され、視線をやっていた海念と十三郎は、その

光景に言い知れない不吉さと、次に起こる何事かを咄嗟に察するのだった。

見る見る砂埃は大きくなった。そして、その子ども付近でそれが起きたのだ。馬がいななき、激しく立ち上がった。侍がぶざまに落馬した。子どもは、血相を変え、子猫のように父親のもとに走り寄る。親子は、凍ったように寄り添って、砂埃の中央を呆然と眺めていた。

「無礼者めー」

落馬した侍が、起き上がり、腰の砂を払いながらその親子に詰め寄っていた。

「この無礼者！ えーい、この無礼者めー！」

侍は、興奮状態の中で自分の面子をどう修復したものかと戸惑っていたのか、ただただ浪人親子をなじる言葉を繰り返した。

海念と十三郎も思わず、茶屋からその現場へ駆け寄っていた。

「この子が大変な失礼をいたし申した。お許しくださいませ」

「ええい、許せるものか。そなたも、武士であるなら、早馬の大事がわかっておろう。ええい、何としたものか……」

浪人親子は萎縮して誤り続け、侍はまるで大きな駄駄っ児(だだっこ)のように振舞った。

とその時、海念は、侍の表情に意地悪い笑みが走ったのを見逃さなかった。

「浪人もの、成敗いたすから親子ともどもそこへ直れ。直れというのだ。さ、さもなくば、刀を抜け！」

浪人の子は、父親にしがみつき、真っ青な顔となっている。

「お戯れを、どうかお許しくださいませ。街道の中央を歩かせていた拙者が悪うござった。このとおり、お許しくださいませ」

「いいや、許せぬ。そなたも武士ならば、太刀にて決着を付けようぞ！ さあ、抜け！ 抜けというのだ！」

侍は、右手を刀の柄にやりながら執拗に迫った。

この時ふいに、十三郎が、海念にそっと耳打するのだった。

「大変だ。浪人の腰のものは竹光だ、おそらく」

「うむ……」

海念は、先ほどの侍の顔によぎった意地悪そうな笑みの意味を確信した。

父親はなすすべなしと思ったのか、さらに許しを乞うべく、土下座の姿勢に入ろうとした。と、その時、

「いや、しばらくお待ちください！」

海念が、この緊張に素早く割り込んだのだった。

「な、なんだ。この乞食坊主が何事ぞ。武士の作法に口出しするとても言うか」

「いいえ、とんでもございませぬ。ただ、幼気(いたいけ)な童のなしましたことゆえ、どうかお許し願いたいのでございます。どうか、お許しを」

海念は笠をはずし、深々と頭を下げた。

「ならぬと言うておるわ。もはや勘弁ならん」

この出来事を取り囲む宿場の者たちから、舌打ちする様子がかがえた。

「では、何としても果し合いでございますか。致し方ありますまい。それでは、このわたくしめが見届け役を買って出ることいたします」

「うむ」

侍は、それでよいのだという表情で頷いた。

「それはそうと、お侍さま、ご浪人さまの方は親子二人でございます。後々重なる仇討ちというのも面倒なことでございましょう。お父上が済みましたら後、ご子息の番ということでいかがでございます」

「ええーい、併せて成敗してくれる」

海念の落ち着いた言動に、侍は押され気味となっていた。居合わせた者たちは海念の挙動に首をかしげている。

「では、お父上、お父上の刀は後ほどのご子息の番に備えてお預かりいたします」

海念は、素早く浪人の刀を預かった。浪人はなすままとなっていた。

「で、十三郎どの。そなたの太刀をご浪人にお貸ししてくだされ」

十三郎は、なるほどと頷き、合点の表情で、いそいそと太刀を腰からはずした。十三郎の真剣の太刀が、その浪人に手渡された。

この仲介の段取りを、侍は、あっという思いで見とれてしまった。

「何をしておるのじゃ！」

と叫んだが、それ以上に踏み込む言葉が出なかった。表情は歴然として曇り始める。

他方、浪人の表情は一変した。腹を据えたような、堪えていた怒りを一気に吐き出すような鋭い形相に変わった。そして十三郎からの太刀をおもむろに腰に差し始めた。

そこで海念は、畳み込むように言うのだった。

「お侍さま、ここは天下の往来でございます。また、お急ぎの早馬が参りますと、再び惨事となりましょう。ここしばらく先の右手に邪魔の入らぬ野原がございますので、果し合いはそちらでということにはなりませんでしょうか」

「うーむ、よかるう……」

侍は、慥然と答えたが、居心地の悪そうな素振りが見え透いていた。馬の様子を振り返ったりして、先ほどまでの気迫はすっかり失われていた。

「それから、これは余計な心配でございますが、早馬というお役目でこのように時を失っていてよろしいのかどうか……。何か、一時を争う火急のお知らせなのではないのかとご心配申し上げますのでございますが……」

「ええーい、わかっている。そうに決まっている。じゃて、このようなことで、時を失っている場合ではないのだから。うーむ、止めじゃ、止めじゃ」

侍は、海念の余計な節介を、これぞ潮時と見たのか、袴の砂を払うようにして、きょとんと立ちすくむ馬へと足早に戻ってゆくことになった。

「お侍さま、果し合いの方はいかなりますので」

「取り止めと申しておる。それどころではないわ」

と言うが早いか、侍は馬に飛び乗り拍車をかけ、再び荒っぽい砂埃を立てて街道を西へ向かって疾駆していった。

早馬が街道の西へ消え去るのを見届け、その場に居合わせた者たちは一様に胸を撫で下ろし、笑みが戻った。

浪人の子どもは父親に向かって大事そうに太刀を差し出した。が、いかにも軽々と扱うのが武士の目からならわかった。父親は言いようのない苦笑いをして受け取った。そして腰から真剣の太刀をはずし、十三郎に丁寧の手渡ししながら言うのだった。

「まことに面目ないことでござった。生きるため、ここまで失ってしもうたわけなのです」

「致し方ない事情なのでござろう。……ご子息のためにも生き抜いてくだされ。きっと、……きっと良いことも訪れましょうぞ」

十三郎は、鼻をすすりながら、たどたどしくつぶやいた。

うな垂れた浪人の脇で、痩せた子どもが、磨り減ったわらじを履いて海念を見上げていた。そのうす汚れた顔には血色が取り戻されていた。見つめていた海念は、この子の目の前で、父親が武士の誇りの最後の最後までを奪われるという悲惨さが、とにかく回避できたことに、ただただ安堵するのだった。

浪人親子は、海念たちに几帳面にそろって頭を下げ、二人並んで街道を西へ向かっていった。

(35) 保兵衛の懸念がもどかしい夢で海念に届く！

海念と十三郎の二人は、甲州街道八王子宿から内藤新宿までのおよそ十里、約十時間を歩き通した。すっかり夜となった暮れ六つから夜五つ(午後八時頃)頃、ほうほうのていで宿場にたどり着くのがあった。旅慣れしていない十三郎はこたえているようだ。

ここは正確にはまだ江戸ではない。ここからが江戸だとされた関所、四谷大木戸までは半里を残していた。

内藤新宿は、江戸からの五街道の最初の宿場町である四宿(ししゅく)のひとつである。ほかに、品川(東海道)、板橋(中仙道)、千住(日光街道・奥州街道)があり、それぞれに、大名の泊まる格式を誇る宿屋である本陣、脇本陣と、町人向けの旅籠(はたご)、加えて飯盛り女の名目で遊女を置いた遊郭があり、常に賑わいを見せた宿場であった。

「お泊りではございませんか」の呼び声に誘われ、二人は、さっそく宿をとった。八王子の庄屋の主からもらった金子が心強かったに違いない。

「海念さんは、もうお休みにになりますか？ 拙者は折角だから……」

湯に入り旅の汗を流し、遅い夜の食事が終えた時、十三郎は元気を取り戻しそわそわとしていた。

「どうぞ、ごゆっくりしてください。わたしは先に横になります。」

十三郎は階段を降り、夜の宿場街に出て行った。窓の障子戸の外からは、まだ賑やかな人声が聞こえていた。海念は、旅の疲れを癒すように、畳の上で仰向きとなり手足を存分に伸ばすのだった。

天井に目をやりながら、明日、江戸に戻ってからのことに思いを巡らした。

やはり、由井正雪先生の講義を一度は聴講しておこうと思った。同時に、今朝八王子の宿場での惨めな浪人親子の姿が目についた。とその時、もう一組別な親子、中村小平太と娘静のことが突如として思い起こされ、海念は胸の高鳴りを覚えるのだった。

静さんはどうしているだろうか。あの訪問時、夕食の支度に精を出していた甲斐甲斐しい静の姿が目につかぶのだった。また、あの路地裏で、午後の一と時、数奇な運命を辿る直太郎を遊んでやっている姿、いとまごいの際に名残惜しそうに言った言葉「きつと

またいらしてくださいね」という優しい声音などの記憶が、睡魔と入り混じり海念を包み込んだ。海念は深い眠りに落ちて行くのだった。そして、奇妙な夢の中を彷徨った……

「保兵衛さん、なぜ駄目なんですか？」

必死に問いかける海念に対して、保兵衛は険しい顔をして首を横に振りその理由を説明している。海念の目からは、保兵衛の表情が尋常ではないものと映っていた。だが、緊迫した光景のわりには何も聞こえてこないのが不思議だった。そこに言い知れないもどかしさがあった。

「だから、どうしてご浪人たちの窮状を憂えてはならないのですか？」

海念は、そのようなことを口走っていた。保兵衛は、静かに右手のひらを左右に振っている。

「えっ？ そうじゃなくて？ じゃ何だと言うのです？」

保兵衛はうつむいて悩むように考えこんでしまった。が、ようやく保兵衛は、身振り手振りでの姿を模し始めたようだった。鬚(まげ)ではなく肩まで届く総髪(そうはつ)だと表現しているようだった。さらに、袴姿の男だとも表しているように見えた。

「その人が駄目だというのですか？」

腕組みして目をつぶった保兵衛はやがて、大きく頷いた。

「なぜなんです？ それは誰なのですか？」

保兵衛は、海念に向かって人差し指を差した。そしてその右手を手刀にして自分の首の右側に強く押し当てた。ガクッとうな垂れ首が落ちる格好を演技した。

「わたしの首が飛ぶとでも？」

目を伏せ腕組みしたままの保兵衛が、再び大きく頷くのだった。

「ええっ！ だ、だけど、何のことだか、皆目わからない……」

海念は保兵衛を見つめ押し黙る。保兵衛もがっかりしたように、身振りをやめた。

とその時、傍らの戸板がドンドンと乱暴に叩かれた。自分たち

が、ある建物の薄暗い中に佇んでいたこともその時初めて意識させられた。

外では、何やら捕り方らしき者たちが互いに合図らしき言葉を発し合っている気配があった。

海念は、その瞬間、保兵衛の血相が急変したのを見てとった。

戸板を叩き続ける音が一瞬止んだ。と思うと、戸板は荒々しく蹴破られた。

戸外の陽の光が、爆発時の閃光のごとく一気に差し込んだ。二人は、眩しさに瞬時目がくらむ。その光に誘われるように、数人の鉢巻姿の代官所役人たちが、雪崩のように踏み込んできた。

保兵衛がとっさに右腕全体で裏手の方向を指し示す。

二人は裏手から脱兎のごとく抜け出した。草原とも林ともつかぬ空間を二人は疾駆し続けた。が、ふと振り返ると、六尺棒を手にした役人たちは、その数を増してみるみるうちに迫って来ていた。

「うーっ」

と息苦しさの余り、海念は夢から覚めた。閉め切ったままの部屋の中はムツとする暑さだ。海念は、首筋の汗を手で拭う。ちょうどその時、十三郎が戻って来たようだった。宿の廊下から十三郎の鼻歌が聞こえてくる。

「腹~の~、立つときゃ~、茶碗で~、酒を~.....」

障子を開けた十三郎は、部屋の真中で背を丸めてぽつんと座りこんでいる海念を見つけた。

「おや、まだお休みではなかったのですか」

「いや、うたた寝をしております.....」

「いやはや、今晚は極楽、極楽。庄屋の主からの軍資金ですっかり極楽気分にならせてもらいましたぞ。さあて、明日に備えて眠るとしますか」

のん気そうにそう言った十三郎は、窓の障子を開け放ち、手早く布団を海念の分まで敷いた。そして、極楽、極楽とつぶやきながら引っくり返って寝てしまった。

十三郎は寢息を立てていたが、海念の意識は冴え冴えとなるのだった。開け放たれた窓からは、蒸し暑い部屋に心地よい外気が流れ込んできた。

そう言えば、保兵衛さんとはしばらく会っていない、と海念は振り返った。これまで、保兵衛さんが苦境に立っている時、不思議にもその振動が自分に伝わってきた。そして、何度も時空超越に及んだ、と思い返していた。

だが、和尚の遷化の時以来二年間も、空白の期間が続いている。不思議だった心の共振は途絶えている……。と、そこまで思い至った時、すべての原因が自分にあったことを合点する海念であった。そうなのだ、この二年間、自分には心の余裕なんていうものが一切なかったわけだ。空虚な虚脱感に浸りながら、生ける屍同然の日々を重ねていた。これが、たとえ保兵衛さんからの振動があったとしても共振できなかった原因に違いない、とそう思えた。

とすれば、先ほどの夢はどんな意味をもつのだろうか？ と海念は思いを一步進めてゆく。自分は人の心に共振することができるほどには空虚さから脱出できたということなのだろうか。

確かに、東海寺を出て托鉢の旅を続けながら多くの人々と巡り合った。人が苦悩する姿とまじまじと接することができた。他者の苦悩を憐れと受けとめる自分が確かに自覚できる。だとすれば、先ほどの夢はまさしく保兵衛さんの心の振動への共振であったと見なすべきなのか。

だが、この共振は、保兵衛さん自身の苦境ではなかったようだ。どうも自分に向けられた保兵衛さんの懸念であったと受けとれる。保兵衛さんは、必死で何かを自分に伝えようとしていたのだ。そして、それは命にかかわることであり、しかも代官所役人たちによる捕縛に至るとの暗示も含まれていたと解釈できる。そうなるとこれは尋常なことではない……。

また、それらは、自分が夢の中で口走っていたようだった「浪人たちの窮状を憂える」こととどう関係しているというのだろうか。そし

て皆目見当がつかないのが、総髪で袴姿の男だ。一体どこの誰のことを指しているんだろうか。わからない……。

両手を頭の後で組み、暗い天井を見つめながら考える海念の推理は、ようやくそこで行き詰まってしまうのだった。

(36) 目の前の総髪で袴姿の男を見定める海念！

『あっ……』

と、海念は思わず突き上げてくる驚愕の声を、かろうじて堪えた。昨夜の内藤新宿での夢以来、心の中に不気味に居座っていた影のその実体が、ほんの目の前にいることに気づかされたからだった。

その男は講堂の右手口よりおもむろに現れた。正面に進み出て軽い会釈を済まし書見台を前にした講座に座った。座した男の背後には、意味ありげな古い甲冑が置かれ、上方には神棚が祀られてあった。男は小柄ではあったが、整った顔立ちにぎろっと光る眼を持つその風貌といい、正面まで歩んできた凜(りん)とした動作といい、人をして畏敬の念を抱かしめる何かを放っているように思われた。

海念が『そうだ、この人のことに違いない！』と直観したのは、その男が座した直後であった。男は白い袴を正し、首を一瞬小さく、素早く振りながら肩まで垂らした総髪の髪の乱れを直したのである。夢の中での総髪と袴という観念が眼前の現実の光景と重なったのである。まさかと思う海念だったが、それと同時に、先入観が盲点を作っていたのだということを知らされるのだった。

確かに目の前に座る男は総髪で、袴姿なのである。夢の中で保兵衛が危惧していた人物は、由井正雪先生のことであったのだ……と、海念は確信するのだった。

海念と十三郎は、ここ神田連雀町の裏店(うらだな)の軍学塾に訪れていた。さほど広いとは言えない講堂の後方で聴講者として加わっていたのだ。最前列は門弟らしき数人が各々の書見台を前にして占めていた。その後には常連と思しき十数人の聴講者が気迫を込めた姿勢で陣取り、立錐の余地なく座していた。見るからに食い潰した浪人者と受け取れる身なりの者が多い。中には江戸づめの諸藩の家臣と見える整った身なりの武士たちもいた。

江戸の夏の午後は、講堂内を容赦なく残酷に蒸していた。が、誰ひとりとして扇子を使う者もなく、滴り落ちる汗をただ何人かが手ぬぐいで静かに拭っているだけだった。張りつめた緊張感だけが静寂の中に満ちている。

海念の隣には、十三郎がやや興奮気味で身を乗り出して座っている。懐から取り出した懐紙と携帯用の小筆で覚え書きをしようとの準備まで整えていた。

海念は、由井正雪の表情を目を凝らして見つめた。二つに分かれた人々のうわさ、つまり一方の、妖気を漂わせた野心家だとする見方、また他方の、浪人の苦境に思いを寄せ静かに幕政を糾さんとする学者だという見方、そのいずれであるのかを見定めたかったに違いない。さらに、この先生のどこに保兵衛が抱く危惧の根拠が潜んでいるのかという関心も加わり、海念の視線は否が応でも鋭利に研ぎ澄まされていたのだ。

正雪は静かに、だが最後尾の海念たちにも聞きまがうことのない澄み切った声音で語り始めた。初めに、本日の講釈の次第について述べ、先ずは楠木流の軍学講釈を、次に『老子』の原典講釈、そして質疑応答の順であることを告げるのだった。

この日の軍学講釈は、城の縄張りや設計に関する築城術と呼ばれる話であり、『孫子』の兵法などが例示され、淡々と進められた。思いのほか講じる側に特別の熱の入れようが感じられなかっただけでなく、聴講側も何かに打たれる様子も見受けられなかった。その気配から、『そうか、これが眼目ではないのだな……』と海念

も了解するのだった。

ところが、引き続き始まった『老子』の講釈に移ると、講堂内の空気がにわかになら変わった。その変化は誰の目からもわかった。聴講者たちは、座り直す仕草を始め、漸く懐紙と筆とを懐から取り出す者も増えたのだった。

幕藩体制にあって学問の主流、官学は、言うまでもなく儒教・儒学の流れとしての『朱子学』であった。これに対抗して、いわば無為・自然の道を説く『老子』を講じることは、そのまま幕府権力への非難を意味していたと言えよう。禅の道を学んできた海念には、その脈絡がうすうす見えていたはずである。

正雪はこの日講釈する『老子』の一章を、朗々と読み上げ始めた。要所要所の語句を強めるその朗読は、あたかも職人技とさえ勘ぐれる慣れを感じさせた。

「民、威(い)を畏(おそ)れざれば、則ち大威至る。其の居る所を狭(せば)むること無く、其の……」

そしてこの章の意味を講釈してゆく正雪であった。「強権的な治世の行き過ぎによって、民がお上の権勢を畏れないようになると、大威すなわち世の大乱がやってくる。それゆえ、世の為政者は民の居所を狭めるようなことをしてはならない。生業を圧迫するようなことをしてはならない。こうした圧迫をしなければ、民もまた治世をよろこび飽くことがない。」

正雪は、聴き入る聴講者たちの反応をうかがうように書見台から顔を上げ、講堂内を見回した。そしてまた続けた。

「これに対し聖人は、自身が知り尽くしたことであっても、それを誇示することなく、また自身がかわいくとも自身を貴しとすることがない。望ましい聖人の治世というものは、権力権勢から遠ざかり、謙虚を旨として進められるものである」

随所で、浪人たちの頷く素振りが、最後尾の海念からはよくうかがえた。いや、それ以前に、隣に座る十三郎から、「うむ、うむ」としつつこいばかりに合点する動きが海念に伝わってくるのだった。

十三郎にとって、この講釈の意味するところは、まさに浪人たるわが身の悲痛さと憤りに差し込む、明るさとぬくもりのある陽光であったに違いなかったのだろう。

湯飲みを手にして喉を潤した正雪は、この後、この日の主題に関連した『老子』の他のいくつかの章を紹介した。そして、強権的な為政者を非難する意を鋭く込めた言葉を講堂内に響かせて締めくくったのだった。

海念は、正雪の熱っぽい語り口が、確実に講堂内の聴講者たちの溜飲を下げている事態を肌身で感じとっていた。正雪が博していた人気の理由を知る思いがした。そして講堂内の聴講者たちの高ぶる様子を軽く見回していたが、ふとある箇所が目が止まるのだった。

自分たちの最後尾の一行前の最左翼、出入り口付近に座る武士の妙に醒めた様子が気になったのである。右手は小筆を持っているのであろうか、海念からは見えなかった。が、左手は親指と人差し指で下あごを撫でる動作を繰り返していた。それは、他の浪人たちのように上気している姿とは別に、何か思案している内面を表しているように見えるのだった。しかも、その武士は、羽織、袴の身なりが整い、月代(さかやき)も綺麗に剃られており、それが見苦しい他の浪人とは明らかに異なっていた。どこかの藩の家臣としての武士であることが十分想像されたのである。

海念にとっては、『老子』の講釈は特段に新鮮な感動を覚えるものではなかった。禅の修業にあって学ぶことといわば同一線上の内容であったからである。それよりもむしろ、啞然としたのは、仮に『老子』の講釈に名を借りているといえども、この江戸市中にある軍学塾にてここまで明白なかたちでの幕政非難を敢行する由井正雪という人物に対してであった。権力という凶暴な獣に対してあまりにも無神経、無防備な振る舞いが奇異にさえ感じられたのだった。それは、あの優れた禅僧沢庵和尚のそれを知る海念にとっては信じがたいほどの杜撰だと思えたのだ。

醒めた様子 of 武士が気になった理由も、その武士が幕政関与者と通じていないという保証などあり得ようはずがないと思われたからだったろう。聴講者を別段制限するわけでもなかったのは先刻明らかであったからだ。

とすれば、由井正雪という人物は、無防備であることを恐れないまれに見る純粹無垢な人柄であるか、あるいはどこかで虎の威を借りる算段をも織り込んでいるしたたかな野心家であるかのどちらかだということになる。海念はいまだ、当初の疑問であったうわさの二極分化の天秤の、そのどちらにも加担できない振り出し地点で当惑していたのだった。

やがて、質疑応答の段へと進むことになった。

「どなたからでも質疑ください」

と正雪はゆったりと聴講者に質疑を促した。

「それでは」

中頃の列に陣取った浪人が口火を切った。

「本日は、正雪先生のご高説を賜り誠にありがとうございました。さて、さっそくではございますが、先日とある知人より、先生が浪人救済のため『蝦夷地開拓』の計画なるものを研鑽され、幕府にご提案されるとのありがたきお話を漏れうかがいました。是非とも成就されたしと望むのですが、そのような遠大なご計画なれば、幕府内の賛同勢力の後ろ盾などが何としても必須ではなからうかと推察申し上げる次第です。この点は如何でございましょうや」

その武士は、今日の質疑のためにかねてから質疑内容を準備していたかのように、流暢にかつ一気に申し述べたのだった。

周囲の浪人たちは顔を見合わせ頷き合っていた。が、海念はただ一人再度唾然としたのだった。聞き覚えのある語り口だと感じていたのだが、なんとその浪人は中村小平太だったからである。以前に、小平太がこの塾に時々通っていると聞かされたことがあった海念だったのだ。

「そうなのだ。その点は拙者も是非知りたいものじゃ」

十三郎がにわかに色めき立ち、右手で膝を打ち、海念の隣で独り言のようにつぶやいた。他の多くの聴講者も耳をそばだてて静まり返った。

「良いお尋ねでござる」

正雪は、何ら臆することなく応え始めるのだった。

「すでに、内々では皆様方の一部の方々にはお話したこともござるが、実は、拙者は幕府内の有力な勢力の一角と通じております。」

講堂内は水を打ったように静まり返った。

「ただいまのご質問の応えとしては、幾たびかの御目通りも叶っております、御三家のひとつ紀州公の御名を挙げさせていただくことといたしましょう」

正雪は、何ら躊躇する様子もなく、むしろ重々しい口調でそう言い切った。その意表を突いた回答に、静まり返っていた講堂内がどっと沸いたことは言うまでもなかった。

海念が、ようやく由井正雪への評価を見定めるに至ったのは、この時なのであった。二極分化したうわさの后者、すなわち野心家としての由井正雪なる人物を静かに、そして確信に満ちた眼差しで凝視するのだった。それは、何故そうかという問いには整然とは応え切れない、海念の直感的な到達点ではあった。

そして同時に、怪訝な表情で、出入り口付近の醒めた武士がうつむいて忙しく筆記している様子をそれとなく見守る海念なのであった……

(37) 由井正雪への三人三様の評価と知恵伊豆！

「いやー、聞きしに勝る迫力でござった。これでは正雪先生の評判が高まるのも無理からぬこととござるのう」

十三郎は、人を待つように佇む海念に、興奮覚めやらぬ口調で語りかけた。

「そうござろうか」

海念の思いのほか冷ややかなつぶやきに、十三郎はやや拍子抜けするのだった。

二人は軍学塾の路地から表通りに通じる角で佇んでいる。夏の日は傾きかけ、表通りも漸く表店(おもてだな)の建物の長い影がおおい始めた。三々五々、塾の聴講者たちが通り過ぎて行く。皆一様に上気した様子がかがえた。

「お久しぶりでございます」

海念は突然に、塾の玄関からやや遅れて出てきた初老の武士に向かって挨拶をした。

「おやおや、海念さん。そなたも聴講されておられたのですか。これはこれは……」

中村小平太は、きまじめな顔を思い切りほころばせてそう言った。

「最後列で聴かせていただきました。あ、それから、こちらは、旅の途中で知り合った諏訪十三郎どのです。十三郎どのは……」

海念は、小仏峠や八王子でのいきさつをかいつまんで話し、十三郎にも小平太との出会いを紹介するのだった。

「こんなところでの立ち話も妙ですから、むさ苦しいところでよければお二人ともお出でになりませんか。ここから馬喰町までは七、八町(約7~800m)程度しかござらぬ。静もきっと喜ぶに違いないでしょう」

海念と十三郎は顔を見合わせてうなづくのだった。途中、十三郎は気を使って一升徳利を求め、左手に携えた。

三人を迎えた裏長屋の路地からは、相変わらず子どもたちがはしゃぎ回る声が響いていた。まだ二度しか訪れていない海念であった。だが、妙に懐かしく思えるのが不思議だった。

とその時、

「あっ、かいねんさんだー」

とどこからか子どもの甲高い声が聞こえた。声の主は海念の前に飛び出してきて、海念を見上げる。直太郎であった。と、路地の奥へと駆け出して行った。

やがて、路地の奥に、直太郎の手に引かれた静の姿が現れた。遠くからお辞儀をしている。静が、日頃、直太郎に自分のことを話していたのだろうと海念はそう思った。そしてこの路地の懐かしさのわけが、静にあったことに思い至るのだった。

一升徳利の持込みによってか、小平太宅ではたちまちのうちに宴(うたげ)が始まってしまった。静は酒の肴のこしらえであたふたとする始末だった。

「それにしても、山賊たちを懲らしめたとは、お二人は若くて羨ましい限りですな。」

「いいえ、これも浪々の身であるがゆえに身体を持て余している証拠ではございますまいか。のう、海念さん。いや、海念さんは御浪人ではなかったか、はっはっはっはっ」

「いやいや、おっしゃるとおりわたくしは親子代々の浪人者、筋金入りの二代目浪人と言えます。おまけに世捨て人でもあります」

「はっはっはっはっ、これはこれは、海念さんも言いますのう」

「だが、お二人ともご立派ですぞ。八王子宿で御浪人親子を救われた話などは涙ものですな。しかも、不遜で卑劣極まりない武士を操ったところなどは真似のできることはござらん。武士は相身互い(あいみたがい)と申すが、それがそうでないご時世じゃ。武士道も地に落ちたもので、江戸市中における旗本侍の悪行も度を越し始めておるようじゃ。それはともかく竹光を腰にとは、浪人の窮乏は身につまされるものですのう……」

小平太は、十三郎に徳利を向けようとして、すでに、徳利が軽くなり始めたのに気づくのだった。

「静、酒はあったはずじゃのう」

「はいはい、お父上のお薬は欠かしませんよ」

静は、心配させまいとすぐに新しい一升徳利を運んできた。「中村どのもやはりお薬がなくてははいけませんか。拙者も早くもこの世の憂さを晴らすためにお薬を常用し始めております。はっはっはっはっ」

小平太が新しい徳利を持ち上げると、十三郎はかしこまっていそいそと杯を差し出した。

「ところで、諏訪どのも正雪先生の講義は初めてとのことでござったな。して、本日のご感想は如何なものでしたかな」

「はい、一言で申して感服の至りでござった。よくも、浪人たちの怨みつらみと憤りのツボを押さえておられるお方だとそう感じ申した。これまで、今ひとつ了解に苦しんだ『老子』の教えでありましたが、正雪先生の講釈だと染み入るように受け止められたのが不思議でござった。うーむ何と言うか、全体としてまるで芝居でも見ているような思いにかられたものでした。」

「なるほど……」

小平太は十三郎が語り終わると、胸元でとめていた杯を口に運び飲み干した。

海念も、『まるで芝居でも見ているような思い』という言葉には頷いていた。

「中村さまは、本日質疑なされましたが、幕府内の後ろ盾については如何なる理由でご関心がおありだったのでしょうか」

杯をなめるように静かに飲んでいた海念が、ほろ酔い加減となり始めた小平太に切り出すのだった。

「うーむ、あれですか。実はちょっと気になるうわさを耳にしたものでしてな……」

「何でございます？幕府は『蝦夷地開拓』の計画をこころよく考えておらぬとか？」

十三郎が身を屈め不信そうに顔を突き出した。

「いいや、話はもっとねじれておるのじゃ。実はな、その真偽は定かではないのじゃが、またしてもあの老獪な知恵伊豆、松平伊豆守信綱がことじゃ。かやつがどうも密かに正雪先生の身边を探ら

せていそうな気配なのじゃ。」

「ありそうなことです。もしや講堂の隅に座していたあの侍がそうなのかもしれません……」

海念は自分が違和感を抱いたその侍の挙動について、見たままを説明するのだった。

「もし、あの侍が伊豆守どのの家臣だとすれば、正雪先生のご高説と言質は一言一句伊豆守どのの手中にあると言えましょう。で、中村どのはそれをご存知で？」

「左様、存じておる。本日もぬけぬけと聴講していましたな。実は、かやつに不信を抱いた者が、密かに帰途を確かめたところ知恵伊豆の屋敷の中に消えたとのことなのじゃ。」

で、拙者が心配いたしておるのは、昨今正雪先生の幕府非難のお言葉が次第に昂進しているご様子だからである。それが、知恵伊豆のような老獪な敵の耳が講堂内にもあることを知った上でのことかどうか、いやご存知なきことはなかろう。とすれば、知恵伊豆などを上回る幕府要人の後ろ盾などがなくしてあそこまでの大胆な言動には及べまいと思えたのじゃ。そこで、拙者はあえてあのような質疑に及んだ。」

「ちょっと待ってください。知恵伊豆がどうだこうだとは何のことでござるか？」

小平太と海念の間では既に周知の話となっている浪人潰しの先鋒、知恵伊豆について熟知しない十三郎が二人の話に割り込んできた。

「知恵伊豆というのはな……」

小平太は、知恵伊豆こと、松平伊豆守信綱が十年の昔、西国の島原、天草における切支丹の反乱を鎮める折に、すでに巷に溢れ幕府にとって目障りとなっていた西国の浪人たち一掃の意図をもあわせて抱いていた事実を説明するのだった。それがゆえに知恵伊豆との異名をとることにもなったのだと。

「幕府にはそんな卑劣なやつが……」

十三郎は杯をぐいっとあおった。

「それで中村さまは、正雪先生のご回答をどのようにお受けとめになられたのでしょうか？」

「そう、そこなのじゃ。拙者は、先生は実名は言わぬと読んでおった。拙者としてはさわりだけでよいと思っておった。むしろ、あえて敵に言質をとらせず、漠然とした含みをもって敵を脅かすべしとな。そうであるはずだと思っておったからこそあえて質疑したのだったが……」

「ところが、正雪先生は実名を言明なさいましたね」

海念は小平太の言葉に畳み掛けるようにそう言った。

「講堂の聴講者らは嬉々として騒いでおったが、拙者は内心当惑した。しまった！ とも思ったものじゃ」

「これで事態はどう進んでゆくのでしょうか？」

「わかりません。知恵伊豆ことゆえ奇想天外なはかりごとに突き進むやもしれぬ。拙者はあの一途な正雪先生に恩をあだで返したことになるのじゃろうか……」

小平太は、飲みかけの杯を置いた。そして、あぐらの両膝にだらりと両腕を置き、うつろに天井を見上げるのだった。

「中村さま、正雪先生は一途なお方には違いないと推察いたしますが、ひょっとしたら中村さまがお考えのようなお方ではないかもしれません」

それを聞くや、小平太と十三郎は思わず顎を引き、問い詰めるようなきつい眼差しを海念に向けるのだった。

(38) 奇遇としか言いようのない神田で遭遇した二人！

保兵衛は、いつものように御茶ノ水駅へは向かわず、神田駅で降りた。

あいかわらずロックアウトされたままの大学へ向かっていたのである。今日は何としても現場を見届けなければならない衝動に駆られていた。それというのも、全国の学園紛争のシンボルの意味

が託されていた東大安田講堂に、今朝早く機動隊が導入され、封鎖解除にかかったからだった。

また、御茶ノ水駅周辺が、去年の国際反戦デーのデモ以来、カルチュラタン(パリ・ラテン区の大学街で、学生運動の中心地となってきた)ふうとなり、機動隊とぶつかり合う可能性が高いと見て神田駅で下車したのだった。一月半ば過ぎの神田駅構内はまだ初詣のポスターなどが目につき正月気分を漂わせていた。

安田講堂への機動隊導入のニュースを、保兵衛はアルバイトの溶接工場で知った。

「いよいよ、機動隊も本気になって介入し始めたな」

経営者でもあるおじが、作業中にかけているラジオを聞きながら保兵衛に向かってそう言ったのだった。どうしてあっちこちの大学、おまけに日本だけじゃなくヨーロッパでも同じ動きがあるのかを、事あるごとに保兵衛に訊ねていたおじであった。当初は、「大学まで行って、あんなことしていいのかね」とただただ不信感をむき出しにしていたのだが、作業休憩で一服する際に聞く保兵衛の説明から「そんなもんかなあ……」という程には実情に関心を示すようになってきていたのだ。

「行かないでいいのかい？ 何だったら今日は上がってもいいんだよ」

おじのそんな言葉に甘えるようにして保兵衛は大森から電車に乗ったのだった。

靖国通りの須田町交差点まで来た時、冬の寒空に輪をかけるようなグレーの野暮な光景が目飛び込んできた。道路ぎわに機動隊を乗せた灰色の大型バスが至るところに留めてあったのだ。御茶ノ水カルチュラタンを遠巻きに包囲するような意図が、保兵衛ならずとも感ぜられたであろう。保兵衛は、足早に大学へと向かおうとした。

と、その時、万世橋方面から交差点に向かって歩いてくる一人の

黒衣の托鉢僧に目が奪われた。まさかとは思う保兵衛ではあったが、交差点の横断歩道をわたり切った地点でしばし佇んでしまうのだった。

僧侶は、深い笠で顔が隠されている。が、その歩む動作には確かに見覚えがある。錫杖のかたちと数珠の色も、赤坂見附のあの時と同じように思えた。今日の異常事態を知って、すでに興奮気味の気分となっていた保兵衛は、その余勢ともいべき強気で一瞬唐突過ぎる予感を感じるのだった。あの僧侶が海念さんだったとしても決して不思議なんかじゃない、と。そして衝動的に歩みより、思わず声をかけた。

「人違いでしたら許してください。もしや海念さんでは……」

と言いかけた保兵衛に向かって、僧侶は、笠を左手であげて微笑んでいた。まぎれもなく海念その人であったのだ。

「こちらへ超越(時空超越)して、こんなにすぐさまに会えるとは思ってもいませんでした」

海念は、ありがたそうに熱い茶の湯飲みを両手で包みながらそう言った。二人は、寒くとげとげしい外気を避け、神田小川町付近の喫茶店『ルノアール』に潜りこんでいた。

「海念さん、実はどんなに会って話したかったことか……」

保兵衛は、開いた腕をテーブルで支え海念を覗き込むように言った。

「保兵衛さんのその意志を夢でも受け取っていたのですが、もはや躊躇できないと思いやってきたのです」

が、保兵衛は、溶接時の鉄の飛沫が付着した腕時計を覗き、辛そうな表情で言うのだった。

「海念さん、聞いてもらいたい話が山とあるし、また聞きたい話もたくさんあるのだけれど、わたしは一、二時間ほど行くべきところがあるんです…… この喫茶店は何時間でも居ることのできることを売り物にした店なので、申し訳ないけど動かずに待っていてくれませんか？」

保兵衛は、店内でくつろぐ人たちや、読書をする人たちの姿を目で示しながらそう言った。

「いや、そんなことがあって当然だと思います。こちらへ来たのは保兵衛さんと話すことが目的なのですからおっしゃるとおりにさせてもらいます」

「必ず、一、二時間ほどで戻ってきます。ここで動かずに待っていてください。それから、今日は表は危険かもしれないのでくれぐれも外へは出ないようにね」

保兵衛はそう言いながら、もしよかったら暇つぶしにといって愛読している週刊誌『朝日ジャーナル』を手渡すのだった。なぜこの付近が今日あわただしく、とげとげしいのかの一端が、その週刊誌からは読み取れるであろうと保兵衛は思ったのかもしれない。

保兵衛が、喫茶店の出口で振り返った時、海念はもうその週刊誌を興味深げに手にしているのが見えた。

封鎖された正門付近には、紛争に距離を置きながらも好奇心が押さえきれないような学生たちが大勢取り囲んでいた。中庭からは全共闘メンバーが、いつもになく鋭くアジテーションするマイクの声が鳴り響いている。許しがたき暴拳、最終的総括、これを敗北とはせず、などといったいつにない激しい非難と悲壮感に溢れた言葉が聞き取れた。

保兵衛は、裏門へ回った。そこからは、全共闘メンバーの検問を経て封鎖された構内や中庭に入ることができたのだ。

保兵衛は、中庭でクラスメイト何人かのよく知った顔を見つける。「おう、来たんだ」

どこからかもって来たヘルメットが保兵衛に手渡された。それを保兵衛は黙って受け取った。

「こんな時に来ないでかあ。で学内状況は？」

「もう個別学内問題でもなければ、運動の個別性も追及しがたい状況だね」

「と言うことは、安田講堂攻防戦に呼応した動きを繰り返すという

方向なんだな」

「そう、去年の10.21以上のカルチェラタン解放区闘争へ持ってゆくようだぜ。」

確かに、その日の運動は、安田講堂攻防戦を支援するかたちの、挑発的で過激なものとなっていたのだった。御茶ノ水駅を中心として北は本郷通り、南は駿河台下に至る一体が、小さな戦争もどきの空間に化した。

学生側のデモは最初から荒れ狂い、角材を持つ学生とジュラルミンの盾を縦横無尽に使いこなす機動隊との激しい小競り合いに雪崩込んでいった。やがて機動隊はなぜか陣を引き、道路いっぱいにジュラルミン盾の壁を作る。そしてその後方から、最初は放物線を描く単発花火のように催涙ガス弾を打ち込んでくる。学生たちからは、敷石を砕いた投石が始まり、にらみ合ってきた真空地帯に火炎瓶が投ぜられる。その真空地帯に飛び出し、転がった火炎瓶をジュラルミンの壁にぶつける学生も現れる。

しかし、壁の向こうの動きは不気味に途絶える。と、やがて学生たちに向かった催涙ガス弾の水平打ちが始まった。やがて、ジュラルミン壁が、濁流で開く堰のように崩れ、紺色の機動隊の濁流が学生たちに向かってなだれ込んでくる。逃げ遅れた学生が、頭上から盾を振り下ろされ痛打される。ヘルメット、手拭マスク、角材の三点セットで身を固めた学生は、複数の機動隊員に囲まれ激しい実力行使を被る。多くの学生たちが、蹴散らされ、逃げ惑った。野次馬のギャラリーに紛れ込む者、商店に逃げ込む者、路地裏をすり抜ける者、そして運悪く検挙される者……

こうして蹴散らされた学生たちが各大学構内に結集して、安田講堂攻防戦を支援するかのようさらには激しい抵抗戦が、各校で同時並行で展開され続けたのだった。

だが、大学当局側から要請された大学への機動隊導入を皮切りとした、まさしく剥き出しとなった権力の猛威は、とても学生たちが立ち向かえる相手ではなかった。保兵衛はいまさらのように国家権力発動の、聞きしに勝る脅威を知るのだった。学生たちは散り

散りにされ逃げ惑う以外になかったのだ。保兵衛もそんな中の一人としてようやく、海念の待つ喫茶店にかりうじてたどり着くことができた。すでに、一、二時間のはずが、はるかに四、五時間の遅延とまでなっていた。

だが、そんな修羅場を知らない海念は、別に不安になる様子もなく何食わぬ涼しい顔で待っていたのだった。何度も週刊誌を読み返したり、静かに瞑想にふけったりすることで、海念にとっての時間は滑るように過ぎていたのだ。

「いやーすみません、とんでもなく遅くなってしまって。」

保兵衛は息を整えてそう言った。そして、暖房されている店内の暖かさに促されコートを脱いだ。

「どおってことはありません。……うっ、何だか急に目がしみる……」

海念は右手でしょぼつく目を押さえた。

「ごめんなさい。催涙弾の名残がコートに付いていたんでしょう。涙が出るだけで心配はいりませんから。このレモンの飛沫で中和させると効くようです」

「えっ、その『催涙弾』とは何のことですか」

「えーと、忍者が使う目くらましとでも言えばわかりますか」

保兵衛は、すでに真っ赤になり涙目となった目元をハンカチで拭いながらそう言った。

「まさか忍者たちとの闘いではなかったのでしょうか、大変なことがあったようですね」

「とうとう、国家権力が正体を現したというわけです。海念さんにわかるように言うなら、これまで国は学問の府である大学の自治を認める格好をとってきたのです。それは、ちょうど、中世寺院がもっていた特権とも喩えられるでしょうか。ところが、『紫衣事件』などに見受けられたように、やがて幕府権力は寺院を統制し始めたわけでしたよね。それと同じように、現代国家は今日漸くあからさまに大学の自治を踏みにじり始めたというわけです。」

ただ、常に権力というものは表向きの正しさを訴え続けなければならない立場にあるので、『あからさま』という姿は幾重にも覆い隠さなければならないようです。今日の機動隊導入も、大学当局からの要請という事実を強調しています。また、その要請にしても、国民の目から見て当然だと感じられるような空気が熟すのを待った気配が濃厚にありそうです。大学自治に名を借りた学生側の乱暴がひど過ぎるじゃないかという国民感情が熟すのを待つというか、そうした文脈をこしらえていった上での発動と見えるんですね。」
「そこまで老獪に画策するものなんでしょうか。しかし、何となく想像はできますが……」

海念は、興奮気味で話し続ける保兵衛の顔をじっと見つめながら呟くのだった。

「ところで、ほかにやり方があったかと言えば苦しい話になっちゃうのだけど、われわれ学生側が採ってきた戦術が最終的に今日の結果を招いたという気がしてならないんだ。

かねてから、ささやかれてきたことなんだけど、警察当局は民主勢力の弾圧の口実を得るために、『過激分子の泳がせ策』なるものを活用してきたという話がある。過激行動をある時期は黙認して、取り締まる時期が熟すのを待つというんだ。猛獣が身を伏せて、小動物たちが油断して限りなく接近するのを待つようにね。小動物たちは、猛獣の本当の怖さを軽視してはいけなはずなんだけどね……」

そこまで話しつづけた保兵衛は、時の経過に気がついたように、ふと店内を見回した。店内は人影がまばらになっていた。手持ち無沙汰で佇む女子店員が、ちらちらとこちらに視線を向けている。「海念さん、今日は遅くなったのでわたしのねぐらである大森まで付き合ってくださいませんか。狭いアパートですが、そこなら存分に話ができますから」

海念は、微笑みを浮かべて黙って頷いた。その表情には『願ってもないことです』と語るものがあつた。

「ところで、海念さんはなぜ神田万世橋方面からやって来たんで

しょう？」

「それなんです、もはや保兵衛さんがどこにいるかも見当がつかないので、年数だけを念頭において、手身近な場所から超越してみただけなのです」

「神田万世橋が手身近な場所だったというわけ？」

「ええ、とある塾に時々顔を出しているのですが、今日もそこへ向かう途中だったのです」

「ひょっとして、神田連雀町は由井正雪の軍学塾では？」

「お察しのとおりです」

「ああ、やっぱり今日会えてよかった……」

(39) 人生をたった一つの希望に託してはいけない！

十一時を過ぎていた国電山手線は、ようやく乗客数が減り始めていた。初めて乗る電車に、海念は多少の戸惑いが隠せなかった。特に会話をも妨げる車両の放つ轟音がなじめないようである。海念の生きる江戸時代に、こんな音を放つものがなかったせいであろう。

「はい、品川に着きました。ここで乗り換えます」

「えっ、もうあの品川に？ 歩けば一時(いっとき。およそ二時間)以上もかかる距離だというのに恐ろしく速い乗り物なんですね」

神田、品川間をほんの十分少々の時間で移動できたことに海念は驚いた。

二人は品川で降り、高架橋を渡り京浜急行のホームに向かった。保兵衛のアパートのある大森町まで行くには、途中、特急を利用することができた。しかし、保兵衛はあえて各駅停車を選んだ。「この駅を出るとすぐにあの東海道の品川宿に沿って進行してゆきます。窓の外を目を凝らして見ていてください。夜景だからわかりづらいでしょうけどね」

「ほおー、そんなふうには走っているんですか。それは楽しみだ」

各駅停車の車両にはわずかな乗客しか乗っておらず、座席は十分に空いていた。だが二人は、外をながめる目的で左側のドアのそばに立っている。

やがて電車は、半円型をした重厚なつくりの八ツ山鉄橋に差し掛かっていた。

「海念さん、もうすぐ東海道品川宿にさしかかります。ほら、左側一帯の家並がここよりも低くなってるでしょ。江戸時代には海だったからです。あの赤い光が見えるでしょうか。火力発電所の煙突なんですけど、あの方向にわたしは子どものころ住んでいたんです」「信じられない光景だ……」

「さあ、今度は右側に移りましょう。当時は東海寺の境内であったあたりの変化がうかがえますから」

電車は、品川宿の始まりとなる旧東海道と斜めに交差して進み、やがて静かでつつましい北品川駅に止まった。ホームには人影もなかった。

「前回海念さんがこちらに超越してきた時、ほらあの赤坂見附であった時ですよ。あのころのわたしは、この駅から高校に通っていたのです。もう随分昔のころのように思えますが」

動き始めた電車は線路際まで迫るように密集した人家を通過しながら、やがて次の駅、北馬場駅に近づいていた。

「海念さん、この家並の切れ目の踏み切りで小高い山が見えるからよく見ていてください。今は品川神社となっていますが、その山の向こう側が東海寺だったわけです」

電車は北馬場駅直前で、遮断機が閉まり警報音が鳴る踏み切りを通過した。その踏み切り通過の一瞬、この時刻でもクルマの往来が激しい京浜第一国道がのぞけ、その向こう側に、国道に面した小高い山が仰げた。ほどほどの樹木で覆われた山であり、富士を模した地肌の頂上が目に飛び込んできた。正面には大きな鳥居の構えがあり、神社へと通じるやや広い階段が上方へと消えていた。一瞬の間ではあったがそれらの光景が二人の目に映るのだった。

「ここがあの場所なんですね……」

ホームに停車している間、二人はドアのガラス越しに品川神社方向に黙って向いていた。駅の建物で陰となりその光景が見えなくなっていたにもかかわらず、見つめ続けているのだった。恐らく、二人はあの沢庵和尚が健在だったころ、自分たちがまだ十歳ほどの子どもであったころの輝く鮮明な光景に向かって、はるか視線を投じていたに違いない。

『叶うものなら、もう一度あの時に戻ってみたい……』というそんな言葉を二人がともに押し殺していたのかもしれない。

人影がなく閑散としたホームを出た電車は、ほどなく目黒川の鉄橋を渡っていた。

「海念さんの実家はこのあたりのはずでしたよね」

「そうかもしれません。親不孝なわたしは、出家以来うちには戻っていないのです。母上も妹も健在であることを祈るだけです……」

静かな口調でそう言った海念だったが、やや沈み込む気配が保兵衛を心配させた。

「海念さん、どうかしたんですか？」

「いや、超越酔いとでも言うんでしょうか。禅僧がいまさら口にするのもとんだ御笑いですが、人間の生のはかなさや無常が込み上げて来たようなんです。出家当時のこと、それ以前の父上とのこと、そして沢庵和尚のこと、みんなあつという間に過ぎ去ってしまった。そして今、時空を超越しているこのわたし自身も、尋常ならば三百年も以前にとくに露と消えているのですからね……」

「海念さん、超越酔いには下腹に手をあてて、深呼吸しましょう。いいですか、ひとつ、ふたつ…… ふっふっふっ」

「何と、それはあの時のわたしのせりふじゃないですか。はっはっはっはっ」

零時近くなった大森町の駅前商店街は、すでに多くの店がシャッターを閉めていた。

保兵衛と海念は、かろうじて開いていたラーメン屋で熱いラーメ

ンをすすってからアパートへ向かった。管理人部屋を改造したような入り口に面した小さな部屋が保兵衛の部屋だった。

「こんなところに住んでるなんて驚いたでしょ。前に住んでいた住人も貧乏学生で、四年間ずっと住んでいたと聞いた時、何て辛抱強い人なんだと思ったりしたもんだ。だけど、どうもわたしもそうなるとような気がしている」

「それでいいんですよ。雨露がしのげて、睡眠がとれればそれで十分じゃないですか」

「そうだよな。さてと、コーヒーでも入れましょうか」

保兵衛は玄関の外にしかない水道まで水差しの水を入れ替えに行った。ついでに、催涙ガスのなごりでまだ異物感のある目を十分に洗った。顔を拭きながら戻った時、海念は天井付近に掲げた大きな帆船の写真をしげしげと見つめていた。

「白くてきれいな船ですね。何か下に記してあるようだけど何と書いてあるんです？」

「英語といって外国の言葉なんだけど、意味は、『人生をたった一つの希望(hope)に託してはいけない。あたかも、船舶をたったひとつの錨(anchor)に託してはならないように！』ということでしょうか。何だかちょっと気に入り始めている言葉なんですよ」

「ほおー、意味深い感じの言葉ですね……」

「いろんなことを暗示しているようです。真面目な人ほど一途に思い込みがちですよ。わたしが真面目だというのじゃありませんよ、一般論としてね。力を集中して事に当たることは重要であり、それでこそ十二分に持つ力を発揮できるとする考え方もわかります。日本人はどちらかといえばこうした傾向が強いのかもしい。

これに対して西欧という海外では、人生を実際的な行動を軽視しないで考えているのでしょうか、あるいは現実的に対処しようとしているのでしょうか、常に代替案という、本命の案や願いなりが崩れ去った時に備えた別の案や希望を持つことを勧めているようです。とっかえひっかえ思い込みの対象を替えていってしまう移ろい

やすい人にはお勧めできない言葉ですが、たぶん海念さんには適した言葉なのかも……」

「……保兵衛さんのおっしゃりたいことがわかります。由井正雪先生に関することですよ。」

保兵衛は余りにも的のど真ん中を射抜いてくる海念の洞察にドキッとすのだった。ポットで沸いた湯をコーヒーカップに注いでいたその手が一瞬止まるほどであった。

「さすがに海念さんは鋭敏だなあ……ここでなら何を話しても大丈夫なので、早速わたしがこの一、二年の間心配し続けてきたことを聞いてください。」

コーヒーカップを海念に差し出しながら、保兵衛がそう口火を切った。

「保兵衛さんがわたしを心配してくれている理由がそこにありそうだということは薄々気がついていました。夢が知らせてくれていたようです。」

「夢って？」

海念は、自分が内藤新宿で見た夢を、思い起こせる限り詳細に保兵衛に説明するのだった。

「そんな奇妙なことが実際にあるんだ。ほぼそのとおりなんですよ。単刀直入に話します。ところで海念さん、海念さんの時代では今年は何年なのですか？」

「なぜでしょう？慶安三年の年が明けたところですが」

「やはり。もう一刻の猶予もないということなんだ。由井正雪は、慶安四年(一六五一年)の七月、幕府転覆の謀反企ての咎(とが)で役人の追手を受け、郷里駿河へ向かう途中、追手に囲まれた宿で切腹自害に追い込まれています。そして、丸橋忠也ら主だった門下生が鈴ヶ森でただちに処刑され、さらに連累者二千名以上が咎めを受けたとあります。後世には、慶安の変、由井正雪の乱として初期幕府時代の一大事として伝えられているのです。それが来年の夏のことなんですから。」

「……………」

この目前に迫っている冷徹な歴史的事実を宣告のように耳にして、海念は堅く目を閉じ、やや青ざめた表情となるのだった。「わたしが心配しているのは、もちろん海念さんのことです。かねてから幕府に対して言い知れない思いを抱いているに違いない海念さんの人生以外ではありません。もはや、そのこと以外の事実はすべて動かしがたい歴史的事実となって凍りついているのですから…… 海念さんは、由井正雪に近づいてはいけません。幕府の御政道批判を行い、浪人たちの信望を集めている由井正雪に魅了され、つまらない犬死への道を絶対に選んではならないということなんだ」

海念は、保兵衛をまねるように砂糖もミルクも入れないコーヒーを淡々と口にしていた。鋭い視線は壁にむけられていたが、もはや心ここにあらずといった茫漠とした気配を漂わせている。やがて、ぽつりと呟いた。

「やはりそうだったのですね……」

保兵衛はコーヒーカップを持ったまま黙って、心配そうに海念の顔を覗き込んだ。

「保兵衛さん、ご心配かけて申し訳ありません。今のわたしは、あの絵の言葉のように別の錨を見出すには至っていません。しかし、由井正雪先生に託しかけた思いが、わたしの心の中で既に終わっていることだけは自覚しています。たぶん、後世の方々も検証されているのですが、正雪先生にわたしは人格の破綻を見て取っています。幕府にそこまでつけこまれ、利用されることになるとは想像外でしたが、事を成就する者としての人格のあり様が沢庵和尚とは比較にならないと感じていたのです。」

これを聞き保兵衛はほっとした表情で醒め始めたコーヒーを飲み干した。

「それで、海念さんは今、軍学塾とはどのように関わっているのですか？」

「ええ、そこなのですが…… 実はいまだに関わっています。今日も出向く途中でした。それというのは、親しくしております正直なご

浪人二人のためなのです。そのお二方は、正雪先生へのわたしの懸念を申し述べてもなかなか同意してもらえないものですから……」

海念は、気の置けない中村小平太と諏訪十三郎への気掛かりと、知り合うこととなった一連の事情を、保兵衛に順を追ってすべてを話した。

「そうかもしれませんね。浪人たちにとって、由井正雪の存在は、溺れる者は藁をも掴むの心境であるに違いありません。それこそ、ほかに何の錨も見出せない実情なのでしょうね。そんな現実こそがこんな老獪な幕府による罫を着々と進行させてもいるのでしょう。長い目で見れば、浪人という立場よりも、武士というあり方自体が不自然さを深めてゆくのですけどね。その錨が見えてくるのはずっと先の話ですが……」

この事件については後世でもいろいろと推理されています。わたしはどうも知恵伊豆こと松平伊豆守信綱が後で糸を引いていたという説に強い関心を向けています。事実関係としても、この事件の後、由井正雪らの謀議を密告した褒賞として知恵伊豆の家来三人が御家人に取り立てられているのが目を引きます。

おそらくは、幕府にとって危険な四十万人ともいわれる浪人たちと、これまた幕府にとっては煙たい存在である紀州公と抱き合わせにして牽制するといった、知恵伊豆ならではの謀略だと思えてならない。しかし、とびっきりの謀略だけに当然のごとく証拠が残されていない。せめて老中松平伊豆守信綱の具体的な言動の一端が掴めれば、そのお二方に目を覚ましてもらう説得材料になるんでしょうけどね……」

「……………」

一月半ば過ぎの深夜はやはり冷えた。保兵衛は、安物のウィスキーを押し入れから取り出し、お湯割りを二つ作った。琥珀色の湯から湯気が立ち上り、甘いアルコールの香りが部屋に立ち込めた。

と、その時海念がまたまたぼつりと呟くのだった。

「明日、あの品川神社あたりを見物してそこから江戸時代に戻ることにします。その際、幕府膝元の東海寺に寄ればひょっとしたら何か情報が掴めるやもしれません……」

(40) 白銀で被われた眩い東海寺は海念の前途を祝福する？！

慶安三年一月十九日の東海寺境内一帯はすっかり白銀で被われていた。雪は止み、午前の陽がまぶしく辺りを輝かせている。徹夜をした海念にとっては、辺り一帯が白く輝く光景は目がくらむ思いだった。

前日、江戸は神田から時空超越をした際に、江戸の街には小雪が舞っていたことを海念はふと思い出した。

『一晩で随分と積もったものだ……』とひとり言を呟き、冷えた空気を感じてか襟元を閉じるのだった。

寺へ通じる道には、早くも足跡が踏み込まれてあった。寺を訪れた者ではなく、寺の者が早朝から修行に出たものであろうと、海念はそう思った。その足跡に沿いながら海念は寺へと向かうのだった。

歩みながら海念は、一晩中ともに話し込んでいた保兵衛のことを思い出していた。

北馬場駅で別れる際の、耳に残り続ける言葉をよみがえらせた。

『海念さん、自分の心に振り回されないように！目先の歴史の肥やしになってしまわず、もっと先を眺望して動くんのだ！』

保兵衛は語気を強めてそう言い、今日も御茶ノ水にある紛争中の大学へと向かって行った。昨晚の話からすれば、その言葉は、保兵衛自身が遭遇している大学問題に対して、保兵衛が自分自身に言い聞かせようとしていた言葉でもあったのだろう、と海念は

思い返す。

『自分の心に振り回されない』という点については、二人は昨晚、執拗なほどに議論を続けたのだった。

煮詰まっていた議論で二人が行き当たった問題は、いわば「私憤」と「公憤」との関係をめぐるいかにも悩ましいことがらであった。

『海念さんが浪人たちの苦境に思い入れをし、幕府権力の横暴を糾したいと願うことは間違っていないと思う。由井正雪もその点では正しい。だけど、同じ立場同士の喧嘩とは違って、相手が権力の権化であれば対応する方法こそが大事な問題に違いないと思う。この点で苦悩されたのが沢庵和尚だったと思うんだ。そして、きっと和尚が事を成す方法で細心な注意を向けられたのが、ご自身に潜む 私憤 の有無ではなかったかと思う。これに引きずられてゆくなら、事を成就するための方法に破綻が訪れることを十分に警戒されておられたからだと思う』

『確かに、そのとおりだとわたしも見ています。和尚の家光將軍への処し方がそうであったと同時に、武道に託して柳生宗矩様のために書かれた 不動智神妙録 で和尚は、何につけ心をとめてくだわることが無明や煩悩のよってきたるところだとおっしゃられていますからね。ただ、このわたしに 私憤 があると？』

『修行を続けた海念さんにはもはやないとは信じますが、幕府の浪人政策に対する憤りの根底に、もしやお父上のことが……』

『……………』

『気に障ることを口にしてすみません。由井正雪先生には人格の破綻が見受けられると海念さんは言われましたよね。わたしが思うに、由井正雪は、染物職人の子として生まれ脚光をあびるまでには苦難の道を歩んだそうだけど、ここから 私憤 を跳躍台として生き続けた人と推測させられるんだ。それ自体は悪いことでは決してないのだけれど……』

『そうかもしれませんが。正雪先生の語り口には、御浪人たちの鬱積する思いに呼びかける不思議な響きがあります。おそらくは自らが

同じ体験した人だからなのでしょうね。しかし正雪先生には、そうした部分とまったく歩幅の異なった虚飾としか思えない姿が並存しているのです。それをわたしは人格の破綻と表現したのです』

『権力との闘争にあっては、公憤 であってさえも十分ではないでしょうに、私憤 をまじえるなら必ずどこかで挫折すると思うんだ』

『たぶん、最初、正雪先生に関心を向けたわたしには、保兵衛さんが懸念される 私憤 が淀んでいたのかもしれませんが……でも安心してください。できるだけ早くあの塾からは離れるようにするつもりです。そのためにも、あの二人を説得できる材料を入手したいのです。蛇に睨まれた蛙自体を助けることは無理でしょうけど、蛙に寄り添っている善良な方たちだけは救わなければなりません……』

寺の正面玄関前の一帯、そして庭へ通じる敷石などはしっかりと除雪されてあった。寺の懐かしい佇まい全体が、海念の感情をじわっと揺さぶる。思わず目元が熱くなる海念であった。これで和尚が健在であったなら……と一瞬とりとめない思いもよぎるのだった。

「お頼み申します」と張りあげた海念の声で、まもなく見知らぬ若い僧が現れた。海念は、手短に自分について説明し、世話になっていた兄弟子創円(そうえん)に取り次いでもらいたい旨を告げるのだった。

玄関の前に立ち尽くす海念の前に、やがて創円が現れた。「いやー、海念。たくましゅうなられたものだ。そろそろ戻ってもよい頃かと案じておったが、まあまあ話はあとで聞くとして、まずは古巣にお上がりなされ」

海念は客間に通され、茶まで出してもらった。かつて自分が仰せついていた知客(しか:客の応接係)である同い年くらいの若い僧によってであった。

「で、各地での修行はいかがであったかな」

創円はおとうと弟子の手柄話を早速にでも聞いたそうに、微笑した顔を海念に向けるのだった。海念は、丁寧に挨拶をし直したあと、思いつくままに修行歴を話すのだった。創円は、そのひとつひとつを「そうか、そうか」とうれしそうに頷いて聴いていた。「なるほどのう。禅の道とはそもそも人の生きる道、世俗での人の生きざまが前提でもある。やはり、幼くして出家してしまった海念にとっては、世俗もまた良き修行の場となっているようだな」

創円の話は、和尚遷化後の海念の虚脱状態だった頃の話に転じ、そして和尚が健在であった頃の回顧話へと向かってゆくのがあった。

「当時、この寺は和尚の張りつめた気合で満たされていた。また、家光將軍を初めとして訪れる方々もその気合で魅了されていたものだったはずだ。今がそうではないと言いたくないが、やはり変わった。家光將軍もとんとお出でにならなくなった。もっとも今はお身体がご不調だとも聞き及んでおるが……」

「それは心配なことでございます。ところで、今でもなお幕府ご重臣の方々が訪れることはおありなのですか。当時は頻繁にお見えになっておられたと記憶しておりますが、どのような方がお出でなのでしょうか」

「いやはや、ここだけの話だが、沢庵和尚不在となってからはろくでもない御仁しか顔を見せなくなったものだ。権力面(づら)を忌み嫌った和尚の前には顔も出せなかった連中ということだな」

「たとえば、どんな方々なのでしょう」

「名を申しても始まらんが、世間では知恵伊豆とか称されている松平伊豆守信綱殿が……」

海念は一瞬息詰まる思いがした。あまりにも凶星な自分の推理に驚き入ることもあった。が、他意があるわけではなかったが冷静さを装うのだった。

「松平伊豆守信綱殿が、また何か『知恵』を發揮せんとしてか、しばしば家臣の方々と密談すべくここをご利用されたりしておる始末だ。知客(しか)の僧が密かに伝えるところでは、今、江戸市中でも

人気を博しておる由井正雪とか申す学者の動向について語っておったとのことだ。まあ、どうでもよいと言えどどうでもよいのだが、わしはどうもあの身体中からはかりごとの気を発しているごとき知恵伊豆には気が許せんのだ。いやいや、つまらぬ話をしてしまった。さて、海念、このあとどうしたいかは別として、しばらくは当寺にて修行してゆくがよかろう、よいな」

「はい、ありがたきお言葉でございます。人手の不足する作務(さむ:修行としての労働)などをお手伝いさせていただきご恩に報いたいと思っております」

海念は、即日他の修行僧とともに古巣の東海寺での修行生活を開始した。各地の寺での修行で培った成果が他の僧侶たちの目を引くこととなった。また、掃除、薪割り、風呂焚きなど八面六臂(はちめんろっぴ)の身を惜しまぬ作務での意気込みが、次第に他の僧侶たちからの信頼を勝ち得てもいったのだった。

海念の行動は決して偽りであったはずはない。ただ、海念に密かな思惑が隠されていたのは事実である。知恵伊豆は必ずやってくる。加えて、この寺では油断のあまりぬけぬけとその知恵袋のほころびをも見せてはばからないだろう。

そして、ついにその日が訪れたのだった.....

(41) 知恵伊豆とともに悪知恵を働かす者たちの密談！

「そうだったのですか。当寺で沢庵和尚がご存命の折りに出家されたのですね。でその時、海念さんは何歳でございましたか」

「まだ十歳の子どもでした..... 沢庵和尚にはご迷惑ばかりおかけしておりました」

日陰にはまだ雪が残る境内であった。その一角で、海念と、この東海寺には新参の同い年の修行僧清信(せいしん)は、作務として薪割りの作業に精出していた。清信は、海念が東海寺から出

て、各地の寺へと修行に出たその後に入山した修行僧であった。まだ一年とは経っていない模様である。

「では、海念さんが当寺で修行される間は是非沢庵和尚のお教えをいろいろとお聞かせください。あっそうでした、本日はお客様がお出でになられる日なので、わたくしはそろそろ用意をしなければなりません」

薪割り作業でかいた汗を拭く海念の手が一瞬止まった。

「ほお、お客様というと……」

「もう何度もお見えになっている幕府重臣の方々です」

「ひょっとして松平伊豆守殿のことですか」

「はい、海念さんをご存知だったのですか。伊豆守殿とご家来衆の合わせて四人の方々が一ヶ月に一度、ご親睦の名目でお見えになり何やらご相談のような会合を持たれています。」

「ほお、そうなんですか。いや、和尚ご存命中には將軍が、諸侯や重臣の方々を引き連れてしばしばお出でになられたものです。当時、幼かったわたしは、それも修行のひとつだと言われ知客(しか)を務めさせていただいたものです」

「はい、わたくしも現在新参僧として知客(しか)の務めを仰せつかっております。が、どうもあの方たちの醸し出す空気は好きになれないので困っております……」

「清信さん、懐かしいこの寺に戻ってきたことでもありますし、本日はこの海念が久しぶりに知客(しか)の役を務めましょうぞ」

「さようですか。それはありがたきことでございます。そうしましたら、残りの薪割りはわたくしが一人で済ましておきます。もう半時ほどでお見えになるはずです」

海念は、知恵伊豆の尻尾を必ず掴んでやるという思いでじわじわと身体を熱くさせていた。胸が高鳴るのを心して抑えるのだった。そして早速準備を始めた。

井戸端で身体の汗を拭って、衣を着替えた海念は、創円に知客の役の交代を話しに向かった。

「来客の方々の人品を見定めれば、この寺のこの間の推移もわかるうというものだな」

創円は、「好きにするがよかろう」と微笑んでくれた。ついでに創円は、粗相のないようにと言って、『来客覚え書き書』なるものまで海念に渡すのだった。

これを別室へ持ち帰った海念はすぐさま確かめてみた。そこには、月例の親睦を目的とする精進会食という主旨が記されており、出席者四名の姓名までが記載されてあった。念のために海念は素早くそれらの名を懐紙に転記する。

まがいもなく、筆頭に松平伊豆守信綱の名があった。そしてその家臣である佐川角兵衛、同じく奥村権之丞(ごんのじょう)、そして浪人者なのであろうか、これといった但し書きのない林理左衛門、という計四名の名が列記されてあったのだ。また、この会合が既にほぼ一年近くにもわたって続けられていたこともわかった。謀略を進めるにふさわしく用意周到な手はずだ、さすが知恵伊豆のすることは思いつきではないようだ、と決して見くびれない人物の姿を密かに想像する海念なのであった。

とその時、唐突に言い知れない不安が海念を襲ってきた。それは、一瞬、正雪の軍学塾講堂で見かけたどこかの家臣らしき武士の姿が脳裏をよぎったからである。もし、その彼らがここに名を連ねる客の誰かと同一人物であったら.....という不吉な予感、しかし大いにあり得る直観が、海念をこの時点で不安な心境へと陥れたのである。

さて、自分は常に講堂の最後尾の列に席を取ってきた。そして、講釈終了時にはいち早く外に出てかぶり笠を身につけてきたはずだった。顔を知られたり覚えられたりしたことはなかったはずである。そうだ、決してそんなことはなかったに違いない..... おまけに、あの講堂で聴講していた僧侶はわたし一人ではない。そう思い返し、必死に不安を鎮める海念であった。

うかつであったこと、どこかで功を焦っている浅はかな自分を嘆く海念でもあった。だが一方で、直前ではあっても、極めて肝要なこ

とに思いが至ったことに安堵感も得るのだった。

やがて幕府の客たちが寺の玄関に到着した。他の僧侶たちとともに出迎えた海念は、思わず冷や汗をかくことになってしまった。四人の客の中の最後尾に、衣装こそ羽織袴の正装をしているが、確かに軍学塾講堂で何度か見覚えのある武士がいたのである。講堂では後から、横顔しか見ていなかったが確かに見覚えがあった。『来客覚え書き書』の林理左衛門なのだな、と海念は押し量った。幸い、玄関でその武士と視線を交えることはなかった。最悪の事態が訪れたら、慇懃に突き放すまでだと腹を決めるしかない海念であった。

それにしても、知恵伊豆と思しき高齢な人物は、笑みを含まず表情を崩さない面持ちといい、鈍い所作ではあっても隙と無駄のない身体運びといい、まさしくその姿は老獺としか言いようがないと、海念は思った。あわせて、これまでに誰からも受けたことのない言い知れない寂寞(せきばく)としたものをも、海念は感じ取るのだった。

四人の客は、海念の案内によって客間へと向かった。海念は、各々の席に着くのを見定め、廊下に座してお辞儀をして障子を閉めた。先ずは、茶を運ばなければならないからであった。

海念が盆に茶を載せ客間に戻った時、既に四人の会話は始まっていた。

「ますます講釈に込める正雪の幕府批判の度は強まっているかに思われます。伊豆守さまのお耳には入れられないような言葉までが飛び交い、聴講者も煽られている模様でございます」

「林、もう一般談義はよい。そちとそちの仲間の者は正雪直下の門弟たちからの信頼を勝ち得るところまで食い込めたのであるか？」

「はい、その一……」

「いや、伊豆守さま、その点につきましては奥村殿の弟御八左衛門殿の役割かと存じます。八左衛門殿は、われらのことを知らず、

今では正雪からの信頼厚い槍の丸橋忠弥の押しも押されもせぬ門弟と成りきっております」

「しかし、佐川、当の八左衛門が真に正雪に魅了されてゆく心配はないのか」

「その点は心配ご無用かと存じますが、のう、奥村殿。ああ、坊主、茶を置いたらこちらで呼ぶまでは来るには及ばぬぞ。」

ちょうど茶を配り終えたところで佐川角兵衛が、海念に向かってそう言った。一瞬、他の者たちの視線が海念に注がれた。が、伊豆守の張り巡らす緊張した会話にそれぞれが気を取られているらしく、視線はすぐに解かれるのだった。まして、浪人林理左衛門は、伊豆守の顰蹙(ひんしゆく)を買ったと見え、うろたえ気味でさえあったので知客(しか)どころではなかったようだ。

海念はほっとして客間から下がることとなった。がそれよりも、この会合は、確かに知恵伊豆による由井正雪を使う謀略の密談、しかもその謀略の進捗会議であったのだと確信することになったのである。その、予想を越え、周到に張り巡らした知恵伊豆の正雪包囲網対策に愕然とするのであった。

知恵伊豆は、密偵のように浪人者を忍び込ませるだけでなく、家臣の奥村権之丞の弟八左衛門を自らの意志で正雪に近づかせ、それを後に刈り取る算段までしているということなのだろう。これでは、正雪はまるで釈迦の掌(たなごころ)の上で走り回り、飛び回っている孫悟空にしか過ぎないではないか。知恵伊豆と正雪とでは、まったく役者の大きさが異なっているではないか。海念はそう感じるのだった。すでに醒めた評価を下してしまっていた正雪に加担するわけではないにしても、知恵伊豆の目論見を破綻に追い込みたい衝動に駆られるそんな海念でもあった。

客たちから指示を待つべく、海念は客間の隣の部屋で待機することにしたが、それは彼らの会話を盗み聞きできる絶好のお膳立てでもあったのだ。座禅の姿勢となり、海念は聴力に全身全霊を

傾注した。謀略を形づくるさまざまな言葉のかけらが海念の耳に飛び込んだ。

それらを繋ぎ合わせると、保兵衛が話していたように、知恵伊豆が目論んでいるのは、幕府にとって目障りであり危険でもある大量の浪人たちを処分し、二度と反乱を起こさせない仕掛け作りであるに違いなかった。そしてさらに、二兎を追う欲張った筋道まで考えている模様であったのだ。つまり、幕府内権力の二番手落としとも言えるような、紀州家の追い落とし策である。これは、紀州公との関係を虚実判別し難く語る正雪の山師的な言動を、いわば逆手に取るという謀略なのである。謀略のそんな大枠が、海念の頭の中に次第に整理されていくのだった。

しかし、本当に海念が欲しかった情報は、そうした大枠の話ではなかった。たとえどんな小さなことでもよかったが、近々彼らが手を下す実際的で明白な行動計画であったに違いないのだ。それを、あの浪人二人、気の置けない中村小平太と諏訪十三郎に伝えるならば、如何に正雪に魅了されている二人といえども、背後に潜む大きな罍の存在に気づかざるをえないような、そんな情報こそが何としても欲しかったのである。

とその時、浪人林理左衛門の上ずった声が海念の耳に届いた。「正雪の人気のひとつは、『蝦夷地大開拓案』だと思われます。浪人たちの多くもこれに期待をかけており申す。これが取りざたされる限り、正雪と幕府転覆計画というわれらが本命の関係の信憑性が濃くならないのではありますまいか、伊豆守どの！　そこで、拙者たちがこの『蝦夷地大開拓案』なるものを処分いたす。先ずは、正雪の講釈への質疑において、この案の非現実性を徹底的に攻撃いたしましょうぞ。」

海念は、これだ！　と思った。この浪人林理左衛門による挑発の行動を事前にあの二人に伝えれば、こうした背後の動きを信じてもらえるに違いないと。

新たな謀略に関する会話は続いていた。

「林、そなたもわれわれが見込んだだけあって、悪知恵が働くではないか。如何でございましょうか、伊豆守さま！」

「わかった。浪人たちの頭から『蝦夷地大開拓案』なるものを速やかに消し去るがよかるうぞ」

(42) 権力欲の獣たちの餌食になんかさせるものか！

慶安三年の二月初旬のある日、江戸市中は木枯らしが吹き荒れていた。冷たい空っ風が道を往く人々の背を丸めさせている。また冬の北風は、それに加えて江戸ならではの恐怖、大火への心配をも人々の胸の内に呼び起こしていたに違いない。江戸の冬二月は不吉な前兆に満ちた季節なのであった。

中村小平太と諏訪十三郎が、由井正雪を見限るはずの情報を手にした海念は、品川東海寺から神田へと早々に戻っていた。と言うより、上野の古寺と言うべきであった。修行寺を訪れない日々には、身分柄出費を惜しみ、野宿同然の環境である住職なき古寺に寝泊りしていたのである。

古寺の中は、壁が剥げ落ちた隙間から差し込む月明かりだけの暗闇である。ビュービューと吹きすさぶ外の木枯らしの音がいやでも耳に入ってきた。

海念は、ギシギシと傷んでいる床に、修行寺で使用する二つ折りにした薄手の布団を広げ、これに挟まるようにして横たわった。まさしく雨露がしのげ睡眠がとれさえすれば言うことはないと思っていた。さて明日はどのような行動に出たものだろうかと思案した。

中村小平太殿宅を訪問することも考える。しかし、それでは、すでに神田近辺に裏長屋を借りていた十三郎への手はずが遅れてしまう。

『そうだ、正雪軍学塾がある神田連雀町にて、托鉢がてら彼らの到来を待つこととしよう。』と思い定めるのだった。やがて海念はいつ

しか寝息をたてて寝入った。

正雪が講釈を始めるいつもの時刻を見計らい、海念は神田連雀町の軍学塾へと通じる木戸番の向かい側に立った。二人は必ずこの木戸番を通るはずであった。しかしもはや、知恵伊豆の密偵、林理左衛門に顔を知られた海念は、かぶり笠で顔を隠すことが必須であった。日陰の位置から、陽が指す木戸番方向に注意を向けながら海念は托鉢を始めた。

托鉢とは、僧侶自身の修行であるとともに、「喜捨」によって人々が悟りへと一歩近づくという意味を持つ衆生の救済でもある。大通りを往きかう者たちの数少ない者が托鉢ばちに小銭を喜捨していく。

ほどなく、懐手をしつつも隙のない足どりの十三郎の姿を、海念は左手の遠方に見てとった。海念はゆっくりとその方向へと歩み始める。

「ご喜捨くださいませ」

と海念は十三郎に話しかけ、かぶり笠を軽く上げた。

「なんだ、海念さんではないか。ここしばらくお見受けしなかったがどうなされた？」

「今日は折り入ったの急ぎのお話があります。お手間はとらせません。正雪先生の講釈が始まる前に、中村殿とお二人にお耳に入れたきことがございます。中村殿がお見えになられたら、ひとつ下流の和泉橋付近にお出でございませ。わたしはそこでお待ちいたします」

それだけのことを、海念は口早に伝えるのだった。

「仰々しく何なのじゃあ。いつもの海念さんらしくないのう。いや、わかった。和泉橋だな？ 中村殿をその木戸番近くでお待ちしてとにかくうかがおう。しかし、妙な海念さんじゃのう」

十三郎は、首をひねりひねり木戸番方向へと歩いていった。

和泉橋は、大川に流れ込む神田川に掛かる橋で、万世橋のひとつ

つ下流方向にあった。連雀町から万世橋ではあまりに近すぎて、軍学塾関係の人目につき過ぎると思えたからなのである。

やがて、和泉橋近くで托鉢をする海念を、十三郎と小平太は見つけた。二人はいそいそと海念に近寄るのだった。

「海念さん、何事ですか？」

いぶかしげな顔つきとなった中村小平太が、この文脈を察してか幾分ささやくように言った。

「急なことで申し訳ありませんでした。」

「まあ、それは良いとして急ぎの用件とは何事でござる？」

「先生の講釈が始まる時刻でしょうから、手短かに申し上げます。本日、もしくは一兩日中に、知恵伊豆が放っている密偵、林理左衛門と申す浪人者が塾にて不穏な動きを仕出かすとの情報をつかみました」

「な、なんと！」

十三郎は思わず大声を出した。小平太が、十三郎の袖を引きそれを諫めるのだった。

「して、その不穏な動きとは？」

「正雪先生ご研鑽の『蝦夷地大開拓案』を塾生たちの前でこき下ろすとのことでございます」

「なんだ、左様なことか。不穏なと申すから拙者はてっきり刺客かと思うたわ」

十三郎はあきれのような素振りをした。しかし、小平太の顔は曇っている。

「『蝦夷地大開拓案』をな……何か仔細がありそうですね」

「もう暇がないでしょうから、後ほどゆっくりとお話したいと存じます。それで、お願いしたきは、本日はくれぐれも目立たぬように身を処していただきたいのでございます。まかり間違っても、浪人林らの挑発で口論に加わらないように……」

「わかった。だが今、林らと言われたのう？」

「そうです。林理左衛門には人数は不明ですが仲間がいます。ほかに知恵伊豆の配下の者である奥村八左衛門という侍が、丸橋

忠弥殿のもとに送り込まれております」

「えっ、まさか。あの奥村殿が知恵伊豆の？それは間違いでござる」

十三郎が驚いた。十三郎は居合切りの腕を買われ、槍の丸橋忠弥の道場に入入りし始めていたのだった。

「いや、わかった。これだけの情報となれば、海念さんには然るべき確信がお有りなのであろう。十三郎殿、本日は海念さんのおっしゃられる通りにしようではないか。」

不服そうな十三郎を、小平太はまたしても諫めるのだった。

「で、海念さん、後ほどの話は、拙者宅でよいか。では、静がおるのでひと足先に戻ってはいはくれまいか」

「それでは」

そう言い残した海念は、静かにその場を離れるのだった。

小平太宅では、静がいつもどおりに海念をうれしそうに迎えた。ちょうど、直太郎を部屋に上げ習字を教えているところなのであった。

「海念さん、やはり直さんはたいそう物覚えが良いのでございますよ」

静が「やはり」という言葉に込めた「お武家の血筋を引いて」という含意を、当然ながら海念は了解するのだった。

「ほう、直太郎、ではこのわたしにも書いたものを見せてくれまいか」

「はい」

直太郎は、小机の前に正座していたが、左脇に書きためた半紙を小机の上に並べた。そして、あかぎれとなった小さな手で、墨が乾いて縮む半紙を丁寧に伸ばすのだった。

「おうおう、りっぱに書けているぞ。大したものだ」

直太郎は、満面に笑みを浮かべ胸をそらすようにして喜んでい

る。
「おや？ この小机は直太郎にちょうどよい大きさだなあ。このよう

な童用の小机があるんですねえ」

「直さん、海念さんにご説明しなければね」

「はい。この机は父さんがおいらのために作ってくれたんだあ」

「そうだったのか。これもたいそうりっぱなものだ。さすが頭(かしら)の腕は大したものだなあ」

「父さんに伝えておきます。父さんも海念さんに誉められたらきっとうれしいと思う」

「はっはっはっはっ。きちんと話すこともできるようになった、頼もしいものだ」

静は、頭が直太郎を大川の川岸に連れて行って、亡き母の小さなお墓をこしらえたことも海念に話すのだった。その時、静もつき添うことになったとのことだった。そして、頭が直太郎に言った言葉を伝えながら、静は涙ぐんでしまった。

頭が言ったのだった。

『お前のかあちゃんは不幸せだった。だがなあ、直は誰をも恨むんじゃねえぞ。人を恨めば、直が腐っちまうぞ。直が腐っちまうことを死んだかあちゃんは望んじやいねえのさ。いいな、直は、かあちゃん分まで元気に生きるんだぞ。父さんは精一杯応援させてもらうからな。そうすりゃ、おめえのかあちゃんの不幸せもだんだん薄らいで行くってもんじゃねえのかな……』

海念も、静から聞く頭の言葉に胸をつまらせるのだった。いつか自身の身の上を配慮してくれた沢庵和尚や武蔵から聞かされた言葉と重ね合わせていたのかもしれなかった。

心が洗われるような気分となる中で、なおさらのこと、このような人たちの人生を権力欲のためだけの獣たちの、その餌食などにさせてなるものかと、下唇を噛みしめる海念なのであった。

(43) 知恵伊豆の密偵、林理左衛門たちによる攪乱！

「ええい、黙れ！ 言わせておけば先生に向かったの悪口雑言三

味、黙っては見過ごせぬ。おもてへ出られよ」

「よかろう」

「まあまあ、お静まりなされ」

いつもどおりの軍学講釈、『老子』の原典講釈が終えた際の出来事だった。質疑応答で立ち上がった受講者のうちのひとりの浪人が、正雪研鑽の『蝦夷地大開拓案』に疑義、いや不満と非難をぶつけ始めたのであった。

その浪人はみずからを林理左衛門と名乗っていた。浪人林の言わんとすることは次のようであった。

『正雪先生の講釈どおり、幕府の浪人政策は理不尽そのものである。その点については何の異論もない。確かに、浪人の多数はかつての反徳川の家臣であった者たちであろう。だが、勝敗が決して数十年も経つ現在、その遺恨を残すかのような冷遇の措置は天下を支配しながら、幕府の狭量自体を示すものとしか言いようがない。そうした非寛容で強権的な御政道は、返って天下の不安を誘うだけである。その点において、正雪先生による幕府の御政道批判は痛快そのものである。

だが、「蝦夷地大開拓案」は一見おびただしい浪人たちの窮状を救う妙案のように聞こえながら、それはあたかも泣く子をあやす子供騙しにしか過ぎぬ。正雪先生は真にこの案をご研鑽されているのであるか。これは、塾生集めと、幕府の目をそらすための羊頭狗肉なのではありませんまいか。

拙者の思うところを申すならば、時の幕府がただでさえ不穩な輩と見なす浪人たちを、たとえ遠隔の蝦夷地とはいえ一箇所に結集させるような危険この上ない方策を是認するとでもお考えなのか。それとも、正雪先生は蝦夷地開拓が成ったあかつきには独立国でも旗揚げされる深慮遠望でもおありなのか。

拙者は、失礼ながらこの「蝦夷地大開拓案」なるものは先生の真意を隠す隠蓑(かくれみの)だのご推察申し上げる。古来より、蝦夷地は人の心を誘う地でありましたのう。かの判官義経(ほうがんよ

しつね)が生き延びたとされてきたのも蝦夷地であった。蝦夷地とは、夢と芝居の世界なのではござらぬか。つかぬ事をお尋ね申すが、先生はあの蝦夷地へ訪れたことがおありですか。海も凍てつくと言われる蝦夷地の冬もご存知であるのか……』

これまでの聴講者からの質疑にはこのような辛らつな発言はなかった。だからこそ、講釈する正雪を守るように最前列を占めていた親衛の門下生たちが抑えきれずに威嚇の挙動に出たのであろう。

いつもよりやや遅れて講堂に入ることとなった中村小平太と諏訪十三郎は、最後列に座を占めていた。質疑を始めた浪人が林理左衛門と名乗った時、二人は背筋をぞくぞくとさせ、思わず顔を見合わせ頷き合うのだった。海念から事前に聞かされてはいたものの、いや聞かされていたが故にむしろ事態の進展がずっしりと重くまた生々しくも感じられたのだった。二人は固唾を飲んで前方を見入っていた。

正雪は、その場を何とか鎮めようとするようであった。さすがと言うべきか、手馴れた風と言うべきか内心のほどはさておき、顔色ひとつ変えない素振り押し通している。

「各々の方々、ご静肅に。なかなかの手厳しいお話でござった。林殿と申されましたな。林殿のお尋ねは、二つの点に絞られるかと拝聴いたした。その一、拙者の『蝦夷地大開拓案』なるものの信憑性について、そしてその二は、拙者の真意がどこにあるのかという点。いかがでござる、林殿」

「まあ、そうゆうことござろう」

「ではご返答申し上げつかまつる」

そうした勿体をつけて場を運ぶ正雪の処し方は、落ち着きを印象づけるとともに、何か見え透いた印象を与えていたようでもあった。

「『蝦夷地大開拓案』が幕府の賛同を得がたき方策だと仰せである。不逞の輩が一箇所に集まると不善を為すとの根拠でござった

な、林殿」

林理左衛門は大きく頷いているのが、中村小平太と諏訪十三郎たちからもよく見えていた。ほかにも二、三人の聴講者たちの頷きが確認できた。小平太は、海念の言葉を思い起こし奴らが林の仲間なのだろうと思っていた。

「これに関しても二つの点をお話申そう。まず、軍学上の問題として眺めた時、敵が一箇所に終結している場合と、全国各地に分散しその所在も掴めぬ場合とではどちらが厄介だと判断でき申そうか。確かに、孫子(そんし)の兵法では多勢の敵は分散させた後に各個撃破すべしとあるが、それは敵の所在が確認できてからの話でござろう。要するに、幕府にとってはどこにどのような意図をもって潜むか掴めぬ現在の浪人たちの所在の方が、蝦夷なら蝦夷に終結してくれるよりはるかに脅威だということなのである。したがって、『蝦夷地大開拓案』を幕府にとって危険だと見る推測は必ずしも妥当だとは思いがたい。いかがかな、林殿」

今度は、講堂内の多くの浪人たちが頷いていた。林らは苦々しく正雪を睨んだ。

「次に、幕府にとっての蝦夷地、いや未開拓地の問題についてである。もし拙者が幕府側の者だとするならば、長期的な展望ではいずれ蝦夷地を開拓、開墾しなければならぬと見なすであろう。もしこの時代に手がつけられなかったとしても、必ず将来その必要が出てくるに違いない。

して、そこで行き着くのは、誰にそれを為さしめるかという難問となるであろう。林殿もご存知のように蝦夷地の天候は想像を上回る過酷さであり、その面積も広大である。したがって膨大な数の開拓者が必要となろう。しかも、女、子どもでは間に合わず、身体に覚えがありできれば後ずさりできぬ立場や信念などを持つ者たちが最良なのである。拙者なら、現在その身を持ってあましてもいる浪人各位を推してはばからぬ立場を採るであろう。もし、時が過ぎ時の流れが浪人たちの数を自然減少させていった場合、これほどの確な任の替わりを見出すのは至難の業となるのではないかな」

そこまでを正雪が言い放った時、最前列の門下生の何人かが、したり顔をして林理左衛門を振り返った。浪人林は憮然とした素振りをくずさなかった。

正雪は、いつもの講堂の空気を回復し得たと感じたのであろうか、その応答に次第に熱を込めていくようだった。

「さて、二つ目の質疑、拙者の真意がどこにあるのかという点でござる。林殿は、『蝦夷地大開拓案』は隠蓑であって、浪人救済や幕府の御政道批判の真意は別に潜ませているのではないかと仰せでござった。拙者には、林殿が何を指しておられるのか見当が付き申さん。林殿、林殿は何を想定されておられるのであろうか。できればお聞かせいただければ話は早いと思われるが……」

突然正雪から切り返されることとなった林理左衛門は一瞬うろたえるのだった。が、やがてすくっと立ち上がった。

「ならば、お尋ね申す。正雪殿におかれては、『蝦夷地大開拓案』は誠に幕府が賛同の運びとなると確信をお持ちであられるのか。そしその実施はいつのこととござるか。三年、五年の先では間に合わぬのではござるまいか。さぞかし、ここにおられるご同輩諸氏の窮状はもはや限界に達しているのご推察する次第でござる。」

この言葉には、講堂内にどんよりとした共感の波を走らせる力があつた。そしてこの空気を追い風としようとするように林理左衛門は言葉をついでいった。

「たとえ正雪殿が、『蝦夷地大開拓案』を表看板として別の真意を秘められておられたとしても、それをこのような場でご披露なさるとはどなたもお考えではないと存ずる。ただ、正雪殿がそこまでご執心な『蝦夷地大開拓案』が、理と礼を尽くしても叶わぬ際には、その際には何かご対応をお考えなのかどうかをお聞かせいただきたい。武士として幕府に対して一矢報いるご覚悟が正雪殿にはおありなのかどうかだけでもお聞かせください。それをお聞かせいただければ、五年が十年でも耐え忍べるというものでござる。

正雪先生にご無礼な言葉の数々を吐き、誠に恥じ入っておりますが、これも浪人各位の明日をも知れぬ境遇をおもんぱかって

のこと、何ともお許しいただきたい所存でござる。」

そう言い切ると、林理左衛門は一礼を残し屈託ない様子で座すのだった。浪人林が意図したものであったのであろうか。波風を立てた林ではあったが、それらを許容し、共感さえ呼ぶような奇妙な空気が講堂内を支配することになってしまったのである。そして、正雪がこの成りゆきに何らかの締め言葉を与えざるを得なくなっていたのだった。

中村小平太と諏訪十三郎は、思わぬ事態の推移に息つく暇がなかった。小平太は、林理左衛門の小細工ながら事の運び方のそつなさにあっけにとられる思いを抱いていた。ただ、単純にも十三郎は林理左衛門に拍手さえ送りたい心境に陥れられていたのだった。

正雪は、目を伏せ腕を組み、そして耳だけは講堂内の空気を模索する窮地に追い込まれていた。そしてやがて口を開くのだった。「兵は詭道なり。この孫子兵法の言葉にて拙者のすべてをご了解されたし」

(44) 敵の恐さを知る小平太には妥当な判断ができたが.....

冬、二月の夕刻は日暮れが早かった。今で言えば午後五時前であっただろうが、もう日没が近い暮れ六つとなっていた。

中村小平太と諏訪十三郎は、両国広小路を夕日を背にして両国方面に向かって歩いている。神田連雀町から小平太宅の馬喰町へ戻ろうとしていたのだ。

「中村殿、それにしてもあの浪人林理左衛門とやらは、なかなか気合の入った御仁でありましたのう。拙者は好感を持ちましたぞ」

「.....」

十三郎の言葉に、中村小平太は沈黙を返した。十三郎は、小平太に一歩遅れて歩きながら、独り言のようにさらに言葉を継ぐのだった。

「確かに、拙者も叶うことなら蝦夷にて一からやり直してもみたいと思うてはおる。だが、どうも心の奥底でそんなことは夢だと思ってきたような気がしている。正雪先生の言葉を信じようともしてきたのだが、どこかで、現実感が伴ってこなかったのだ。

ところが彼奴(かやつ)は、多くの浪人たちの心境をぬけぬけとやってのけおったわ。そればかりか、われらの心の奥底に蠢(うごめ)いている心底消しがたい怨念をしっかりと指さしおった。確かに、確かにその通りなのじゃ。いかにきれい事を言ったとて、真に重みのある思いはそれしかない。

彼奴は、とうとう正雪先生にもそのことを認めさせおったわ。大した奴じゃ」

「十三郎殿、そなたは林理左衛門の素性を念頭に置いた上でものを言われておるのか」

いままで黙っていた小平太が、業を煮やすように言葉を吐くのだった。

「林理左衛門の素性とは？ ああ、海念さんが言っていた知恵伊豆の密偵ということですか。しかし、密偵であろうがなかろうが、さほど関係がないのではあるまいかのう」

「なんという、輕輕なことを仰せじゃ。よいか、彼奴は知恵伊豆の命を受け、正雪先生を、そしてわれらをけし掛けておるということがわからぬのか。」

十三郎は俄然不服そうな顔つきに変わった。

「彼奴が密偵だとしたら、なにがどうだというのです？」

「挑発ということじゃ」

「挑発というと？」

「わからぬかなあ。よいか、知恵伊豆は正雪軍学塾を幕府への謀反人の徒党に仕立てあげたいのじゃ。『蝦夷地大開拓案』なるものを申し出ている穩便な塾生たちであっては困るということなのじゃ。」

「なぜ、困るのじゃ？」

「だからこのう、穩便であっては召し取って磔(はりつけ)獄門の見せ

しめにはできぬじゃろうて」

「磔(はりつけ)獄門？ そこまでねらっておるかのう」

「まあよい、拙者宅にて待たれておる海念さんに、詳しい事情を聞くまでだ。で、十三郎殿、拙者はもはや正雪軍学塾へ通うことはやめることにするぞ。そなたは独り者ゆえ身が軽かろうが、拙者には娘もおる。妙な嫌疑をかけられて家族ともども命を粗末にはできんからな」

「そこまでおっしゃられるか。それでは浪人の意地はどうなる？ 泣き寝入りではござらぬか」

「もうよい。そなたが命を惜しまぬのなら好きにされるがよかろう」

「……………」

「もうそろそろお戻りになるでしょう。」

静はそう言っていれ直した茶を海念に差し出した。手習いのために来ていた直太郎は、ちょっと前にかたづけ終えて帰宅していた。「静さん、実は今日はちょっと深刻なお話をしに参ったのです。たぶん中村殿にはおわかりいただけだと思いますが…… わたしが今日なにを言おうが、どうか驚かないようにしてください」

「はい」

静は真顔となって頷くのだった。

やがて、中村小平太と諏訪十三郎が戻った。二人は、道すがらの話でやや気まずくなっていたようで、冗談ひとつ言うことなく無言で上がり框(かまち)をまたぎ、部屋に上がった。

「お先に、お邪魔いたしておりました」

海念がそう言うと、小平太はすべてを省略していきなり訊ねるのだった。

「海念さん、今回の林らの話はどこで仕入れられたのじゃ？」

海念は、その出し抜けさに一瞬とまどったものの、さもありませんと思ひ直し答えた。

「やはり、密偵の浪人たち、林理左衛門らの動きがあったのですね。やはりそうですか…… 最初に申し上げておきますが、もう軍

学塾に顔を出すことはお控えになられた方がよろしいですね。場合によっては、江戸から離れることも必要になるかもしれません」「海念さん、それはわかったので、話の出所をお教えてください」

小平太と十三郎はともに苛立つ顔つきで海念を覗き込むのだった。

「知恵伊豆自身からです」

海念は、膝に手を置き目を伏せて静かにそう言った。

「えっ、ど、どういうことなんですか？」

海念は、「実は……」と言って、東海寺での一部始終を披露するのだった。

小平太と十三郎そして、離れておとなしく座って聞いていた静も、先ずは、海念がうわさでは聞いていた沢庵和尚の、その弟子であったことに驚くのがだった。それが海念の話の信憑性をより確かなものにもするのだった。

続いて、知恵伊豆たちが浪人対策への強権的な打開策として、浪人たちによる幕府への反乱という謀略をでっち上げ、不満うずまく浪人層の出鼻を挫くという知恵伊豆ならではのたくらみについても、密談中の各々の語り口を思い起こしながら伝えるのだった。

そして、由井正雪と軍学塾は、知恵伊豆のその目論見の生贄(いけにえ)となるべく彼らによって仕立て上げられようとしていることを話した。

「たぶん、こうした話だけをお伝えしたとしても、余りの唐突無比な類だけに絵空事として信じてはいただけないだろうと思ったのです。そこで、密偵、林理左衛門らの動きを、お二人の目で、耳でご確認いただいたというわけなのでございます」

小平太は、先ほどから腕を組み、目を伏せながら、海念の話にひとつひとつ頷きで応じていた。が、ようやく目を見開き、語り始めた。

「これまでに、海念さんからは正雪軍学塾の疑わしさについていろいろとお聞きしてきたものじゃ。拙者は拙者なりに、正雪先生の思いを信じようとしてきた。それは、溺れる者がすぎる藁であったか

もしれぬ。

だが、いまとなつては、正雪先生がどうこうではなくなった。先生が真に穩便なご政道批判と『蝦夷地大開拓案』の嘆願者であろうが、あるいは幕府転覆の謀反をお考えであろうが同じことなのじゃない。そして、今日先生は、林らの挑発に乗り、謀反の意なきことを強くは否定されなんだ。たぶん、そのとおりなのだろう。あるいは、知恵伊豆たちの権謀術策にはまっていることをも承知されておられるのやもしれぬ。勝算があり得ない成り行きを運命的に受け容れようとされているのかももしれぬ」

「ならば、今こそ正雪先生のもとに結集して、浪人が意地を見せるべきではござらんか。拙者は、いまさら命など惜しゅうなどないわ。むしろここで、死に場所を失ってはまさしく生きる屍(しかばね)同然となるに違いないのでなあ……」

十三郎は、ここぞと思い、小平太の語りに割り込んで自分の思いを吐くように述べた。

「いやいや、十三郎殿。知恵伊豆を見くびってはいかん。以前にも話したが、拙者は彼奴の想像を絶する悪知恵と残酷さを見聞しておる。彼奴のことだから、十三郎殿が描いておられる華々しい死に場所さえ作らせない算段を済ましているに違いないだろう。

それはそうと、海念さん。彼奴らは、正雪一味を謀反の咎(とが)で召し取ろうという暴拳を為すのはいつだと申しておるのかのう」

海念は、やや戸惑った。保兵衛から歴史的事実として来年、慶安四年(一六五一年)の七月であることは聞いていた。しかし、知恵伊豆たちの密談ではそこまでの話は出ていなかったからである。だが、保兵衛の話の中で、「將軍家光が没した混乱に乗じて……」という言い回しを思い起こした。

「そこまでの言質(げんち)は聴き取ってはおりませぬが、將軍家光殿がご他界でもされようものなら、その直後にでも敢行されるのではと危ぶんでおります」

「將軍家光殿のお身体が悪いとのうわさは流れておるが、それほどに懸念されておるのか」

「たぶん、この先一年ほどではないかと……」

海念は、来年の春に没する事実を思い起こし、うわさめかした表現でそう言うのだった。

「あと一年余りということじゃのう」

「中村殿は今後どうなされるおつもりですか？」

心配げに訊ねる海念に、小平太はきっぱりと言い切るのだった。「拙者は、いつ終わろうと悔いはないが、静が憐れでならぬ。静、後日お上から嫌疑を掛けられぬ前に江戸を離れまいか、どうじゃ、考えておいてくれ」

矢継ぎ早に恐ろしい話ばかりを聞かされてきた静は、黙ってうつむいているほかなかった。海念は、小平太の判断によようやく安心できたのだった。

「十三郎殿は如何いたすおつもりですか？」

海念は、幾分かの不吉な予感を感じながら、それでも訊ねた。小平太も同様の心配を感じながら十三郎を見つめている。

十三郎は、しばし沈黙をつくった。が、やがて落ち着いた口調で意を込めた言葉を漏らすのだった。

「拙者は、拙者は知恵伊豆と刺し違えてやるのだ……」

(45) 十三郎殿をむざむざひとりで死なさせるわけにはいかない！

「海念さん、海念さん、起きてください」

まだ夜明け前だというのに、上野のとある古寺の前で叫ぶ者があった。

梅雨ももう明けようとする六月の下旬の早朝のことである。

「はいっ、どちら様で」

海念はとっさに脇に横たえた錫杖(しゃくじょう)に手を伸ばしながら答えるのだった。

「中村小平太でござる。よかった、探しあぐねたがとうとう見つけ

た」

小平太は、海念が静に告げていた寝泊りしている寺を探して海念を探していたのだった。海念は、万が一のために静にこの古寺の場所を教えていたのだった。もし、小平太に何かがあった際、力になれるはずだと思ったのであろう。加えて、自分に不慮の災難があった時に備え、小さな包みを静に預ける配慮もしていたのだった。

「海念さん、大変でござる。あの十三郎殿がいよいよ知恵伊豆に挑もうとしているのだ。昨晚、拙者宅にいろいろと世話になり申したと挨拶に来られたのじゃ。どうも様子がおかしいので、問い詰めたところ、白状した。」

「まさかと思っておりましたが…… で、どのような段取りだと申しとおりましたか」

「東海寺に密談に訪れる際をねらうのだと申しとおった。この間、しばしば品川宿に立ち寄り、知恵伊豆や浪人林たちの動向を探っていたようだ。月末に彼奴たちが結集するのを掴み、今日がその日だということだ。強く諫めたのだが、効き目がなかった。拙者にはどうすることもできなかったもので、間に合わぬかもしれないとは思っていたが、海念さんには知らせにきたというわけなのじゃ。如何したものでござろうか」

「かたじけのうございます。十三郎殿とは奇妙な縁(えにし)でございましたが、むざむざ彼を殺させるわけにはいきません。早速、手を打ちます。」

海念は、十三郎に対する自分の読みの浅さを悔いるのだった。十三郎が「知恵伊豆と刺し違える！」と口走ったその際に、もっと意を尽くして話しておくべきだったと後悔した。しかし、十三郎のそこまでの思い入れを軽んじてしまった。そうであった以上、自分のとるべき道はひとつしかない、とそう思う海念だったに違いない。

「拙者は、どうすれば……」

「事がここまで進んだ以上、中村殿は一両日中に江戸を離れるべ

きです。新しき住まいが定まりますれば、東海寺の、わたしの兄弟子、創円様気付で文をしたためてくだされ。事が落ち着き次第、追ってお伺いいたす所存です」

中村小平太が立ち去ったあと、海念はいつにない胸騒ぎにとらわれていた。先ずは、中村殿とはあれが最後となったのかもしれないと感じた。また、半紙に不可逆的に染みわたる墨のように、自己の命運にじわじわと染み込んで来る不吉な液体、鮮紅の血の滲みを、海念は心の奥底で確実にとらえてしまっていたのだった。

海念は、十三郎が、護衛の侍たちを含む知恵伊豆たちの列に、一人切り込んでゆく姿を、光っては消え失せる稲妻のように、何度も何度も脳裏に思い描いてしまった。ふつつつと立ち現れてくるその光景を振り払うことができなかった。そして、木陰から踊り出て十三郎に助力する自分自身の壮絶な姿が連なるのを打消し得なかった。十三郎を見殺しにする自分などが決してあり得ないことを重重承知している海念だったのだ。

ふいに海念は、保兵衛にもう一度どうしても会いたいと思った。時空超越である保兵衛のすみかに飛びたい衝動に駆られるのだった。ここから品川宿、東海寺まで歩くより、保兵衛の大森町まで超越した方が早いとも思えたのだった。

が、その時脳天を打たれるような衝撃を受けた。あることに気づいたのだった。時空超越に必須であったあの「けんたま」を、静に預けてしまっていることを今の今まで忘れてしまっていたのである。

やむを得ず、海念は急ぎ品川は東海寺を目指して歩くこととした。十三郎は、彼奴らの密会の前をねらうか、後をねらうかはわからない。前だとすれば、昼九つの正午には着いていなければならない。急ぐべしと思い、海念は古寺を出た。白み始めた空のもと、湿気を含む初夏の空気をひんやりと感じる海念であった。

日本橋に差し掛かった海念は、ちょうど日の出前の早立ちで東

海道を西へと出発する旅人たちと合流することになった。

ようやく夜が明け、旅人たちが吐く白い息が、浮かれて華やく雰
囲気をかもし出していた。そんな中で、ただひとり足早に歩く海念
だけがどこか地味だと見えたに違いなかった。

だが、その地味な相貌と見えた海念自身は、朝日に輝く街道風
景をいつにもなく鮮やかに受け容れていたのだった。もう二度と見
ることもないこの風景か、と思う覚悟が、見るもの目に入るものを
一様にいとしく感じさせていたのだった。

芝の浜あたりまでたどり着いた時、磯の香りが漂ってきた。立ち
止まって、被り笠を上げた海念は、左前方に朝日で鱗のように輝く
初夏の品川沖を眺望するのだった。

「美しい……」

素直にそう感じる海念だった。と、その時あることを思い起こし
た。かつてこの光景を見ながら、「人の世に何が生じようとも、海の
表情は変わらぬものじゃな」と言った在りし日の沢庵和尚であつ
た。海念は心の中でつぶやいていただろう。

『和尚様、和尚様の目から見れば、いまわたしがなさんとしている
ことは必ずや間違いなのでしょうね……。けれども、ことの道理を
超え、この選択以外に何も見えない今のわたしなのです……』

街道をひたすら進み、やがて海念は品川宿の入り口付近にまで
辿りついていて、ここまで来ればあとは時を見計らうだけだと、小さ
な安堵感を覚えた。

ゆっくりと歩みながら、海念は品川沖の海原を見回す。とその
時、小さな松林で囲まれた弁天社の姿がその視界の片隅に入っ
てきた。その瞬間何故だか懐かしさで全身が包まれる思いがし
た。昼九つの正午までにはまだだいぶ間があると自覚するや、立
ち寄りたい衝動がにわかに入み上げてくるのだった。

海念は街道の海岸側から社のある砂州へと掛けられている橋を
渡った。

慎ましく座している社、これを潮風から守るようにたたずむ数本

の松、松の木陰をたたえた小さな境内が、懐かしい帰還者を迎えた。

もう十年もの昔、海念は不思議な訪問者、保兵衛とここで至福のひと時を過ごしたのだった。あの時のふたりは、生きることへの無限の信頼感で充溢していたに違いなかった。それを支えていたのは沢庵和尚であったろう。ふたりは、和尚のその超人的な逸話を語り合っては目を輝かせたものだった。そんな思い出の染み込んだ場所がこの社なのであった。

海念は、松の根を踏み越えて波打ち際に向かう。手拭を波に浸し、それを固く絞って身体の汗を拭った。初夏の海原を渡ってきた涼しい潮風が、首筋や胸元を心地よく冷やした。さほど遠くない波間に、一そうの小舟が沖に向かっているのが見えた。

とその時、背後から人の声が聞こえた。波の音にまじって聞き取りにくい小さな声だった。

「お坊さま、お坊さま、あたしを助けて」

素早く胸元を正して振り返った海念の目に飛び込んだのは、長襦袢に宿のものらしい羽織を引っかけた若い娘であった。潮風を受け、社の陰に潜むようにか細い素足で立っていた。

「どうしたのですか？」

尋常ではなさそうな気配を感じながら、海念は娘に近づき訊ねるのだった。

「逃げ出したんです……」

娘は、この品川宿のとある宿の飯盛り女だと言った。郷里の母親が病を悪化させ、どうしてももう一度会いに帰りたくて、ご法度とは知りながら宿を飛び出したのだと泣きながら語った。やがて、宿の若い衆たちが追ってくるはずだとも告げたのだった。

追手が来るとの言葉を聞くにおよび、海念はとにかく社の中にかくまう手立てを急ぐことにした。

「やーい、坊さんよ。こっちへうちの女が逃げてこなかったかい？」

三、四人の宿の若い衆らしき男たちが、橋を渡りバタバタと下品な足取りで境内に飛び込んできたのだった。

「さあて、女はおるか、猫の子一匹見かけないが」

海念は、社の扉を濡れた手拭で掃除する様子で、そう答えた。旅の僧がたまたま遭遇した社をいたわってのご奉仕という雰囲気をつくっていたのだ。

「何をしてるんでえ？」

「ご覧のとおりのご奉仕ですぞ」

「まさか、その中に隠してはいまいな。正直に言わねえと痛い思いをするぜ」

男たちは、海念に詰め寄ってすごんだ。中の一人が海念のむなぐらを掴もうとした。その時、海念の左腕が振りあがったかと思えた瞬間、男は右腕が捻られ海念の左脇にもんどり打って転がった。これを見て、男たちは一歩後ずさりした。

「本当に隠してはいないんだな」

「なんなら開けてお見せしてもよいが、神仏を汚したばちはただでは済まぬぞ。もし、誰もいない時には、たとえ弁天様がお許しになられても、この拙僧がこの錫杖にて天罰を下すがよいか！」

男たちはしばし口ごもって怯えた。

「兄貴、沖に小舟が見えるぜ。ひょっとしたら、あの女、舟で逃げたやもしれませんぜ」

「よし、舟を出せ」

男たちは、舟置き場となっている砂州の方をめがけて走り去っていくのだった。

(46) 弁天社での出来事が海念の運命を変えてしまった.....

「もうしばらくそうしていなさい」

海念は、弁天社正面の鴨居を背伸びして手拭で拭いながら言った。

「はいっ」

と、社の中にかくまった娘からのか細い声が聞こえた。

宿屋の男たちが舟を出す様子を盗み見ながら、海念は旅の僧としてのご奉仕なる演技を続けていたのだった。

十三郎が事を起こすであろう時刻が次第に近づいていることが、決して気にならなかったわけではない。ただ、みすみす目の前で、不遇さの餌食となってしまった人をそのまま見過ごすことができなかったのに違いない。

やがて、その男たちを乗せた舟が沖の波間に見えなくなったのを確認すると、素早く海念も扉の内側に移るのだった。

「彼奴らは、舟で沖へ出た。しばらくは戻ってこないだろう。しかし、ここが安全ということではない。さあて、これからどう逃げ延びようというのだ……」

「申し訳ありません。もう一度だけ母に会えたら、どんなにお仕置きが辛くてもまた宿に戻ってもよいと思っています。どうか、郷里、下総のもとへ逃がしてください……」

海念にも、わずかな金で身売りされた娘が逃げ出せばその後どうなるかは推測がついていた。そんなことを覚悟した上での母への思いだと察すると哀れに思えてならなかった。妹の静や、中村殿の娘御の静とさほど歳の違わないこの娘の運命への同情の念を振り切ることができなかつたのであろう。

「わかった、わかった。わたしにできる限りのお助けをしましょうぞ」

そう言った海念は、格子扉から漏れる光の下で、懐紙を取り出し何やらしたため始めるのだった。そして、文をしたためながら、娘に名と郷里、下総の詳しい所在地などを訊ねた。娘は、名をおやえ、郷里は下総は佐倉であると蚊の鳴くような小声で答えた。

書きあがったのは一通の手紙であった。その表には『馬喰町裏店 政五郎殿』と宛名がしたためられてあった。

「よいか、これからわたしの言うとおりにすれば必ず佐倉の母御に会える。先ずは、この手紙を持ってわたしが信頼する方のところへ逃げ延びるのだ。そこまで逃げ切れれば政五郎殿がきっと力になっ

てくださるはずだ」

「ありがとうございます…… で、お坊さまはご一緒ではないので？」

「今、わたしにはよんどころ無い務めがあり、この後すぐに向かわなければならない。いや、もしそうでなくとも一緒という手立ては無理であろう。そこで、わたしにはひとつの思案がある。よいか、これしかないし、これなら万事うまくゆくに違いない」

娘は再び不安げな顔つきとなっていた。

「そなたはここから禅僧の僧の姿となって、ひたすら馬喰町の頭のところまで向かうのだ。今わたしがまとっているこの黒衣と被り笠の一式を、そなたが着込んでここを出てゆくのだ」

「では、お坊さまは？」

「わたしのことはよい。心配はいらぬ。この社の中に何かまとうものがあるに違いない。それから、江戸市中は不案内のようであるから、馬喰町までの地図もしたためておこう。被り笠の下でしっかりと確かめながら進むとよかろう」

そこまで話すと、海念は再び懐紙を取り出し、品川宿から日本橋までの東海道の要所要所と、日本橋から馬喰町までの道順をしたため始めたのだった。娘は、泣きはらした目を輝かせてありがたそうにじっとそれを見ていた。

その後、海念はなんのてらいもなく素早く下帯だけの姿となり、脱いだ衣装のすべてを娘に着させるのだった。脚半とわらじまで与えてつけさせた。それまで結っていた髪を小さく束ねさせ、それを手拭で覆い、被り笠を深く被らせた。最後に托鉢の鉢を持たせた。

こうして、やや小柄ながら、不審さを極力消し去った僧侶ができあがったのだった。ただ、錫杖だけは海念がこれから向かう役目のために渡さなかった。

「よいか、自分は男なのだと念じて歩くのだ。そうすれば背筋が伸び、歩幅もしっかりとなるであろう。どんなことがあっても笠をはずすではないぞ。心配するではない。きっと首尾よくゆくに違いない。

さあ、行きなさい」

おどおどとした様子がないわけではない娘ではあった。海念は娘の肩を押し、社からの出発を促すのだった。娘は、振り向いて、被り笠の下から、「ありがとうございました」と小さくつぶやく。黒衣の小さな肩と大きな被り笠は、格子扉の外へと消えた。境内を急ぎ立ち去る心もとない足音だけが残った。

海念は、予期せぬ時を過ごしてしまったことを懸念した。格子扉の外の陽射しは高く、松の木の木陰は小さくなっていた。やや焦りの心境が生じたが、下帯だけの格好ではどうにも身動きができなかった。

東海寺の境内へ向かうには、宿場を通らなければならない。そのためには、少なくとも乞食坊主としての姿だけはこしらえなければならなかったのだ。

海念は暗い社の内側を見回す。と、弁天を祀った棚が大きな布地で被われていることに気がついた。供えなどをどけておもむろに引き出してみるとそれは畳一畳を上回る白い布であることがわかった。よしっ、と海念は頷き、我が意を得たりと感じた。

もはや白地とは言えない汚れかたである。その中央に頭が入る裂け目をこしらえ、おもむろに被ってみる海念であった。同じ布から腰紐もこしらえた。それで腰で縛ってみると何とか格好ができあがった。娘が残していった宿の羽織はそのままでは使えない。これを裏返しにして両袖をはずして羽織ってみる。すると、何ともそれらしい乞食坊主の格好が仕上がったのだった。

社内に不審さを残さぬように整理したあと、海念は念のために格子扉から表の様子をうかがってみる。人気の無いことを知り、海念は社を飛び出していった。

遅れを取り戻す気持ちに急かされ、足早に東海寺境内へと向かうのだった。正午過ぎを迎えていたのであろう宿場の街道は、昼餉時のためであるのか人通りが少ない。人目に立たないことを、幸いだと感じていたに違いなかった。

ところが、東海寺境内の山林に潜り込んだ海念を迎えたのは、不気味なほどの静寂であった。わずかな遅れでしかなかったはずだ、と自分に言い聞かせた。が、十三郎による謀反の独り舞台は、すでにその幕を降ろしてしまっていた気配がただただ漂っていた……

遅れた負い目と、言いしれない不吉な空気で海念は心乱される。用心深く境内の林を縫い、その不気味な静寂の意味を必死で探る。が、その海念が体中で感じ取った状況は、惨たらしい事後処理が粛々で行われる光景でしかなかったのである。見覚えのある顔の僧たちが、寺に通じる通路を無言で忙しく走り回っている。目を凝らすと、手桶で水を運び、通路踏み石に飛び散った血のりを洗っていたのだった。

それが、知恵伊豆一味の血であったのか、十三郎の血であったのかは、わからないといえはわからなかった。しかし、不吉で重苦しい静寂は、海念をして十三郎の死の予感をただただ濃厚なものとさせていくのだった。

即座には動くべきではないと警戒した海念は、しばし木陰に潜み事態の掌握に注意を払った。はやる気持ちだが、時の流れを止め、海念は気の遠くなるような思いとさせられていた。

が、やがて、なんとあの兄弟子の創円がひとり通路を降りてきたのである。先ほど血が洗われていた場所に佇む創円は、手にした線香に火をつけ、その場にその線香を据え合掌を始めたのである。

海念は、じっとそれを見つめた。やがてその光景は、海念にすべての事態の脈絡を開示することになった。あの血は十三郎であったに違いない、もし知恵伊豆やその一味であったなら、創円さまがあのようには悼むはずはない。そして、仮に知恵伊豆たちがまだこの寺にいるとするなら、創円さまは彼らの手前あのようには線香をたむけることはしないだろう。彼らは、きっと事後にすぐさま屋敷へと取って返したに違いない、と。

思わず海念は、頭をうな垂れ、その姿勢を崩すこととなった。両手から、苔で被われた湿った地表の冷たさが伝わってきた。

重苦しい予感のすべてが現実に転化したことを悟った時、それまでは平然を装っていた海念に、突如として十三郎への言い知れない哀れさと、何ものかへの憤りの感情が体中を駆け巡るのをどうすることもできなかつたのだ。そうして歯を食いしばる苦しい時が流れていった。

やがて海念は身を起こし、創円のもとへと姿を現すのだった。「創円さま、海念でございます」

合掌を続ける創円は、身を縮めて驚いた。さらに、海念の異様な姿を見つけて再び驚きの表情となるのだった。

「海念ではないか。な、なんという姿だ。で、なぜここに……」

「驚かせまして申し訳ございません。込み入った事情がございます。で、御一行はお帰りになられたのですね……」

「そ、それはそうなのだが…… まあ、立ち話もできぬ。わたしについて参れ」

何か深い事情を察したような創円は、海念を自分の部屋へと導くのだった。

(47) 一陣の潮風が、運命の連鎖をかたちづくる……

品川宿を後にしたおやえは、東海道をひとり日本橋方向へとひたすら急いでいた。

飯盛り女として、普段歩くことの少ないおやえにとっては、つらい逃避行であった。まして、僧侶の衣装をまとい、大きな被り笠で身を隠しての急ぎ足は、そのうっとうしさと梅雨時のむし暑さで、生きた心地をかすませた。

ただ、追っ手の宿の若い衆が背後から迫って来るのではないかという恐怖だけが、おやえの背中をぐんぐんと押すのだった。

被り笠の下の視界には、街道の濁いた路面と、白足袋にわらじで包まれたもつれるような自分の足が見えていた。行き交う人は少ないようで、その視界にほかの人の足元をほとんど見ることがない。

黙々と歩くおやえの胸中には、時々、郷里下総は佐倉で息も絶え絶えとなっていると知らされていた母の面影が浮かんだ。また、心細いこんな時に、昨日、今日思いがけず優しく接してくれた人たちの姿が去来していた。

あのお坊さまがこうして助けてくれなければ、今ごろはあの暗い座敷牢で半殺しのお仕置きを受けていたに違いないと想像した。すると、思わず身震いが襲いかかってくる。名前もお聞きできなかったことに、ふと恥じ入る気持ちが生じた。この手紙の宛名のところにたどり着いたら、必ず教えていただこうと思った。

笠の下の視界によく浪人者の袴とわらじ履きの足元が見えてくる。そして通り過ぎていった。その時ふと、前夜まで品川の宿でお相手をする事となった若い浪人とのことが、ありありと思い浮かんできたのだった。

おやえが、その浪人と初めて会ったのは一週間ほど前である。

不幸なめぐり合わせでこの半年、宿の飯盛り女を務めてきたおやえは、自分が相手する男たちを、旅の恥はかき捨てとばかりの仕打ちをする情なし者ばかりであると見限り始めていた。だが、なぜだかその浪人は、そうした男たちとは異なる空気を持っているようにおやえの目には映ったのだった。

「お客さんは、どちらへお出でで？」

「おれか？ そうさなあ、どこへ行くんだらうか…… おれにもよくは分からぬが、きっと西の果てへでも向かうことになるんだらうな……」

「お国がそちらなのですか？」

「まあ、そんなところだ。で、おまえの郷里はどこなのじゃ？」

「あたしは、お侍さんと反対方向の東、下総よ」

「暖かいところだと聞いておるな。で、親御さんがおられるのか？」

「ええ、……」

「どうした？」

「母が病気で、いけない様子だと…… 下総から、京へ向かう村の人が立ち寄って教えてくれたの」

「そうか、それは気の毒じゃな。さぞかし飛んで帰りたいんだろうなあ。そうもゆかぬか……」

こんな場では禁物とされていた身の上話が、自然に口からこぼれてしまう不思議な雰囲気を持ったお侍さんだと、おやえは感じたのだった。

その浪人は、次の日もまたやってきた。そして、再びおやえを名指ししたのだった。

「お侍さん、まだお旅立ちじゃなかったのね」

「いや、しばらくこの品川に所用があつてな。いいではないか、だからまたこうして会えたのだから」

おやえは、その浪人がみやげだと言って持ってきたびわの実を、初物だと言って喜んだ。たっぷりと甘い水気を含んだびわの実を、二人は子どものように味わった。

そして、また次の日も、その次の日も、浪人は、やって来た。いつもおやえと一緒に食べるみやげを片手にしていた。それが一週間も繰り返されたのだった。

「今夜で上がりだ。所用は済んだ。明日は昼前にここを発つことになる。そんなわけで、今夜はおまえとゆっくり飲み明かしたいものだ」

浪人は突然一両小判を袂から取り出し、おやえに差し出す。そして言った。

「これで、ありったけ酒を持ってくるように宿の亭主に言っておいで。それから、明日の昼までは、いいか、昼まではだぞ、おまえを借り受けたともな」

「まあうれしい！」

おやえと浪人は、あり余るほどに並ぶ銚子を次々に空け、横たえ

ていくのだった。おやえは、驚くほどに吝嗇な客や、愚痴っぼい客の話をしたりして浪人を笑わせていた。いつの間にか夜がふけ、宿屋内は廊下も各部屋部屋も静かになってしまっていた。

「むし暑いもう」

酔いが回り、身体が火照った浪人は、ふらふらと立ち上がり、海に面した障子窓を開け放った。海原を渡ってきた一陣の涼しい風が、何のてらいもためらいもなく、傍若無人に部屋の中へと舞い込んでくるのだった。

「ああ、極楽じゃ極楽じゃ。そうだ、そうなのじゃなあ、この一陣の潮風のように、人も思い存分振舞ってみたいものではないか。そうは思わぬか、なあ、おやえ」

そう言って、浪人は楊枝をくわえたまま、しばらく静かな品川沖を見つめていた。が、何かを思い立ったように、窓から身を乗り出し両隣の部屋の明かりが消えているのを確かめる様子をした。そして静かに障子を閉めた。振り返った浪人は、真顔になっておやえに近づき、おやえの傍に立ったまま、小さくささやくのだった。

「おやえ、そなたはやはり下総へ飛んで帰りたいか？ 母御が存命のうちに一目なりとも会いたいのだろうな」

酔いで頬を桜色に染めたおやえは、目を白黒とさせてきょとんと見上げていた。しかし、浪人は酔ってはいながらも真面目な目つきに変わっていることを見逃さなかった。

「首尾よくうまくゆくかどうかは分からぬ。だが、もしおまえが心底、母御に会いたい、会えるのだったらどんな犠牲も惜しまぬというなら、明日拙者とともにこの宿から逃げればよい。昼までは、宿の者たちもおまえを探すことはないはずだ。それまでにできるだけ遠くまで逃げ、身を隠せば叶わぬ話ではないかもしれぬ。どうじゃ

……」

浪人をじっと見つめ、その言葉に聞き入っていたおやえは、その目に涙を溢れさせるのだった。こんな立場に身を落とし、不幸に慣れてしまっていたおやえは、運命を耐え忍ぶ以外、なんの思いも浮かばなくなってしまうのだった。が、今、この部屋に吹き込ん

できた潮風のような、単刀直入な浪人の言葉を耳にして、これまで自分を縛りつけていた固い縄目が、ばらばらとはずれてゆくような気がするのだった。

「かく言う拙者も、明日の昼には、どんな犠牲をも惜しまぬ一世一代の大勝負をしようとしている……」

「えっ、果し合いでもなさるので？」

おやえは、袂で涙を拭いながら、心配げに浪人の顔を覗き込むのだった。

「いや、それはそれじゃ。できればそなたを下総まで付き添ってもやりたい心境だが、そんなわけで二つない身体ではそれができぬ。そなたを宿の表まで連れ出すことしかできぬのが口惜しいてならぬが……」

おやえは、一瞬強く目を閉じたかと思うと、身を崩して泣き伏せた。ここまで自分に情けをかけてくれる男がいたことがうれしかったに違いない。

浪人は、おやえの傍らに座して再び冷めた酒を飲み始めていた。

「お侍さん、ひとつだけ教えてくださいな」

「何だな」

「お侍さんのお名前は何とおっしゃるの？」

「名前など聞いてもいたしかたなかるう……」

「いいえ、生涯……、一生心に刻んでおきたいのです」

「信州は諏訪の生まれの十三郎。掃いて捨てられるような食い潰し浪人じゃ」

「十三郎さま。こんな女に情けをかけていただきましてありがとうございます。」

おやえは、次第に行き交う人が多くなってきた通りにたどり着いていた。すると、もうすぐ、手紙の宛て先のところに着くのだという気がしてきたのだった。そう思うと、きっと、きっと願いが叶うに違いない、という思いもにわかに込み上げてきた。

十三郎さまとお坊さまが、諦めでよどむ泥水の底に沈んでいた自分のわがままな願いを、大事なものだとしてすくい上げて下さった。しかも、あの方たちに決して余裕がおありだったわけではなかったと思うと、そのありがたさで身が震える思いとなるおやえであった。

この自分の願いは、もはや自分ひとりのものではないような気さえしていた。自分のつまらない弱気で、台無しにはしてはならないとおやえは思うのだった。

日本橋界限に来た時、街のその賑わいの中でおやえは一時方向を見誤りかけた。が、懐から取り出した地図によって、それはほどなく解消できた。

そして、ようやく馬喰町の裏店、その路地にたどりついた時には、もう日は傾きかけていた。

路地におやえが差ししかかった時、奥の方から子どもたちが集まって来た。

「お坊さまは、海念さんのお友だちかい？」

「早く、直ちゃんを呼んどいでったら」

子どもたちは口々に叫んでいる。と、ここは任せてくれと言わぬばかりの直太郎が、すたすたと駆け寄って来た。そして、笠の下から覗き込んで言うのだった。

「何かご用でしょうか」

「政五郎さんのおうちはどこでしょうか？」

「おいらの父さんです」

「ああ、よかった」

と、それまでいぶかしげに取り囲んでいた子どもたちの中から、「女のお坊さまだぞー」という声がわき上がるのだった。

「おやえさん、とおっしゃいましたね。女の足でよくここまでお出でなすった。この政五郎、海念さんのお頼みとありゃ世間を敵に回したってお引き受けさせてもらいますぜ。どうか大船に乗ったつもりでご安心してくださいませいまし。おいおい、何をぼさーとしてるんでき。

着替えをはやく用意してあげねえかってんだ」

いつもながら、裏長屋の話の流れは早く、頭、政五郎のうちにはいち早く中村小平太と静が飛んで来ていた。そして頭に当てられた海念からの手紙は、字の苦手な頭の手から小平太に渡し、小平太が読み上げることとなったのである。事情のすべてを皆が一気に了解することになるのだった。

しかし、さらに詳しい事情を胸に秘めた小平太と静はといえば、その後の海念の消息を案じ、ただただ悲痛な思いを深めていくのだった。

(48) 十三郎殿、拙僧が、故郷の諏訪までお供いたしましょうぞ！

「なんという奇妙な格好なのじゃ。知らぬ者の目にとまらぬうちに、先ずはわたしの着替えをまとうがよかろう」

創円の後について寺に入った海念は、誰にも会うことなく創円の部屋に通されることとなった。そして、創円が用意して差し出した僧侶の衣など一式を、ありがたく頂戴してすばやく着替えた。身を整え、挨拶のために座りなおそうとする海念だったが、堅苦しいことは無用とばかりに、創円はあわただしくも言葉を継ぐのだった。海念は、無言で頭を下げるにとどめた。

「なんともおぞましいことが起きてしまった。この境内にて、とんでもないことが起こったのじゃ。そちも知っているであろう、あの知恵伊豆が、この境内にて暗殺を仕掛けられた。いや、その企ては未遂に終わった。仕掛けた浪人、諏訪十三郎なるものが、護衛の従者が操る鉄砲によって仕留められてしまった。たかが一人の浪人に対して、飛び道具を使つての護衛とは、いかにも知恵伊豆たちの情けなく卑怯な手口じゃ」

それを聞くと海念は、十三郎の無念さと口惜しさが想像され、悲

痛な思いが込み上げてくるのだった。太刀で切り結ぶならば、鍛え上げた抜刀居合術で十三郎の思いの丈の幾分かは晴らせたものを、鉄砲が使われてしまったとは、さぞかし無念極まりない思いであったに違いないと思えたのだ。膝の上で握る拳に思わず力がこもる海念だった。

また、相変わらず創円が知恵伊豆たちのことを好ましくは思っていないことを、言葉の端々から改めて感じ取った。だが、十三郎殿の名がどんな脈絡で知られてしまっているのかがにわかに気になり始めたのだった。

「今、その浪人を諏訪十三郎とおっしゃられました、創円さまはそれをどうしてご存知なので……」

海念は、悲痛な思いを抑えながら、冷静さを装ってそう訊ねた。

「いや、なんと彼の者が、懐深く遺書を抱えておったのじゃ。」

ああ、そういうことであったか、十三郎殿はやはりしっかりと死を覚悟した上で事に臨んだのだ…… 改めて十三郎の意の固さを思い知らされた海念であった。

『それをお見せください』と思わず口走りそうになったが、ぐっとその思いを飲み込んだ。今は、気になる事実を確かめることが先だと思えたのだ。再び訊ねるのだった。

「で、伊豆守殿の身はいかがなされたのでしょうか」

「悪知恵の働く御仁は運も強いと見える。駕籠を襲われ、その中で浪人が突き刺した刃で右腕をかすったらしい。しばらくは大騒ぎをしておった。しかし、この寺で手当てをするでもなく、すぐさま屋敷へ取って返したところをみると大事ではなかったはずじゃ」

海念は、知恵伊豆が無傷で逃げ切ったわけではなかったことを知り、悲痛さで充満させた心に、ほんの一滴でしかなかったにせよ潤いめいたものを得たのかもしれない。

「もとより、わたしは知恵伊豆のような者はいずれどこかでこのような仕打ちを受けるのではないかと懸念し続けておった。恨みを買わずにはおかない類の御仁であったからな。

で、この度が、どのような恨みによるものなのかと関心を寄せて

いたところ、先に言うた懐内の遺書を見つけることになったのじゃ。本来、知恵伊豆らは浪人のむくろを詮議してでも事の背景を探るものと思っておったのじゃが、一行は何を恐れてかあわただしい勢いで立ち去って行きおった。『寺にて詮議せい！』と言い残してな。また、残党が徘徊しているとでも警戒したのであろう。とにかく、よほど慌てたものと見える」

海念は、「残党」という言葉に一瞬、色めき立った。話さなければならぬ自分の事情をどう話すべきかと思いついていた海念だったが、ようやく話し始めるきっかけを得たと思えたのだった。が、むしろ創円の方が話さずにはいられない思いに急かされているようであり、その話の流れは止まる様子を見せなかったのだ。

「わたしは、その浪人の遺書を密かに読ませてもらった。が、なんとしたことだ、諏訪十三郎なる浪人は、単なる個人的遺恨で事を企てたのではなかったようじゃ。幕府御政道の浪人対策への異議申し立てとでも言う主旨を言い残しておったのだ。しかもだ……」

と、そこまで創円が話した時、部屋の外の廊下に使いの僧らしき者の影が近づいて来て、部屋の前で止まった。知恵伊豆の家臣が、刺客の身元が分かったかどうかを確かめに戻って来たということだった。

創円は、やや緊張した面持ちとなり立ち上がった。そして、自らをさとすように「うむ」と頷いたかと思うと、海念をその場に残して玄関へと向かって行ったのだった。

海念は、いやがおうでも警戒心と緊張感を高めていた。その遺書のことが発覚して、それが伊豆守の手に渡れば、この東海寺が巻き添えになるのではと懸念していたのだった。

しばらくの間玄関付近で、伊豆守家臣らしき者と創円との激しく言い争う声が響いていた。「然らば、なぜその場にてお改めなさらなかったのか」「信心篤き伊豆守さまのご裁量とは到底思われませぬ」といった創円の声が響き渡っていた。やがて、創円が苦々しい顔をして部屋に戻って来た。

「とんでもない輩達だ。わたしの意向はもはや迷いなく固まった。」

「いかなされたので……」

「身元を詮議する故、衣類と所持品のすべてを出せとぬかしおった。そこで、寺でお預かりした仏を、今さら追い剥ぎするとは仏道に反する不埒じゃと言いつ返してやった。押し問答の末、太刀だけを持ってゆかせた。さほどの名刀でもないようなので、何も判明せぬはずじゃ」

「その遺書のことは……」

「もちろん口にするはずはなからう。身元を明かす物は何も所持してはおらぬと言いつ返したわ。わしは、諏訪十三郎なる浪人を、この寺の片隅で手厚く葬ってやるべしと心を決めたのじゃ」

海念は、権力を笠に着る伊豆守たちとの間に明瞭な一線を描く創円の毅然とした姿勢とそのしぐさを、淀みと迷いのない、まるであの沢庵和尚を目の前に仰いでいるかのようだとい瞬感じていた。

「手間を取らせてしまったな。で、諏訪十三郎なる浪人の遺書のことじゃが。その遺書に込められた憤りの相手は、どうも幕府それ自体というよりも、浪人対策で奇策と悪知恵を弄する伊豆守自身であるようなのだ。いや、むしろ知恵伊豆自身に向けて書かれた形跡もある。だから、あながち幕府への謀反とは言い難いように受けとめられる節がある。

これは、よくは飲み込めない事柄なのじゃが、知恵伊豆は、あの、今江戸で人気を博している由井正雪なる軍学者を、浪人たちの倒幕の謀反人としてでっち上げるとい謀略を画策しているとのことなのじゃ。そして、正雪とその浪人一味とを大々的な見せしめの処刑に遇することで、全国に潜伏する浪人たちを威嚇する腹なのだと書いておった。

多分、諏訪十三郎なる浪人は、自分の企てが失敗した時には、この遺書が知恵伊豆に渡り、お前たちの謀略は既に露見しているのだから悪あがきをするなとばかりに、そうだ、まるで警告せんとでもするつもりで書いたようにも読めるのじゃ。ただ、たとえ警告されたとしても、何ほどの恐れを感じる者たちであるかは分からぬが

のう……」

海念は、創円の話を手静かに聞いていた。そして、予感しないわけではなかった事柄が、創円の口から次々と事実として伝えられるのが辛かった。虚しさや自責の念が急速に募ってゆくのを抑えることができなかつたのだ。

自分は、一体何をしてきたというのか。この寺で、知恵伊豆たちによる謀議の事実をつかみ、中村小平太殿や諏訪十三郎殿にそれを告げたのは、この人たちが由井正雪から離れることを促さんがためであった。幸い、中村殿は自分の意を察してくれた。

だが、十三郎殿には、すべてが裏目となって出てしまったではないか…… 知恵伊豆への怨みを無用に増幅させるだけに終わってしまった。十三郎殿のような一本気な人に対して謀議の事実を知らせたことは、ただただ死を急がせ、死に場所を与えることにしかならなかつた。そして、それを自分は読めなかつたというのか……
「どうしたのじゃ、海念。とんだ修羅場に飛び込んできて面食らっておるのか」

「は、はい」

「で、そなたの方の事情とは、いかなるものなのじゃ」

「はい、創円さまの今のお話からすれば、いかにもたわいのない話でありまして……」

「そうか。諸国行脚の修行の旅では思いがけない事態にも遭遇するものだ。わたしも、若い頃の修行中にはいろいろな災難にも出っくわしたぞ。多分、その類かと思うが、今日のそなたのように、盗賊に身ぐるみを剥がされたこともあったと記憶しておく。まあ、丸裸にされるのなら、逆らわずされたがよい。それも喜捨のひとつじゃな。その時は、遠慮なく、またここへ戻ってくるがよかろう」

「はい、ありがたきお言葉でございます」

海念は、もはや何も言うべきではないと心に決め始めていた。この東海寺が、そして創円さまたちが、自分のために窮地に立つことを何よりも懸念していたのだったが、話を聞かせていただくうちに、心配は無用のように思えたからだった。

むしろ、事情の詳細を話すことの方が、創円さまに心配の材料だけを投げかけるように思われてならなかった。すべてを押し殺す選択をこそすべきだと決心したのだった。

「創円さま、これも何かの縁かと思われます。再び旅立つ前に、仏に線香を手向けたいと存じますが、よろしゅうございますか」

「おうおう、そうするがよかるう。手段を誤りなさった仏さんだが、志はといえば我らとさほど遠くはない仏さんじゃからな。冥福を祈ってやるがよろしかろうぞ」

創円に丁寧な別れの挨拶をした海念は、寺の敷地内の片隅の十三郎の亡がらが安置された場所へとひとり向かって行った。

筵に被われた仏に、海念は心を込めた合掌をするのだった。

海念は、先ず、ひとりだけ逝かせることになってしまった自分の不首尾を詫げるのだった。自分が蒔いた種を刈り取れなかった悔いを吐露せざるを得なかった。また、遺書に託した十三郎の遺志は、悔しいことではあろうが所詮叶わぬ道理であることを、鎮痛な思いで告げるしかなかった。知恵伊豆のような阿修羅を、まともに敵としても始まらなかったことを、自戒の念をも込めて語りかけたのだった。

合掌を終えた海念は、仏の傍らにしゃがみ、被われた筵をはずして十三郎と再会する。その時海念を襲ったものは驚愕だった。十三郎の死に顔が、以外にも実に安らかな相貌に見えたからだったのである。しばし見つめていた海念には、とめどない涙と、十三郎との思い出の日々の情景が矢継ぎ早に訪れてくる。

『竹光を腰にする浪人は見ればわかるものじゃぞ』と自慢げに言い、自分も太刀を質草に置いて竹光を腰にしたことがあったと白状した十三郎殿。『では腰が妙にさみしくなりましたのう』と冗談を言った海念がいた。しかし、今の十三郎殿は、余儀なく太刀を奪われ、正真正銘に「腰がさみしく」なっている。

とその時突如として、海念は何かに打たれるように深い思いに引き込まれるのだった。武士の誇りや立場という背負いきれないほ

どの重荷を背負ってきた十三郎が、心の奥底で願い続けてきたに違いない身軽さと自由を、今おくれればせながら、ようやく手にしたのではないかと。そうしたことを、十三郎の安らかな面持ちが、紛いもなく伝えているように感じられたのだった。

『十三郎殿、あなたは、結局、あなたらしいやり方で、不自由な武士に潔く見切りをつけたのかもしれないね。わたしはといえば、今しばらく己の狷介な心と悪戦苦闘し続けなければならないようだが……』

海念は、十三郎の遺髪を目立たぬように丁寧に切り取った。そしてそれをゆっくりと懐紙に包みながら、ひとり呟いていた。

「拙僧が、故郷の諏訪までお供いたしましょうぞ」

(49) 思いつめた三人目の時空超越者、静さん！

「おーい、保兵衛。電話だってさー」

アーク溶接が放つ火花と煙が立ち込め、鉄材の切断や研磨の道具ががなり立てる騒音で満ちた作業場、その入口で同僚のケンさんが叫んでいた。作業中の保兵衛は、溶接ホルダーと閃光よけの面をその場に置くと、入り口へと向かった。

「誰から？」

「よくわかんねえけどさあ、品川の東海寺からだってよ」

「ええーっ、東海寺？」

大学三年の秋九月、来月にはゼミの合宿がありその費用などで物入りが見込まれてのことか、アルバイトの溶接作業にここしばらく入れ込んでいる保兵衛だった。いつもは、叔父の営む小さな鉄工所に、大学へ通わない日は出勤していたが、このところ仕事が立て込んでいるとのこともあり、連日アルバイトづくめとなっていた。

電話は東海寺の事務の人からだという。最初はなんのことか要

領を得なかった。いなかから出て来て人を訪ねている「中村 静」という若い女性が、ここに連絡して欲しいとメモを持って寺に頼み込んできたというのだった。

「わたしもどういうことかよく飲み込めないので、娘さんが持ってきたメモ用紙をちょっと読んでみませんか。えーと、海念さんへ。保兵衛。アパートの大家さん、03-***-****、アルバイト先、03-***-****、と書いてありますな。

それで、アパートの方にかけてみたらいらっしやらないようだったので、今こちらへかけたわけでした……」

「はい、その人が探しているのは確かにこのわたしです。わたしの知り合いなんです。いろいろとお手数をおかけしました。これから、すぐそちらに伺いますので、その人をそこで待たせてやっていただけますか。一時間ほどで伺えると思いますので」

保兵衛は、受話器を持ちながら全身に鳥肌の立つ思いがしていた。娘さんの持っていたメモ用紙とは、以前、自分が書いて海念に渡したものだからである。海念さんがどうかしたのだろうか、でその娘さんとは、一体誰なのだろうか……

保兵衛は、急用ができてしまったと叔父に断り、急いでシャワーを浴び着替えるのだった。

京浜急行で大森町から北馬場までは二十分少々である。電話がかかってから、およそ一時間ほどで保兵衛は東海寺の表門にたどり着いた。心配で待ちわびていたのだろう。その娘らしき女性が門の外に出ていた。時代劇の舞台から降りてきたままといい格好である。質素なかすりの和服に、脚半でわらじ、日本髪を結って、手には笠を持つといった旅姿なのであった。奇抜な姿としか言いようがなかった。

小走りで駆け寄る保兵衛をそれと気づいたのか、娘は軽い会釈をした。

「中村 静さんですね。海念さんとお知りあいの……」

「はい、保兵衛さん？」

保兵衛は娘の顔に、ほっとした表情を見いだしていた。
「ちょっと寺の方に挨拶をします。ここで待っていてください」
保兵衛は、門を入り、寺の人にお礼を言って再び駆け戻って来た。
「もうお気づきだとは思いますが、わたしは江戸から時空超越してきたのです……」
「やはり…… では、あの中村小平太さんの娘さん、ということでしょうか？」
「ご存知なので？」
「海念さんから少しだけですが、聞いておりました」
保兵衛は、込み入っていきそうな話を立ち話ですることできないと思った。人目をひく静の身なりは気にはなったが、北馬場駅近くに帰り喫茶店を探すこととした。

まず、静は突然の来訪の事情を、次のように話すのだった。
海念は、静の想いに応えるかのように、静に、万が一の時のためにと江戸での自分の住まいを知らせていたが、そればかりではなかったのだ。時代を超えた保兵衛とのことも打ち明けていたのである。自分の消息が絶えた時、これが自分のよすがだと言いながら海念は「けんだま」と保兵衛からの覚え書きを静に預けていたともいう。

東海寺の門前で「けんだま」を携えて無心となれば、保兵衛の時代に超越できる。そして、その覚え書きをその時代の東海寺の誰かに見せれば、保兵衛と連絡がとれるはずだとも聞いていた、というのだった。到底、静には信じられない話ではあった。

しかし、あの十三郎の件があって以来、ぷっつりと海念の消息は途絶えてしまい、静は居ても立っても居られなくなってしまったのだという。

話の都合で、静は、自分の知る範囲での、十三郎の顛末と、その後を追った海念の動きについても話すのだった。また、気になってしょうがなく、東海寺を訪れてみたものの消息はつかめなかった

ことも話した。そして、途方に暮れ果てた最後の手立てとして、こうして時空超越で保兵衛を訪ねたのだ、と話終えるのだった。

「そうだったのですか。思い切ったことをされたのですね……」

「無謀だと……」

「いいや、海念さんは幸せな人だと思ったのです。ここまで、心配してくれる人がいらっしゃるのですから」

「……」

「ただ、せっかく冒険をして訪ねていただいたのですが、このわたしのところにも何も連絡がなくて心配していたのです」

静の満面に落胆の影がさしていくのを保兵衛は見つめていた。「静さんは、十三郎さんの件の後、東海寺に訪れたとおっしゃいましたね。」

「はい、海念さんの兄弟子に当たる創円さまとお会いできたのですが、十三郎さまの一件があったちょうどその日にお寺を訪問され、再び諸国行脚の修行に向かわれたとおっしゃっておられました」

「すると、十三郎さんとは結局別行動となったということですね」

「はい。……それで、その時創円さまが、海念さんは追い剥ぎにでもあった格好で寺に来たとおっしゃっておられたのです。しかし、それはそうではないことが偶然わかったのです。その日、海念さんは十三郎さまを追う途中で、人助けのためにご自分の衣装のすべてをある娘さんに差し上げたのでした」

「えっ？ 僧侶の衣装を娘さんに？ それはどういうことなんでしょう？」

静は、海念がおやえを助けようとしていたことを話し、さらにおやえは偶然十三郎が事を起こす前に一緒にあり逃亡を助けたこと、またおやえは十三郎が確かに『果し合い』に向かうと聞いていたこと、さらに神田近辺に借りていた裏長屋が既に空けられていたことなども保兵衛に告げるのだった。

「とすれば、まず、十三郎さんは独りで討ち死にしたのではないかと思われませんか。また海念さんは、人助けで時をつぶしてしまった

ためにその場に間に合わなかったというようにも推測できそうです。そして、海念さんは、事に間に合わなかったために言い知れない心境となり、身を賣めて流浪の行脚に向かった、ということになるのでしょうか」

「……」

静はうつむいて押し黙ってしまった。

「ところで、静さんたちの時代では、今は確か慶安四年の秋長月のはずでしたよね」

「そのとおりです」

「では、すべての事の発端となった由井正雪が、謀反計画の咎ですでに処刑されてしまったわけですね」

「父の話によりますと、春四月に家光将軍が病没されてから幕府内の動きはやたらにあわただしくなると言います。そして七月には密告が相次いだとのことで、由井正雪さまご一行が、旅先の宿で役人たちによって包囲され、そのあげく全員が自害されたそうです。そのあと丸橋忠弥さまほか大勢の浪人たちが捕縛されることとなり、無残にも翌月鈴ヶ森にて多くの方々が処刑されたとのことでした。

わたくしども親子は、海念さんの勧めで江戸を離れ、縁あって先ほどお話しましたおやえさんの親御さんが住む下総の佐倉に身を寄せることとなったのです。そのこともあってか、嫌疑をかけられることはございませんでした。ただし、海念さんが何かの間違いで連座させられたのではないかと心配でならないのです……」

やはり、歴史は何ひとつ狂うことなく展開したのだと、保兵衛は頷きながら聞いていたのだった。

「その心配はいりません。中村小平太さんよりも早く軍学塾から離れていた海念さんに嫌疑が及ぶとは考えられないことです。また、知恵伊豆たちの謀略である由井正雪の乱については、鈴ヶ森にての処刑で終了のはずなのです。密告者たちへの褒賞も八月には終えており、彼らの目論んだことは達成されたはずなのです。この後来月に、幕府が末期養子制度の緩和を認めることで

すべてが完結したとされるようです」

「何が完結なものでしょうか……」

静は、いらだたく言葉尻をとらえた。不服そうな、やり切れない表情をあらわにするのだった。

「いや、確かにそうです。権力者たちの横暴によって、罪もない多くの人たちが命を奪われ、その余波で運命を狂わされた人々も多いのですから……」

「そうなんです。あの強くてやさしい海念さんも、そのために苦しさを背負い込むことになってしまったに違いありません……」

静は、押しとどめていた感情の堰が切られたように、うつむいてにわかに泣き始めてしまった。保兵衛は、店内の他の客の視線を感じたが、それはどうでもいいと開き直れた。権力の非情さと、それによってしわ寄せを喰らってしまう庶民の哀しさという構図を、いまさらのように眼前に見る思いがしたのだった。

ただその片方で、ふと何故だか、海念さんはきっとこの静さんのところへ戻ってくるに違いないと、保兵衛は強く予感するのだった。

海念さんは、これで二度までも、親しき人の修羅場を共有したことになる。保兵衛はそんなことを思い起こしていた。最初は、父親の「犬死」。しかし、その時の幼い海念さんはその修羅場に食い下がる術は持たなかったに違いない。だから、ただ足元に打ち寄せる血潮の波に、大声で泣き叫ぶ夢を見ることしかできなかったのだ。

が、二度目の友人の「犬死」では、たとえ悔恨を背負うことになったのだとしても、自ら動いたことによって、きっと何か得難いものを掴んだに違いない。それは、たぶん復讐などという短絡的なものを超えていたに違いない。ひょっとしたら、彼が、奇しくも心の中に住まわせ続けてしまった何ものかを追い出すまでは、修羅場は何度でも繰り返されるのだということを……

だから、今度こそ、海念さんの修行は、躊躇うことなく上り詰めてゆくに違いない、と保兵衛は強く予感するのだった。

「静さん、東海寺の門口まで送りましょう。わたしは、海念さんが

きっと静さんのもとへ戻られると確信しています。静さんもそのことを信じることです。どうか、気長に待ってあげてくださいね。それから、保兵衛がまた会いたがっていたと伝えてくださいな」

残暑とは言え、九月の薄暮にやや涼しげな風がそよいでいた。人影もなくなった東海寺表門の前にふたりは佇んでいた。「向こうに着いたら、今夜は品川宿に泊まるとよいでしょう。さあ、では海念さんのことでも想って無心の気持ちになることです。わざわざ来ていただいてありがとう」

「こちらこそ、ありがとうございました。それでは……」

保兵衛が軽い会釈の頭を上げた時、すでに静の姿は見事に消えていた。

北馬場駅に向かう保兵衛の視界に、ライトアップされた城南中学の高台の校舎がのぞいていた……

(50 最終回) 強い心でありえないなら、せめてやわらかい心で……

正月の戸外の夜は、十時ともなると静まりかえっていた。まだ松の内とあって、家々やビルの門口には松飾りや門松が見受けられた。毎年、この辺りの佇まいの変化に驚かされる保兵衛であったが、こうして独り、人影のない夜道を歩いているとちょっとした浦島太郎のような心境に陥るのだった。ついさっき祖父の家への年始挨拶の際によばれた酒の、その酔いも手伝ってか、いつもになく北品川の夜景は保兵衛をしんみりとさせていた。

保兵衛は、毎年、正月の七日までには川崎大師に参詣することを習慣としていた。川を流れる板切れのように、あちこちにぶつかりながら、どうにか都下で小さな会社を経営する立場となり、事業繁栄の祈願も心の支えのひとつと見なしていたのであろうか。

そして、その帰りには、大師のくず餅を手土産に、北品川の祖父の家に立寄ることも習慣となっていた。九十歳を超えた高齢の身を案じるとともに、年に一度だけでも、子ども時代に慣れ親しんだ懐かしい北品川界隈を目にしたいという願望もあり続けたのだろう。

旧街道方面に向かい北品川駅を目指していた保兵衛は、古い木造二階建ての佇まいが続く一角を通り過ぎたところで、ふと、今夜は遠回りしてみよう、という心境にかられた。子どもの頃に救急病院のあった角を左手に折れ、品海橋を渡るという、小学校当時の登下校の路を辿ってみたい衝動に、突然突き動かされたのであった。

意を決して歩を進めると、光景に応じたさまざまな思い出が蘇ってくるのだった。

この病院の脇に、茶色の壺がいくつか並べてあり、冬の登校時、何気なく覗くと割れた蓋の下に氷が張っていたものだった。いたずら気分から棒切れで突いて薄氷を割ったら驚かされた。もう黒ずんだ人の手首がによっきりと顔をのぞかせたからである。子ども心に救急病院の気味悪さを思い知らされたりしたものだ。

四つ角をはさんだ病院の前には、東屋という和菓子屋があった。祖父が麦粉菓子が好物で、しばしば使いに出されたことを覚えている。

品海橋近くに来ると、必ず思い出す光景があった。目黒川の川岸でのり養殖業の人たちが、畳一畳ほどの枠に三十枚ほどののりを貼ったすのこを収め、天日干しをしている光景である。冬の朝の登校時には、一仕事を終えた養殖業の人たちが焚き火で暖をとっていた。かばんを手にしてあたらせてもらったことをありありと覚えていた。

品海橋の上からは、南へと伸びた目黒川上流の両岸にぎっしりと漁師舟が並べられた様子が見渡せたものだった。のり養殖ときす釣りなどの乗合い漁が盛んだっただころの、今思えば懐かし過ぎ

る光景である。

バス通りのT字路を右手に折れると小学校へとつき当たる一本路が続いている。寒々しくともる街灯、蛍光灯の白い光が人影のない寂しいアスファルト舗道を照らしていた。

この路には小学校当時のすべてが染み込んでいると感じる保兵衛であった。いや、当時の小学生の半分はこの路を通ったはずなのだと思い返した。

みんなどうしているのだろうか…… こうやって訪れるものもいるのだろうか。

あたかも、自分や多くの小学生たちが残した足跡が、塗り込められたアスファルトの下から、ざわざわと立ち上がってくるような気配がするようだった。次から次へと断片的な思い出たちが蘇ってくるのだった。それらをなすがままにしながら保兵衛は歩いていた。

いつしかすでに四十代半ばとなった保兵衛だが、このところ感じ始めていたことは、時代が自分たちを追い越してゆき、呆然として取り残されている団塊世代という印象だったかもしれない。まるで、何十万人もの浦島太郎が彷徨っているかのような……

保兵衛の会社はコンピュータ・ソフトウェアの開発に携わっていた。先端のシステムに、斬新な開発環境や新しいツールといった時代が生み出した技術の前衛に日々直面していた。が、決してそれらの変化にかき乱されているとは思わなかった。

振り返れば自分たちの世代は、テレビを初めとして、常にこけおどしの新しいモノの登場と歩調をともにしてきたのであった。新しいモノの出現でうろたえないで済む免疫のようなものが埋め込まれてきた、というそんな自負のようなものがあったからであろうか。

むしろ違和感は、若い従業員や若い人たちとの交流、そして若い世代向けのカルチャーとの間で生じていたのかもしれない。世代の断絶なのだから、やむを得ないと言えそうだと思うのではあった。また、自分たちの世代の、どちらかと言えれば暑苦しいふる

まいを振り返るなら、むべなるかなとも思えるのだった。

加えて、保兵衛の心境を曇らせていたのは、自分たちの成長の脇に当然のごとくあった経済の成長が、バブル崩壊を機にして、もはやあり得ないだろうと推測されることだった。どこまでも、前方にあり続ける頂上を目指して進む、そうした姿勢を暗黙のうちに自分のものとしていた世代にとって、下山してゆかなければならない時代というもの、いかにしても受け入れがたかったのかもしれない。

ガンバレー、ガンバレーとあどけなく掛け声をかけ合い、がんばることの意味をけなげに信じ合っていたあの小学生の頃のさまざまなイメージが、いつしか保兵衛の目頭を熱くさせていた。人影のないことを良いことに、流れ落ちる涙を拭くこともなく保兵衛は歩き続けた。が、小学校の正門が滲んで浮かび上がった時、静かに込み上げていた切なさが突然堰を切るように言いしれない哀しさに変わるのだった。保兵衛ははじめてスーツのポケットからハンカチを取り出した。

どのくらい、唐突な感情の波立ちに身をまかせ、呆然としていたのであろうか。

やがて、保兵衛は、正門に向かう自分の背後方向に利田神社、あの弁天社があったことを思い起こすのだった。そして、当然のごとくあの海念のことを思い出さずにはいられなかったのである。

保兵衛が酔った勢いで結局不首尾に終わってしまったタイム・トラベルを試みたのは、この時なのであった。海念との再会への衝動と、高まりに高まった浦島太郎の心境がなさしめたまわめて乱暴な冒険なのであった。

あの事件の後、静の訪問があって以来もう二十年以上の時が流れていた。が、その間、海念の訪れはまったく途絶えていた。さぞかし諸国行脚の修行の後、落ち着くべきところに落ち着いているに違いないと、保兵衛はそう信じ続けてきたのだった。

しかし、この夜保兵衛は、無性に、唯一無二の友人とも言える海念と飲み明かし、語り明かしたいと思ったに違いなかった。

だが、もはや子ども時代のように無心などにはなり切れない保兵衛、中年の酔っ払いは、念じ損なって海念が身を寄せる以前の東海寺へとランディングしてしまったという不始末ではあった。幸いにも、沢庵和尚とめぐり合うこととなり、保兵衛は得難い講話を聴くことができたのだった。沢庵和尚は、川崎大師のくず餅を、これは珍味だと言ってもぐもぐとほおばり、茶をすすりながらとくと話してくれたのである。

その講話の中で、和尚は現代でも十分に通じる多くの真理を保兵衛に与えたようだ。

そのひとつが、まさしく「四十不惑」(四十にして惑わず!)からほど遠いがゆえに思い悩む保兵衛に向かってぶつけた歌なのであった。

「心こそ心まどわす心なれ心に心心ゆるすな」

これは、遠き時代からの訪問者に隠すこともなからうと言って沢庵和尚が明かしたところによれば、和尚が、武と禅の極意を伝えようとしていた柳生宗矩のために書いた『不動智神妙録』の最後に記した歌だったという。

子息の柳生十兵衛の行状に悩み、自らの思い上がりや、軽率きわまりない所業など虚妄や夢幻に心とらわれる柳生宗矩に対して、己が心に勝ち得る自由こそが極意である、これが禅の日常心だと諭したというのであった。

煩惱と言うほかない我執や、言ってみれば妄念としか言いようのない感情が振りほどけずに悶々としていた保兵衛にとって、この歌は何ものにも優る妙薬だと思えたに違いなかったであろう。

いまだに保兵衛は、パソコンに向かって一仕事を終え、ぼんやりとコーヒーをすすする時などに、ふとこの歌を思い起こすことがある。

これにまつわる記憶の多くが、時とともに次第に変容していったとしてもである。

現に、タイム・トラベルが真実あったのかどうかにしてもその現実感が薄れ始めていた。妙にその部分の記憶は希薄となり、夢が記憶に混入した結果のようにも感じられることがあるからだった。さらに言えば、海念の实在感さえもが夢と薄れゆく記憶のはざまで錯綜することもあった。実は自分の前身、分身であったのかもしれないという危うい思いに紛れ込むことすらあったのだ。

ただ、この歌だけが鮮やかな存在感を放ち続けていることに気がつくのだった。

時代や社会は心まどわされたごとくますます迷走を続けているように、保兵衛には感じられた。大きな破局がじわじわと迫っている気配も濃厚だと思えてならなかった。また、そんな環境の中で、不安が不安を呼ぶかたちの大小の渦が社会のあちこちで絶えないように見えた。心をゆるすすすなら、いくらでも心とらわれてしまう罨が、自分の、人々の、その内部に張り巡らされた時代だと痛感するのだった。強い心でありえないなら、せめてバランスを失わないやわらかき心でありたいと、保兵衛はそう感じていたのだった。

